
世界を飾るもの

咲真みのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を飾るもの

【Nコード】

N7829V

【作者名】

咲真みのり

【あらすじ】

見覚えのない荒野を朦朧とした意識で彷徨う者があった。ここは何処なのか、自分は何者なのか、何一つ解らずに――。時を同じくしてヘンディア大陸の乾いた大地を旅する放浪者一行の一人、ルヤはある日体調を崩し、猛獣退治に赴く家族のような存在である三人の仲間の帰りを村で一人待つことになる。そしてまた、同じ荒野の別の座標にて、とある現操術師げんそうじゅつしはただならぬ気配を感じ馬車を飛び出した。血まみれで倒れている旅人を助け起こし、辺りに充満する狂ったような威圧感に身を凍らせる。そこで彼が目にしたものとは

――？ 一見無関係な事象、しかしそれらは非情な運命として複雑に絡み合っていくことになる。

透明な薄闇

透明な薄闇

強い日差しが、赤い地面に黒い人影を焼き付けていた。

その影が自分のものだということに、一瞬遅れて気が付く。

目を上げると、何処までも続く褐色の地平線。熱い風が、汗と砂埃にまみれた頬に容赦なく吹きつけ、過ぎてはまた吹き荒ぶ。

今、自分は何処にいるのだろう。

もう何日も歩き続けているはずなのに、そんな疑問が頭を擡げた。この世界に、自分以外に生きているものはいるのだろうか。歩いても歩いてても何も無い、この世界に何かがいるんだろうか。

考えてみたら、荒野を歩いている自分に気付いてから、空腹を覚えたことがないように感じる。

水は、飲んだだろうか。

もしかしたら、これは夢なのかもしれない。

だが、そうだとしたら一体誰の――？

そんな、ぼんやりとした意識を細い糸で繋ぎ止めている。

この世界は、自分は、本当にここに存るのか？

ひとつでもいい――証を探している。

悠久に抱かれし場所

悠久に抱かれし場所

いつも通りの風景だった。

延々と続く荒野の彼方に小さな村の影を見付け、安堵感に包まれながら皆で顔を見合わせて笑う。

宛てのない、気ままな放浪の日々。生活は厳しく、時にはその日の食事にさえ困り、身に付ける物も汗と埃が染み付く着古したものばかり。これといった楽しみもなければ、心からの安息もない。そんな、割に合わない、飾り気もない旅暮らしだったけれど、たったひとつ、居場所だけが、生まれてから欲しくて欲しくて堪らなかった自分の居場所だけがそこにはあった。自分を真正面から受け止めてくれる仲間達と心から笑い、苦しみも悲しみも分け合う。そのことが、ただそれだけのことが、全ての欠け落ちた部分を溢れる程に満たしてくれた。

まるで、奇跡のようだと思った。

きつとここが、私が最後に還ってくる故郷なんだろう。

「いいから、お前は大人しく寝てろって言ってんだろ」

苛立たしげに言い切られ、怯みながらもふくれ面になる私を見て、目の前の見慣れた旅仲間、ジェドルはうんざりした様子で肩を竦めた。その仕草は、日干し煉瓦の壁に灯るランプの光に揺れ、酷く気怠そうに見える。

「少し熱っぽい気がするだけだよ？ 行けるってば」

「だから、足手まといになるって言ってんだろーが！ 置いてかれるのが嫌なら自分の体調くらいしっかり管理しとけ、無理して悪化でもされたら俺達全員が足引っ張られることになるんだぞ！ いい

か、これ以上言わせんな、お前は留守番！」

捲し立てられるその一言一言は、確実に私の胸をぐさりぐさりと突き刺して、食い下がるために用意しておいた台詞の数々は強く嚙んだ唇の奥でしぼんで消えていく。

悔しいけれどジェドルの言う通りだった。一緒に旅する四人の仲間の中で、私が最も未熟であることは疑いようのない事実。何をしても皆のように上手くはこなせないし、強くもない。どんな場面でも結局最後は皆に守られるような形になってしまう。こんな風に体調を崩しやすいのも私だけだ。放浪者としていつまでも一人前にならない自分がもどかしくて悔しくて、つい、我慢できずに今のようが無理を言ってしまう時がある。それこそ、半端者の子供っぽい我が儘にしかないのに。

私が俯いている間に、ジェドルはこちらに背を向け、淡いオレンジ色の光に浮かぶ宿の廊下を歩き去ってしまった。

呼び止めることも出来ずその後ろ姿を見送っていると、通路の向こうからジェドルの肩を軽く小突くようにして、旅仲間の一人ビスラが顔を出す。

「ジェドル、なに病人のルヤいじめてんだお前は、ホントは心配なくせて」

長身で、短く刈り上げた淡い金髪と濃紺の瞳をした、穏やかでいつも私達を優しく見守ってくれている、兄がいればきつとこんな風なんだろうと感じさせてくれる人。剣の腕も四人の中で頭一つ飛び抜けていて、多分、何処かで本格的な実践訓練を積んできたんだろうとジェドルは言っていた。

「ジェドルの言ったこと、あんまり気にすんなよ？　こいつ偉そうにしてるけど、言ってることはいつも勢い半分なんだからな」

ビスラはこちらに向かって手を振り、優しく声を掛けてくれた。

その言葉は本当に有り難かったのだけれど、ジェドルの指摘が否定しようのない事実だと実感している私は曖昧に笑い返すことしかできなかった。

と、後ろから肩を叩く手があり、振り返るとそこにいたのは同じく旅仲間のサーナ。

「ビスラの言う通り、あいつ、ジェドル、あんなこと言ってるけどあんたに無理な鍛錬指示したこと後悔してんのよ。あそこまで真面目に、欠かさずやるとは思ってなかったんじゃないの？ それでなくとも、ルヤは食事当番とか細々としたことまで人一倍頑張ろうとするのにさ」

長い髪と褐色の肌が印象的な、明るくさばさばとした大人の香りを持った女性。口調はきつめだけれど誰よりも周囲に気を配り、自分の取る行動一つ一つにきちんとした信念を持つ人。私のことを妹のように可愛がってくれて、でも時には厳しく叱ってくれる。この人に会って私は少し自分の過去を後悔した。この人のように、あの女性、私の本当の姉も私を思ってくれていたのかもしれないと。もう、全てが遅すぎるけれど。

「でも、この程度で無理をしたことになる私が情けないんだよサーナ。これくらいで熱を出す私が」

「また、あんたは……いい？ あんたは十分このパーティの一員として役に立ってる。それを分かうともせずに、無茶して周りに心配掛けることの方が情けないことなんだよ？」

「……サーナ」

「今回はゆっくり休みなさい。それで私が今言ったことを肝に銘じて、また一緒に旅を続けよう、ね」

「ありがとう、サーナ。……だけど、きっとジェドルの考えは違うんだと思う」

私が目を伏せて力無く笑うと、サーナは大きく息を吐いてやれやれとばかりに首を振った。

「違わないって！ ねえルヤ、村で一番宿泊料の高いこの宿、きちんとしたベッドがあるからって理由で取ること決めたの誰だと思う？」

「え？」

「ジェドルだよ。口ではああ言ってるけど、一番あんたのこと心配してんのはジェドルなんだよ。まったくいつまで経っても感情表現が子供なんだから、あいつは」

予想もしていなかったサーナの言葉に驚いた。

まさかあのジェドルがそんな気遣いをしてくれていたなんて。ただ呆れられて、苛つかせているだけだと思っていた。もしこの宿が私の為だというのなら、それはやはり皆の負担になっているということ、申し訳ないことに変わりはないのだけれど、それでも、心に溢れてくるこの気持ち、嬉しいという気持ちは消すことができなかった。

「ジェドル」

私は思わず、ビスラと別れて通路の奥の階段を降りようとしているジェドルの元まで駆け付けていた。

一拍おいて振り返るジェドルは、いつもの仏頂面。

「ジェドル、さっきは我が儘言ってごめんね」

少し驚いたような彼に構わず続ける。

「私、宿で待ってるから、ちゃんと体調戻して、今度はもう、みんなに迷惑掛けないようにする。だから気をつけて……早く帰ってきてね」

一瞬、ジェドルは複雑な表情でこちらを見詰め、何かを言おうとして、でも結局言葉にせずにやめたような仕草をして黙り込んだ。そして今度は気を取り直したように口を開く。

「ああ、簡単な依頼だ、すぐに戻る。それまでに完璧に治しとけ、安宿とはいえ、タダじゃないんだからな」

その、何処か温かい響きを持った憎まれ口に、私は笑って頷いた。

闇の向こうに差す光

闇の向こうに差す光

その気配は常軌を逸していた。

馬車の中で、先輩術師と世間話をしていたつい今さっきが、遠い昔のこのように、今と、隔絶してしまっている。

眼前には深い傷を負い、血にまみれた旅人らしき若い男が仰向けに倒れて息も絶え絶えに何かを呻いていた。そして、遠く、数十歩先の砂に埋もれた岩陰には、大きな布袋のような物が無造作に転がっている。動かないそれをもう一度目を凝らして見直してみても、心臓が跳ね上がるのを感じた。

——あれは……まさか、人間？

どこか澁んだ、現実感の無いその光景に息を呑みながら、違和感を振り払うように男に駆け寄った。

「しっかり、どうしました！ 待って、今治療を施しますから」

言いながら、目だけは周囲の景色を何度も往復する。

——なんだ、この気配は……

この旅人を襲ったのも、この気配を発する何かなのか？

分からない、だが世界を劈く叫びにも似たこの気配はただ事ではない。

一刻も早く彼を連れてこの場を離れなくては。

本能が強く警鐘を鳴らしている。

早く。

早く。

早く！

焦れば焦る程、身体が空回りするように上手く動かせない。

旅人を肩に担ぐ。ぐったりとした大の男一人を背負うには明らか

に腕力と体格が不足していることを自覚しながら、構わず渾身の力で乾いた砂を蹴り歩を進める。

——いる。

そこ、すぐ傍の岩陰だ。

そいつはそこからこちらを見ている。

西に傾きだした日差しがくつきりと影を作っているあの岩陰に。

頭を固定されたかのように振り向くことが出来ず、ただただこの場所を離れようと躍起になった。

しかし、足下の砂がそれを阻む。

「くっ……」

喉の奥から、焦りが込み上げる。

何をしているんだ、僕は——

「ルヤ……」

「えっ」

背中の旅人の口から微かな音が漏れて、思わず彼の顔を覗き見た。

「ルヤ……」

「しっかりして下さい！ ルヤって？ 人の名前ですか？ あなたを襲ったのは一体何なんです？」

旅人の血に汚れた目が薄く開かれる。ぼんやりと焦点は定まっていない。

「ルヤに……伝えてくれ、みんな、死んだと……独りになっても……お前はッ——ゴホッ」

そこで血にむせかえるように咳き込む男の酷たらしい姿は、生死の境を彷徨っている状態であることを肌で感じ取らせた。

「みんな？ ……いや、取り敢えずこの場所から動きましょう。あなたはまだ生きてますよ！ 大丈夫、そのルヤさんの所へ自分で伝えに帰れますから」

精一杯の平静を装って、明るく旅人に語り掛ける。

その声が聞こえているのかいないのか、男はうわごとのように続けた。

「あいつを……独り……ない」

「……なんですか？」

掠れた、絞り出すような声だった。

「独り……したく……ない」

肉をむしり取られたような右腕の深い傷。否、それだけではない、胸や肩、腹や足、皮の胴衣を抉られ、身体中に切り裂かれたような傷があった。ぱたぱたと砂に落ちていく血は、夕日の赤に黒く染められていく。痛みに顔を歪めながら、旅人は必死に声を出していた。薄く開かれた目で何かを見ようとしていた。生きようと、していた。ルヤというのは、どうやらこの旅人にとって大切な人間であるようだ。それだけははっきりと伝わってくる。

誰か、会いたい人がいるんだ。

残して、逝けない人がいるんだ。

そう感じた瞬間、不意に浮かんでくる名前。

——リリファ

心の底にくっきりと刻み込まれて、消えない名前。

この人は同じなんだ。

リリファと。

「あなたを死なせません。絶対に」

強く確信を持った声を旅人に投げ掛け、再び砂を蹴る。

「ルヤさんの居る所に戻れますよ、信じて下さい」

一歩、また一歩と馬車のあった方角を目指す。

ふと気付くと、あの気配——あの狂った叫びのような気配はもう、先程の岩陰にはなくなっているようだった。

旅人に気を取られているうちに、何処へ消えたのだろう。

周囲を見回そうとした時、遠くから自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ローク……！」

あの声は、先輩だ。

「ユジフ先輩……」

叫び返そうとして、背後にあるものに気が付く。

身体の芯が、凍り付いたように冷えるのを感じた。

近くに在りすぎて、気配の歪みが大きすぎて、感覚に収まりきらなかっただけだった。少し視点をずらせば感じ取れる、内側に浸食してくるような、途方もない、望みのない何か。

俄に、呼吸が空転し始める。^{にわか}

意識が、ゆっくりと握り潰されていく。

抗うには、もう、振り向き、この目で見極めるしかなかった。

例えそこに、何があろうとも――

乾燥したこの地方にしては珍しく、どんよりと曇った重い空を宿屋の窓から見上げながら、ルヤは今日になってもう十数度目になる深い溜め息を吐いた。

旅の仲間の三人が、滞在するこのコロイ村からの依頼で近隣に出没するというスナヒヨウ退治に赴いてから、今日で丸六日が過ぎようとしていた。

特に凶暴ということもないが、商人が寄りつかなくなるからという理由で頼まれた、それ程難しくもないはずの依頼だった。出発時は三日で帰ると言っていたのに、その倍近くの日にちが経過してしまった今も、待ち焦がれるルヤの思いとは裏腹に、彼らの姿は荒野の彼方に気配すら見えてこない。敵のねぐらを探すのに手間取っているにしても、そろそろ食糧や水だって尽きている頃のはずだ。それに、あの三人は放浪者としてかなりの経験を積んだ実力者であり、無茶な深追いは絶対にしない。そのことを長い付き合いでよく知っているルヤは、嫌な胸騒ぎを振り払うことができずにいた。

宿賃として支払う資金にも、そろそろ余裕がなくなってきた。六日間といえど、放浪暮らしが長いルヤにとって、これ程一所に長く寝泊まりしたのは本当に久し振りであった。愛着など湧く暇もなく次の目的地に旅立つのが日常だった身としては、見慣れ始めたこの部屋に落ち着かないような違和感を感じる。

日干し煉瓦を土で塗り固めた、くすんだ淡茶の色味をした内壁に据え付けられている古めかしいランプが、窓が小さく昼夜を問わず薄暗い室内を柔らかい光で照らし出している。四日目までは当たり前のようにこの宿で三人の帰りを待つつもりでいた。だが、昨日を経て今日になり、明日の行方も定かではないことを認識せざるを得

なくなった今では、皆で苦勞して少しずつ溜めてきた旅の資金が目に見えて減っていくのが急に寂しく感じられて、もう、そろそろ宿を出た方がいいのかもしれないと考え始めていた。

綺麗に整った室内をぼんやりと眺めながら、もう一度痛みを伴う息を吐く。

胸の奥が、鉛を沈めたように重い。

もうすっかり体調は回復したと、剣の鍛錬も普段通りにこなしているのだと、帰ってきた彼らに得意げに報告するつもりだった数日前の自分が、やけに懐かしく感じられた。

それから暫く木の椅子の上に蹲って目を閉じていたルヤは、やがて響いた優しいノックの音で我に返った。

皆が帰って来たのではないかという、もう何度目かの期待を抱いて顔を上げ、急いで木のドアに駆け寄る。

そして、その期待は再び虚しく空を切った。

「やあ、気分はどうかと思ってね。今、下でハニーパイが焼けたんだけど、どうだい？　少し気晴らしに降りてきてみたら」

ドアの外、明かり取りの窓から入るほんのりとした光を受けて通路に立っていたのは、この宿の女将、メルアだった。

ふくよかな中年の女性で、人の良さそうな笑顔と、柔らかい響きの声が、大雑把な口調の中にも、品の良さのようなものを滲ませている。色白の肌から、この地方の人間ではないことが見て取れた。

「ハニーパイ……ですか？」

女将の意外な誘いに、戸惑う。

開いたドアの向こうから染み込むように漂ってくる、甘く、香ばしい匂いは、確かにハニーパイの香り。脳裏に蘇る、あの、懐かしくもない遠い過去の景色。都会の匂いだと、ルヤは感じた。

「あんたの故郷が、私と同じサラニアだと聞いていたからね。久し振りに焼いてみたんだよ、懐かしいだろう？」

その軽い調子の口振りに、ルヤは驚きを隠しきれずに女将の顔を見返した。簡単に言っただけのけるが、ハニーパイを作るのに必要な蜂

蜜は、特産地であるルヤの故郷でさえ高価な品だった。確かこの辺りでは相当な贅沢品で、簡単には手に入らないと聞いたことがある。「そんな暗い顔して部屋に閉じこもってたって、気が滅入るばかりだろう？」お仲間さん達が帰ってきて今のあんたの顔見たら、きつと驚いちまうよ」

女将の、その曇りのない朗らかな笑顔に、形式的で他人行儀な返事を喉元で掻き消されたルヤは、代わりにそっと微笑みを返した。

「……そうですね、こんなにふさぎ込んでいたら、帰ってきたみんなに、きつと笑われてしまいますね」

階下に降りて、食堂で口にしたハニーパイは、想像していたよりも甘く、懐かしい味がした。もう、忘れてしまいたかった生まれ故郷の味。思い出すことを避けたあの頃の思い出。それも、もう自分にとっては本当に遠い過去になったのだと、胸の奥に空いた、暗く、深い穴は、もう大分小さく塞がったのだと自覚することになった。そしてそれは同時に、自分をここまで引っぱり上げてくれた、ジェドルと、サーナと、ビスラの三人が、どれほど自分にとって大切な存在だったのかを実感することにも繋がっていた。

神妙な面持ちで、まるで儀式かなにかのようにハニーパイを一口一口噛み締めて食べているルヤの様子に、女将のメルアは不安げな目をして尋ねてきた。

「あの……もしかして、不味かったかい？ 正直に言ってくれて構わないよ？ 偉そうに誘っという何だけれど、本当に久し振りに焼いたから、味の方は自信が無いんだ」

その声で我に返り、現実には焦点を戻したルヤは、いつの間にか酷く申し訳なさそうに項垂れている女将の様子を見て、思わず吹き出してしまいそうになりながら首を振った。

「いいえ、私が子供の頃に食べたものよりずっと、温かくて、優しい味がします」

「温かくて、優しい味、か……それは褒め言葉と受け取っても良い

のかい？」

少し戸惑ったように首を傾げる女将に、ルヤは深く頷いて見せた。

「はい。こんな素敵なお菓子に、私は久し振りに出会いました」

零れるような笑顔でそう言うルヤを見て、女将も柔らかく笑った。「あんたには、本当に笑顔が似合うね。こんなに可愛いお嬢さんを置いて、お仲間さん達は何処にも行けないよ。きつともうすぐ帰ってくるだろうから、その笑顔で迎えておやり」

女将はまるで娘を愛おしむようにルヤの頭を撫でると、空いた皿を下げて厨房に戻っていった。

思い掛けず投げ掛けられた優しい言葉と、頭に残る温かい手の平の感触に、何だか鼻の奥がつんと痛くなるのを感じて、「ありがとう」と女将の後ろ姿に声を追わせると、溢れてくるものを抑えるように立ち上がり、ルヤは食堂を出た。

そして独りきりのあの暗い部屋に戻る途中、エントランスの開け放たれた扉から吹き込んでくる渴いた砂の香りに誘われるように、村を見渡せる高台の庭に出てみる。

そこには、皆でいた時と同じ空気が漂い、皆で見た時と同じ景色が何処までも広がっていた。

風を胸一杯に吸い込んで、ゆっくりとその景色の中に足を踏み出す。

きつともうすぐ帰ってくるだろう、皆を迎えに行くようなつもりで。

六日前に皆が出ていった村の東の入口を目指して歩きながら、ルヤは今更ながら、今滞在している宿がサーナの言った通り、村で一番上等な宿なのだということを実感することになった。荒野に呑み込まれそうな佇まいのこのコロイ村を構成するのは、自然と同化したような簡素な石積みの家屋がほとんどで、あの宿のようなしつかりとした建築の、格式のようなものが感じられる建物は他にないようだった。

（本当に、見るからに一番高級なところだったんだ……ジェドルつてば、安宿だなんてわざとらしいこと言って……）

ルヤ達の旅は、そういった設備の行き届いた宿とは無縁だった。普段は野宿か、余裕がある時でもとことん粘って半壊したような安宿を探すのが常なのだ。それなのに今回は、大切な旅の資金を削ってまでルヤがゆっくり静養できる環境を用意し、自分たちは依頼をこなしに村を旅立っていったジェドル、ビスラ、サーナの三人。

ルヤにとって、確かな自分でいさせてくれる、有りのままに生きることを許してくれる、言葉では言い尽くせない存在。

皆に今回のような気遣いを二度とさせないためにも、これからはサーナに言われた通り、自分をもっとよく知り、出来ることと出来ないことをよく見極めて行動しよう。今度こそ、皆と同じ歩調で歩いて行けるように――

そう、きつと東門に行けば、皆、もうそこまで来ているに違いない。

自分が心配していたことを、何でもない顔で笑い飛ばしてくれる。そしてまた、何事もなかったように皆との旅が始まるのだ。

それは何の確証もない願いだった。

だが、ルヤはその未来を信じようと決めた。

途中、行き交う村人や行商人に声を掛けられ、立ち止まって世間話をしたりしながら漸く東門に辿り着いた頃、泣き出しそうだった曇り空からぽつぽつと雨粒が落ち始めていた。この地方では滅多に雨が降らないのだが、一度降り始めると豪雨になることが多いためルヤは急いで東門を出て、村の外を見回した。三人が、すぐそこまで歩いてきている光景を心に描きながら。

しかし、そこには雨を吸い込む渴ききった荒野が、視界に入りきらないくらい遠く遠く広がっているだけで、ルヤに笑い掛け、駆け寄ってくる人影など、何処にも見当たらなかった。

風と、雨音だけに包まれた、人が生きること許さないような厳めしい死の大地。こうして佇んでいると、その虚無と静寂に押し潰されてしまいそうになる。

あの彼方にまだ、ジェドルも、ビスラもサーナも、生きていて、どこかで笑ったり、下らない話題で盛り上がったたりしているのだろうか。

何だか信じられなくて、泣き出してしまいそうな自分を必死に奮い立たせようとするのだが、胸の痛みがしつこく残って払いきれない。まるで、自分の心情を映しているようだ、ルヤは皮肉な気持ちで大粒の涙を落とす空を見上げた。徐々に勢いを強めていく雨に打たれるまま、その後も暫く皆の帰りを待つようにその場を動かずにいたが、宿に戻らなければという思考を頭の片隅に見付け、のろのろと重い足取りで東門の方に引き返す。

門の中まで入ったところで、どうしても、このまま独りで帰らなければならぬのが、またあの暗く静かな部屋で皆の帰りを待たなければならぬのが寂しくて、悔しくて、最後にもう一度だけ、縋るような思いで飛沫に煙る荒野を振り返る。瞬間、何かが目端に当たったような気がして、ルヤは飛びつくようにその影を視線で追った。豪雨で視界が悪く、はっきりとは確認できないが、それは東門を出た所からすぐ近くの岩場に立っている人間のようなだった。さ

つきは遠くばかりに気を取られていた為か、それとも人の形に似た岩の群れにその人影が紛れてしまっていたからか、見逃してしまっていたようだ。

「ジェドル……？」

無意識に仲間の名前を呼んで、湿ってぬかるんだ砂に足を取られそうになりながら人影に走り寄る。

しかし、近付いていくうち、それが背の低い、まだ顔立ちに幼さの残る少年であることに気付いた。黒髪に黒い瞳、砂と埃で汚れた白い肌、見たこともない漆黒の分厚いローブに身を包み、被ったフードから雨を滴らせながら、目前まで近寄ってきているルヤを見ているようなのに、意識は何処か遠くにあるような惚けた目をして立ち尽くしている。

まるで薄い膜を隔てた向こうにいるような、何とも言い難い異様な空気を纏ったその少年に、一瞬どう声を掛けていいか分からず、対峙するように向かい合ったまま暫し無言の時を刻んだルヤだったが、少年の身体が、何も映さない表情とは裏腹に、微かに震えていることに気付くと、我に返ってその肩を掴み、大声で呼び掛けた。

「あなた、大丈夫？ 一人でこんな所で雨に濡れて、一体どうしたの？」

強く揺さぶられて、少年は初めて目の前のルヤを認識したような顔になり瞬きした。

「この村の子？ お父さんは？ お母さんは？」

「……あなたは」

少年は、先程までとは打って変わってルヤの顔を真っ直ぐに見据えたまま、声変わり間近の響きを持つ声を発した。

「私はルヤ、この村に旅の途中で立ち寄ってる放浪者だよ。だから、村については余り詳しくないの」

「村……？」

少年はまた短く尋ね返すと、ルヤの後方にあるコロイ村に視線を移し、

「人の住む、ところ……」

口の中で消えてしまいそうな声で呟いて、それきり、黙り込んでしまう。

「あなたは、この村の子供じゃないの？」

少年は暫く間を置いて、首を振った。

違う、という意味だろうか。それ以上の反応を示す気配がないので、別の質問を投げ掛ける。

「じゃあ、何処から来たの？ その服は、どこの民族衣装？」

そう言われて初めて気が付いたように、少年は自分の服装をまじまじと眺めた。

「着ていたんだ、僕は……」

その様子と、これまでの問い掛けに対する要領を得ない返答から、どうやら普通の状態ではないことを何となく悟ったルヤは、取り敢えず、このずぶ濡れの少年を宿に連れ帰ることにした。

「何処へ……」

無言で手を引かれ、少し戸惑ったように尋ねてくる少年に、ルヤは前を向き、早足のまま答えた。

「宿。このまま雨に濡れていたら、どっちも無事じゃ済みそうになりからね……あなた、宿代になりそうなお金持ってる？」

「やど、だい？」

「……持ってなさそうだね」

予想はしていたが、貨幣の意味すら分からないとでも言い出しそうな少年の反応に溜息が出る。一体、この子供はどういう境遇なのだろう。見たところ、手ぶらのようだが、やはり村に住む子供ではないのだろうか。残った旅の資金を考えても、少年を別室に泊らせる余裕はありそうにない。今はとにかく宿に戻って、まずは女将にこの少年を知らないかきいてみよう。先のことはそれから考えればいい。そう、ルヤは判断したのだった。

天気の時為かいいつもより日暮れが早く、空を埋め尽くす雨雲はい

つの間にかくすんだ藍色の宵を村にもたらししていた。先程まで地面に敷物を敷いて商品を並べていた行商人達も、この雨を避けて何処かの屋根の下に引き揚げてしまったようだ。村の中を縫うように伸びる砂利道に人気は無く、古い石積みの家から漏れる火の光だけが朧気な雨景色を彩っていた。ある家からは楽しげな笑い声が、別の家からは母親に叱られて泣く子供の声が、村に一軒だけある素朴な酒場からは陽気な歌声と安らかなざわめきが奏でられる。

宿への道のりは、小さな村の煌めくような息吹で溢れていた。

今までなら、皆と一緒にの時ならば心から素敵だと感じられたであろうその情景に、今は遠く、取り残されたような胸の痛みを覚えて、ルヤは強く唇を噛んだ。

また、あの頃と同じ気持ちになれる日々はやってくるのだろうか。信じると決めたはずなのに、気が付くとその決意を手放しそうになっている自分から目を背けるように、ルヤはさっきから何一つ言葉を発していない少年を振り返った。

少年はルヤに手を引かれるまま、覚束ない足取りで歩きながら、通り過ぎていく家々の明かりを、珍しいものでも見るような目で、けれど、何かを探し求めているようにも見える目で追っていた。

ルヤは歩く速度を徐々に緩め、引いていた手をそっと離すと、少年の顔を覗き込むようにして立ち止まった。少し遅れてそれに気が付き、少年も力のない瞳でルヤを見上げる。雨は、相変わらず地面を止めどなく叩いていて、少年が着ている分厚いローブはたっぷりと水を含んで重そうだ。それを見て、恐らく自分も相当酷い格好をしているのだろうと想像できたが、もう、ここまで全身水浸しになってしまうと、取り繕う気も起きなかった。

「この村の何処かに、あなたの家があるの？」

温かい光が漏れる家屋の集まりを仰ぎ見ながら、少年にもう一度、噛み砕くような調子で問い掛ける。

少年は何も言わず、さっきと同じように首を振ろうとしたが、ふと思い直したようにその動きを止めると、村の灯りの中に虚ろな視

線を漂わせた。

「ここに、いたんだろうか……僕は」

そこに見える景色の、更に向こう、その奥まで見通そうとするような、少年の、遠すぎて、今にも音を立てて崩れてしまいそうな瞳の危うさに、ルヤは思わず息を呑んだ。

「……ずっと、あの赤い大地を歩いてきたように思うけど……分からない……でも、このこと……似た場所は何処かで、見た気がする……」

初めて少年が発した長い言葉の連なりには、所々、独特の発音が混じっていて、少なくともこの地方の出身ではないようであることが推察できた。

「そう……あなた、分からないの……本当に何も覚えていないの」「覚えて……いない、そうか……僕は、覚えていないのか」

そのことにさえ今気付いたとでも言うように、けれど、別段驚く風でもなく、少年は一言一言確かめるように呟く。

「ねえ、その、ここに似た場所って、あなたにとって、どんなところだった？」

覚えていないと聞いたばかりなのに、僅かでもその瞳に光を宿して欲しくて、安心できる拠り所を胸の中に取り戻して欲しくて、何となくそう尋ねてしまったルヤの顔をぼんやりと眺めながら、少年は掴みきれない感覚をそのまま口から紡ぎ出すような調子で答えた。「人と、明かりと、声……それは、嫌なものじゃなかった、ように思う……けれどそれは……もう遠くて、手が、とどかない……」

感情の籠もらない、抑揚のない声に乗せられた言葉だったのに、何故かルヤの胸には、その奥に閉じ込められた言いようのない重く激しい痛みが伝わってくるような気がした。気のせいなのかもしれない、けれど、思わず目を伏せ「そう」と短く返答すると、それ以上何も言わず黙って宙を見ている少年の手を強く握り直した。その手の感触に顔を上げた少年に、無言で微笑み掛けると、ひととき大きく、明るい光を放っている建物を指差す。

「宿はあそこだよ、あの丘の上にある光。この道の一番奥にあるの」
少年は繋がれた手を無表情で見詰めてから、今度は先に行こうとしないルヤと並んで、示された光を目指し、ゆっくりと歩き出した。

三

三

「まあまあどうしたんだい！」

漸く宿まで辿り着いたものの、余りに水浸しで入るに入れず、扉の前で立ち尽くしていたルヤと少年を、たまたま玄関先から顔を出して見付けた女将は目を剥いて叫んだ。

「部屋にいないから何処に行ったのかと心配してれば、病み上がりだったのにこんなに雨に濡れて！」

良く磨き込まれた床の上を泥まみれで徘徊するのを躊躇ったルヤの憂慮になど気付く様子もなく、女将は血相を変えて、水を滴らせた二人を一階奥の浴場まで引き擦るように連れて行った。

一つしかない浴場に二人同時に押し込まれそうになり、慌てて女将を押し止めたルヤは、例によって不思議そうに浴槽を眺めている少年にここで体を洗うよう告げると、自分は事情を説明する為に通路に戻った。

連れてきた少年について詳しく話したい旨を伝えると、女将は漸く少し落ち着きを取り戻した様子で頷くと、ルヤを別室に促した。

木目の美しいテーブルと椅子が並べられた来客用と思しき部屋に通されたルヤは、手渡された綿布で濡れた髪と身体を拭いながら、ここに至るまでの経緯を女将に話して聞かせた。東門の外で見慣れない外見をした少年と出会ったこと、その言動からして、彼はどうかや記憶を失っているらしいということ、帰る場所が無いようだったので、取り敢えずこの宿まで連れてきたこと等を、順序立てて出来るだけ詳細に語った。この村に見覚えがあるような言動があったことや、手ぶらでいたことから考えて、恐らくこの村の子供ではないかと予想していたルヤは、女将なら彼を知っているだろうと半ば確信のようなものを持っていた。だが、返ってきたのは、彼女にと

つてもあの少年は初めて見る顔であり、彼の着る衣装にも全く見覚えがないという意外な答えだった。

「さっきは少し動転してて、あの子が何者だとかまで考えなかったけど、この村の子供でないことは確かだよ。あんなに肌の白い子、村にいたら相当目立ちそうなんだけど、見たことないからね」

「そう、ですか……それじゃあ一体あの子は……」

どうやって、水も食糧もなく、この荒野に囲まれた村にやってきたというのだろう。

考え込むルヤを見て、女将は励ますような調子で付け加えた。

「まあ、ここコロイはこの辺りでは唯一、人が暮らせてる泉の湧く村だからね、旅の中継点としてあんだ達のような放浪者や行商人がひっきりなしに立ち寄るんだ。そういう連中が連れてきた子供かもしれないよ」

女将に言われて初めてその線に気付き、ルヤは成る程と納得して深く頷いた。確かにそれなら、この国の住人らしからぬ少年の風貌や、発音の癖にも説明がつく。早速明日にでも村に滞在している旅人達の元を訪ね、少年の保護者がいないか捜してみようと頭の中で計画を練り始めたルヤだったが、はた、とその前に立ち塞がる別の問題に気付いた。簡単そうに思えて、現実的に考えると意外に厄介な問題に。

暫くその解決方法を模索してみたが、諦めたように肩を落とすとルヤは女将に向き直った。

「あの、ご相談なんですが女将さん、彼を私の部屋に泊まらせて、私は廊下か何処かで寝かせていただくという形で、その……宿代をまけていただく訳にはいかないでしょうか……?」

嬉しそうだったかと思えば、すぐに難しい顔をして唸りだしたルヤを何事かと眺めていた女将は、恐る恐るといった様子で切り出されたその申し出に、拍子抜けしたように笑い出した。

「どんな深刻なこと悩んでるのかと思えば、いいよ、あの子の部屋はタダで、別にあんたがあの子の保護者って訳じゃないだろう?」

「それは、そうですね……でもあの子を連れて来たのは私で、この宿とは何の関係もない子ですし……無料にしていたくというのはあまりに申し訳ないですよ、そこまで甘えるわけにはいきません」

「別にこんな田舎の宿にそこまで気を遣う必要のないにねえ……まあ、わかった、あんたがそう言うならタダで客室は貸さないよ。けど、客室じゃなければ良いだろう？」

その言葉の意味するところを計りきれず、瞬きするルヤに女将は片目をつむって見せた。

教えられてやってきたその部屋は、内装こその他の部屋よりいくらか簡素な造りではあるものの、設えられた古めかしい木の家具や、乗ると微かに軋む寝台、窓際にあるランプの乗った小さな机が、客室には無い、ほんのりとした温もりと、胸の奥をツンとさせるような懐かしい匂いを漂わせていた。

「ここは……」

少年は部屋を見回すと、やはり無感動な声で呟いた。

「ここは、この宿を経営するご夫妻の息子さんが来たとき泊まる為の部屋なんだって」

ルヤは、この綺麗に手入れされた、愛情の込められた室内を見て、少し複雑な気持になり深く息を吐いた。

両親の跡を継ぎ、王都で織物商を営んでいるという彼らの息子は、父親である主人の故郷、ここコロイで夫妻が宿屋を経営し始めてから五年間、仕事の忙しさを理由に一度もこちらに顔を出したことがないという。「どうせ、掃除だけして使っていない空き部屋みたいなもんだから」と、女将は苦笑混じりにそう言って、少年が寝泊まりするのに使うと良いと勧めてくれたのだが、いざここに来てみると、逆にこの部屋にだけは簡単に足を踏み入れてはいけなかったのではないかという思いに駆られた。そして同時に、蓋をしたはずの胸の奥から染み出してくる、遠い、自分自身の家族達の顔。彼らは、もう部屋など残してくれてはいないのだろうか。

室内と、そんなルヤの表情を交互に見比べていた少年は、しばらくぼんやりと佇んでいたが、前触れ無く部屋を出て行こうとした。

「どこへ行くの？」

その唐突な挙動にはっとして呼び止めたルヤは、ゆっくりと振り返る少年の顔を見て、改めて息を呑んだ。自分や西大陸の人間もこの周辺地域に暮らす人々に比べれば肌の色は白い方だが、こんなにも、透き通るように白い肌の人間を見たのは初めてだった。汚れを洗い落としたことによって、それがよりはっきりと際立っている。

「僕は、外で寝ればいい」

それだけぼそりと呟いて、またこちらに背を向け廊下を歩き去ろうとする少年を慌てて追い掛け、腕を掴む。

「何を言ってるの？ 外は寒いし、今夜は土砂降りだよ？ それになにより、あなたみたいな子供が一人で野宿なんて危ないでしょう」

「別にいい……これまで、そうしていた」

「今まで、あなたは野宿していたの？」

「……わからない……でも、そんな気がする……」

何を聞いても曖昧で、要領を得ない。

何一つ覚えていないというのは一体どんな気分なのだろう。ルヤには計りかねたが、きつと、とてつもなく怖いことなのではないかと、それだけは想像できる。目の前の少年は、その恐怖に今も耐えているのだろうか。この無表情は、心が崩れてしまわないように、押さえ、固めているからなのだろうか。そんな風に思えた。

「あなたは、今夜はここで寝るの。あんなに雨に濡れて、疲れているでしょう？ ただ、明日起きたら、旦那さんと女将さんにお礼を言って。それだけは忘れないでね？」

少年の覚束ない瞳をしっかりと捕らえて、ルヤは静かに言い聞かせた。

闇も深まった窓の外を、遠くまで眺めて息を吐き、ルヤは室内に視線を戻した。

「もう、大きい方のランプは消すね」

ベッドに横になって、こちらを見ていた少年に声を掛け、返事を待たずに中央の小さなテーブルの上に乗った銀細工のランプの火を吹き消す。

壁に据え付けられたランプの微かな光が浮かぶだけになった室内は、どこから取り残された場所のように頼りなく、寂しげなものに感じられた。

「明日は、あなたを連れてきた人がいないか村の中を探してみようね」

沈みそうになる気持ちを無理矢理浮上させようと、全く表情の変わらぬ少年に笑い掛ける。そんなルヤを、動くことさえ少ない瞳で見つめていた少年は、唐突に、その口から言葉を発した。

「あなたは――どうして、あそこにいたの」

「え？」

最初意味が分からなかったのと、初めてではないかと思える少年からのしつかりとした問い掛けに、ルヤは目を丸くした。

「あなたは どうして、あの雨の中に、一人でいたの……」

「……………」

言葉に、詰まった。

こちらを見詰める少年の瞳には、虚無の中に、無垢な一筋の光のようなものが感じられて、何だか、見返すのが辛いほどだった。

「仲間をね……待っていたの……」

何も言わず、頷きもしない少年に、ベッドに頬杖を突きながら、ルヤはひとつひとつ、自分の想いを確かめるようにして話して聞かせた。家族以上に大切に思う仲間が、依頼をこなしに村を旅立ったまま戻らず、一人残された自分はここで何日も帰りを待ち続けているということ。もうそこまで来ているんじゃないかと根拠もない期待をして、東門まで皆を迎えに行ったこと。そしてそこで、少年を見つけたことを。

「そう……それで、僕は、あなたに会った」

「そうだよ、びっくりしたよ……あんなところに立ち尽くしているんだもの」

小さく微笑むルヤに真っ直ぐな視線を向けたまま、少年は何の感情も含まない声で言った。

「それなら……あそこにいたのが、僕じゃなくて、その人たちなら、良かったのに」

一瞬、言葉を失うルヤに、少年はもう一度同じことを繰り返した。「その人たちがいたなら、あなたは、もう悲しんでいなかった、どうして、僕が、あそこにいたんだろう、いなくても同じ、僕が」

本当に不思議そうな目をして、何でもないことのように言っている少年に、ルヤは尋ね返したい思いだった。

何故、そんなことを言うのか、と。

何も覚えていないということは、そんな風に考えてしまうものなのだろうか。そんなにも、自分の価値を見失ってしまうものなのだろうか。何処かに置き忘れただけで、必ず、あるはずの価値を。

自分でも意味が分からない涙が出そうになって、ルヤは少年の頭を強く掻き回した。

「あなたは、この世界に生まれて、ちゃんとここにも居るから、あそこにはいたの。あなたは私の仲間にはなれないし、私の仲間も、あなたの代わりにはなれない……そんな風に考えるのは、もう、やめなさい」

それでも表情を変えようとしないう少年にもどかしさを感じて、短く「おやすみ」とだけ告げると、ルヤは足早に部屋を出て行こうとした。ドアを閉めようとしたとき、小さく呼び止められた気がして部屋を覗く。少年が横になったまま、ルヤの姿を探すように顔を上げていた。

「僕は、いるの……？　ここに――」

それは、無表情な、けれど、周囲を満たす不確かさから這い出そうとしているような、何かを掴もうとする眼差しだった。

「……いるよ」

ルヤは強く、はっきりと頷くと、もう一度、今度は笑っておやすみと声を掛けて、ゆっくりと扉を閉めた。

深夜――

階下から微かに響く人のざわめきらしき物音で、ルヤは浅い眠りから目覚めた。それとほぼ同時に、少し気忙しいノックが室内に響く。

頭に靄がかかったような状態で目を擦りながらドアを開けると、そこには血相を変えた女将が、落ち着かない様子で立っていた。

「あ、ルヤちゃん……今、下に……」

女将に耳打ちされて、息が止まった。

それは、待ち焦がれていた報せ。

そして同時に、聞きたくないと怖れていた言葉でもあった。

我を忘れ、女将の脇を抜けて駆け出す。

もつれる足で何度も転びそうになりながら薄暗い階段を降り、ざわめきの源へ。

呼吸が空回って声を出せずに、無言で人垣を掻き分けた。

その先に、

その先にいたのは――

「ジェドル！」

最初、彼だと分らないくらい、ジェドルは血と砂埃にまみれて、ロビーの床に仰向けに寝かされていた。

「ジェドル……ジェドル！」

涙の詰まる喉で、懸命に呼び掛ける。

次々と押し寄せる感情に吞まれ、目の前で何が起きているのか、何を考え、何を言えいいのか、一つとしてまとまらず、悪い夢の続きでも見ているような歪んだ視界の中で、傷だらけの体に縋り付いた。

「どうして……ジェドル、どうしたの？　ねえ、ビスラは？　サーナは？」

取り囲む人垣はただならぬその光景を固唾を吞んで見守っているようだったが、自分に向けられる周囲の視線になど、今のルヤは構っていられなかった。

「今さっき、入り口近くに倒れているのを俺が見付けて中に運んだんだ……今、急いでうちの使用人に医者を呼びに行かせてる」

そう、低く声を漏らしたのはこの宿の主人、エルバ。

普段の不敵な態度は微塵も感じられず、その精悍な顔を陰しく顰めてジェドルの傍らに付いていた。

「息は……息はあるんですか」

訊きたくない、口に出すのさえ苦痛な問い掛けを、張り裂けそうな思いで絞り出す。

「ああ、安心しろ、息はある……」

その答えに、強張っていた全身の力が抜けた。

少しも動かない、自分が呼び掛けても全く反応しないジェドルは、もう、この世の者ではないように感じられたから。

「だが、一体この有様は……」

主人が、また何かを言い掛けた時、掠れて聞き逃してしまいそうな、しかしルヤが切実に待ち望んでいた声が発せられた。

「ル……ルヤ……」

うまく働かない頭を必死で動かし、ルヤはジェドルの口元に耳を寄せた。

「ジェドル……？」

「……ルヤ、か……？」

「そうだよ、ルヤだよ、ジェドル……」

堪えていた涙が、一粒、零れる。

あの、子供みたいに意地っ張りで、いつも偉そうに自分を叱咤する彼とはまるで別人に思えるほど、衰弱して、やっと声を出しているジェドルの姿を見るのは辛く、今にも失いそうで怖かった。

「俺は、ここに戻って、こられたのか……」

「うん、待ってたよ……私ずっと、みんなが帰ってくるの、待って

た……」

「……ルヤ」

「心配してた、すごく……」

涙を拭おうともせず、砂と血で汚れた手を握り締めて必死に語り掛けてくるルヤの姿を、ジェドルは憔悴した、しかし、その奥に強い感情を閉じ込めているようにも見える黒い瞳で見詰め返していた。「この傷はどうしたの……ビスラと、サーナは？」

「ルヤ……二人は、死んだ」

突然、耳に入ってきた、その、音。

ルヤの頭は、一瞬その意味を理解しようとしなかった。

ぼんやりと、ジェドルの顔をただ見返す。

尋ね返すことも出来ないでいるルヤから視線を外して、ジェドルは無理に感情を廃した声で、もう一度発した。

「……ビスラも、サーナも……死んだ……もうここには、帰ってこない」

ルヤは待っていた。

いつものように意地悪く、ジェドルが笑って冗談だと舌を出す瞬間を。狙いすましたように、ビスラとサーナがおどけて目の前に現れる瞬間を――

四

四

部屋の中に響き渡る、無機質な雨音。

ルヤは自室の寝台に腰掛け、無言のまま、卓の上のランプに呆けた視線を送っていた。

泣きもせず、喚きもせず。

ただ、何度も、同じ言葉を頭の中で繰り返す。

ビスラと、サーナが、死んだ。

刃のように重く鋭いはずのその言葉。悲しいはずなのに、辛いはずなのに、ルヤにはどうしても、それを、実感として捉えることが出来なかった。

不意に頭の中を過ぎる、ビスラの穏やかな笑顔、サーナの声をあげて笑う明るい仕草。

もう、どこにもいないなんて。

まるで、暗くて深い崖の縁に立っているような感覚。気を抜くと吸い込まれそうなその谷底を見下ろしながら、今の自分を踏み止まらせているものは一体何なのか、どうして、こんなにもこの谷に落ちることに納得がいかないのか。

目の前に積み上げられた考えるべきことの中から、まず、それを足掛かりに、さっきから止まったままの思考を動かし始める。

本当にビスラ達は死んでしまったのか。

だとしたら、一体、どうして。

あの後、我を忘れて何度もジェドルにそう尋ねてみたが、彼は言葉少なで、なかなか二人の死の詳細を語ろうとしなかった。どうして教えてくれないのか、口を噤む彼の真意が解らず、大切な仲間を失ったかもしれないという強烈な恐怖と不安も相まって半ベソをかきはじめたルヤに、悲痛な面持ちを浮かべたジェドルの口から漸く

告げられたのは、曖昧で、意外な事実だった。

「よく、覚えてねえんだ……」

息切れと聞き違いそうなその微かな発声を必死で拾い、ルヤはすぐに反復した。

「覚えてない……覚えてないって？　どういうこと？　ジェドル、今二人が……死んだって……そう、言ったんだよね？　なのに、覚えてないって……」

そんな不確かな記憶で、どうして、彼らが死んだなどと言い切れるのだろうか。訳が分からず、染み出す涙に気付くことさえも出来ない。

「……スナヒヨウが出没するって聞いたポイントで待機してたら、横からぶん殴られるような、ものすごい衝撃がきて……何かが……何かが、そこにいた……ビスラとサーナは……そいつに向かって……それで……何だかわからないうちに……弾き飛ばされて、倒れて……」

ジェドルはそこで言葉を切り、頭と脇腹を押さえ、苦しそうに顔を歪めた。見ると、脇腹には大量の血が塊になってこびり付いている。出血は止まっているようだが、酷い傷であることが容易に窺えた。

「ジェドル……この傷……その、何かって、なんなの……？」

「わからねえ……思い出せねえんだ……ただ、ビスラと、サーナ、あいつら倒れて……起こして、揺さぶって……息が無いこと……確認した……それだけは覚えてるんだ……頭から、離れねえんだ……っ」

腕を顔の上に乗せ、声に詰まったようにジェドルはそれ以上何も言わなかった。そこへ、この村に一人しかいないという医者が宿に到着し、ロビーは俄に慌ただしくなった。主人と女将が、周りの野次馬達を力のありそうな男数人を残して散らせ、その男達にジェドルを運ばせながら、医者を案内して客室が並ぶ通路の奥へ消えていった。

その様を呆然と見送り、静まり返ったロビーに取り残されたルヤは、長い時間そこに佇んでいた。それからどうやって自室に戻ったのか、よく覚えていないが、次気付いた時には、ここで、こうやってベッドに腰掛けてランプの火を見ていた。六日間、悪い予感が、ただの取り越し苦労であることを願った部屋で、『二人が死んだ』という音の連なりを頭の中で、何度も、何度も、再生している。拒むことも、受け入れることも出来ず、ただ、宙に浮かんだそのフレーズを、離れた場所から眺めているような感覚で。

何を、どう理解して、どんな感情に身を任せたらいいのか。

ジェドルは、二人に息が無いのを確認したと言った。それだけは強く覚えていると。

その言葉を思い出す度、胸に、重く押し掛かる痛みを感じる。だがそれでも、思い切り泣こうとは思えないのは何故なのだろうか。

呼吸を、深く、ゆっくり整え、何とか心を落ち着かせて、自分に問い掛ける。するとその問い掛けは、時間を掛けてもう一つの疑問に姿を変えた。

ジェドルはどうして、ここに帰ってこられたのだろうか？

二人が殺されるほどの凶暴な何かの手から、ジェドルだけ逃れることが出来たのは、何故なのか。それを覚えていないと、ジェドルは言った。自分たちを襲ったものが何だったのか、どうして自分一人が生きて還ってこられたのか、覚えていないと。

だが、ジェドルは紛れもなく生きて、この村に還ってきた。それは、何らかの理由でジェドルが生かされたという証明だ。ただ覚えていないだけで、彼が命を落とさずに済んだ経緯が、確かに存在するはずなのだ。

そこで、ルヤは漸く悟った。自分は、ジェドルの失われた記憶の中に、希望を見いだしているのだということに。

彼があれだけはっきりと二人が死んだと言い切るからには、それは限りなく真実に近いのかもしれない。だからこそ、ルヤも全ての感覚が麻痺するくらいの衝撃を受けた。だが、心から悲しみに浸り

きることに、涙を流すことに、こんなにも抵抗を覚えるのは、今は忘れてしまっているだけで、もしかしたら、どうにかして二人が生き延びたという記憶がジェドルの中に眠っているのではないか、そんな望みを、どうしても手放すことが出来ないからなのだと。

四人で旅する日々が再びやってくることを夢見る余地が、ほんの少しでもこの胸の中に残されている限り、自分は、二人がまだ生きていると信じていたいのだ。それを、信じたっていいのだ。この目で全てを確かめるまでは。

それに気付いた途端、急に目の前が開けた気がした。

まず自分がすべきは、泣き喚くことではない。仲間の身に一体何が起こったのか、そして今自分の身に何が起こっているのか、状況をしつかりと把握することだ。泣くのは、探し出した真実が絶望的であつてからでも遅くはない。

激しく渦を巻いていた様々な感情が漸く落ち着きを取り戻し始めると、すぐに思い浮かぶのはやはりジェドルの顔だった。彼だけでも帰ってきてくれたことは、ルヤにとって大きな救いだった。彼が戻らなければ、自分はこんな風に希望を持つことも、周囲を見渡そうと顔を上げることすらままならなかっただろう。

ある程度思考が整理されてきて、ルヤは無性に、先程の身体中に酷い傷を刻んだ、生気の無い目をしたジェドルのことが心配になってきた。あの、不器用であるが故にぶっきらぼうで子供のような物言いをする、威勢の良いジェドルの面影が、打ちひしがれたその姿からは感じられなかったことに、さっきは自分の感情の波に対処することに必死で、目に留めようとさえしなかった。それどころか、そんな憔悴しきった彼に、責め立てるように失った記憶の詳細を問いただし、感情をぶつけていたのだ。今頃になって、自分が如何に子供っぽい態度を取っていたかを思い知らされる。

何が、みんなに追いつきたいだ。

何が足手まといになりたくないだ。

他のどんな時より支える立場にいなければならぬこんな状況で

さえ、自分は、心身に傷を負い、誰よりも支えが必要であるはずのジェドルに縋りっぱなしではないか。

湧き上がる強烈な自己嫌悪に感じ入る暇も惜しむように、ルヤは立ち上がり、自室を出た。今度こそ、誰かの支えになれる、安心感を与えられる、そう、まるでビスラやサーナ、ジェドルのような、そんな自分に少しでも近付きたい一心で。

ランプの仄かな明かりの下、石を敷き詰めた造りの廊下で膝を抱えて蹲りながら、いつの間にか、雨音がしなくなっていることに気付いた。

ジェドルが運び込まれた客室から、医者が足音を忍ばせながら出てきたのは明け方になってからだった。顔に深い皺を刻んだ白髭の老医は、部屋を出るとすぐに駆け寄ってきたルヤに、安心させるように薄く笑って見せた。

「大丈夫だ、見た目ほど傷は酷くない、あれだけ出血したように見える割には、傷自体はほとんど塞がってるよ……こりゃあもしかすると現操術げんそうじゆつを施されたのかもしれないな」

「現、操術……」

心配していた怪我の容態がさほど悪くないとの知らせに心底胸を撫で下ろしたルヤだったが、同時に医者の口から飛び出した聞き覚えのある単語に、複雑な表情を浮かべた。

現世操術げんせいそうじゆつ——通称、現操術。

このヘンディア東大陸で最も広く信仰されている教義であるシトア教の創始者が、千年以上前に編み出し、教団に所属する修行僧にのみ習得法を伝授、行使する権限を与えた、超自然の力。

「ん？ あんた、もしかして西大陸の生まれか？ あっちの人間は現操術にひどく過敏に反応するからな。耳にただけで嫌な顔する奴も多い」

ルヤの反応に、医者は興味深そうな目を向けてくる。

なるべくこの地の住人に不快な思いをさせないようにと普段は気

を付けていたのだが、つい、この非常事態で動転している為か、表情に出てしまっていたようだった。鋭い指摘に、ルヤは微かに苦笑を浮かべると、小さく首を振った。

「いえ、私が、というよりは、私の旅仲間が西大陸の人間で……その、嫌っているというわけではないんですが、やっぱり、どうしても良い印象を持てない様子だったものですから」

「そうか……まあ、あっちでは現操術が大っぴらに戦争に使われているって話だからな……嘆かわしいことだ」

ジェドルも、ビスラムも、サーナも皆、戦争で家族を失ったという辛い過去を持つ。シトア教僧にしか知らされず、厳しい規則で漏洩を取り締まられているはずの現操術習得法が、裏で取引きされ、シトア教信仰国でもない西大陸の大国の手に渡り、厳禁とされている戦争での行使がなされるようになってから、彼の大陸では、もう何十年も血生臭い争いが慢性化して続いている。三人は幼い頃からその戦争の当事者として、それぞれ悲惨な体験を強いられてきた。

「まあ、こっちじゃ戦争での使用禁止の規則が徹底的に守られてる。わしらにとっちゃ、困った時に頼れる有り難い力だよ」

「はい、こちらの大陸で使用される現操術は人々を守り、親しまれる力だと、長く旅をしていて、私も良く理解しているつもりです……それで、ジェドルの傷には現操術が施された形跡があると仰られています……それは」

油断すると、すぐにざわめきそうになる心を押さえつけるように、ゆっくりと呼吸を整えながらルヤは医者を見上げ、先を促す。今は、ほんの少しでも、この訳の分からない状況を見極める為の材料が欲しかった。

「ああ、そうそう……まあ、わしにもはつきりそうだと分かるわけじゃない、形跡と言うより、あの傷の塞がり具合は現操術を掛けられた以外に考えられないんじゃないかと、そう思うだけだ」

「傷の、塞がり具合……」

「そうだ、あれだけの出血があったように見える傷が、なんの処置

も無しに、しかもあの荒野を延々と歩くという無茶をしながら自然に塞がるとは、わしにはどうしても思えんのだよ……しかも現操術で治癒したのだとしても、あの傷を治しちまえるってのは相当の使い手によってってのが大前提だろうな」

「……それは、つまり……現操術の助けがなければ、命に関わった、ということですか」

その問い掛けに、雄弁だった医者は目に躊躇いの色を浮かべ口籠もったが、改めてルヤの顔を静かに見返しながら神妙に頷いた。

「そういうことだ。わしもあんな傷は初めて見る……あれは、本当に最近この辺りに出るっていう野獣の仕業なのか？」

「え？　　どういう、ことですか……？」

身を乗り出して詳細を尋ねるルヤに、医者は負傷当時の状態は自分も想像しか出来ないと言置きた上で、所々思索を挟みながら慎重に語ってくれた。その話によれば、どうやらジェドルの体に刻まれているのは、噛み付かれたとか、打ち付けられて出来た傷というより、重い刃物か何かで肉を抉り取られたり、激しく切り裂かれた傷跡に感じられ、更には火傷に似た跡も見られるという。そして不思議なことに、致命傷になっていてもおかしくないそれらの傷は、今診た限りではほとんど治療が必要ない程見事に塞がっているのだと、医者は首を捻り唸るのだった。

「一体、何があったんでしょう……ジェドルは、ビスラと、サーナは……どんな目に遭ったっていうんでしょうか」

自分を落ち着かせようと努力した結果だろう、不自然なほど抑揚のない声を出しながら、無意識に体を震わせているルヤを見て、医者は年輪を感じさせる顔の皺を更に深くし、腕を組みながら低い溜息を吐いた。

「お仲間さん、まだ二人帰らないんだってな……すまん、今回の仕事を依頼した村の住人の一人として申し訳なく思うよ……」

背中の曲がった、男性の体格としては幾分小さな身体を更に縮めて謝る医者に、ルヤは迷いのない姿勢で首を振り、その瞳は、更に

言葉を継ごうとする医者声を自然に止ませた。

「そんなこと、謝らないで下さい。仲間同士で十分話し合い、納得した上で引き受けることと決めた依頼です。その結果何が起ころうともそれは己の実力を見誤った私達の責任……仕事を提供して下さったこの村の方々には感謝こそすれ、責める気持ちなんてありません」

いつも、ジェドルに、そしてビスラとサーナに言い聞かされた、放浪者として、一人前の人間として胸を張って生きていく為の条件。失敗を自分以外の誰の所為にもしないこと。どんな失敗とも真正面から向かい合うこと。強張った頬に涙が伝おうとするのを歯を食いしばって堪え、ルヤは微笑んだ。

その表情を見て、医者も何かを察したように小さな笑みを覗かせた。

「そうか……まあ、なんだ、まだ二人とも戻ってこないと決まった訳じゃない、もしあの兄さんを現操術師が救ったとするなら、あとの二人だってその御方に保護されている可能性もある。最後まで、望みを捨てんことだよ」

その励ましの言葉は、一瞬揺らぎそうになったルヤの決意を、改めて貫こうと、信じようと思わせてくれる、心強いものだった。だが、その一方で、ジェドルの不思議に思えるほど確信に満ちた表情での断言が、まだルヤの心に引っ掛かっているのも事実だった。二人が生きている可能性が少しでもあるのなら、彼はあんな言い方をするだろうか。

「何にせよ、あの兄さんの記憶が戻れば全てが分かるだろう……正直、獣にせよ何にせよ、問答無用であんな傷を負わせるような奴がこの辺りをうろついてるんだとしたら、この村にとっても脅威だ。すぐにでも真相を知りたいところだが、今はまだ無理に聞き出したриしない方がいいだろうな。身体の方はもう心配なさそうだが、どんなにかいショックを受けたんだか、さっきまで相当不安定になってる様子だった。無理に聞き出そうなんかしたら却って逆効果だ。内側の傷の治りが遅れちまう」

「そう、ですか……ジェドルが」

あのジェドルをそこまで不安定にさせる程の出来事とは、どれほどのものだろう。彼は自分の記憶を疑っていないようだったから、仲間を失ったという認識は確かに大きな衝撃に違いない。だが、普段の言動から、ルヤ以外の三人は、心の何処かで今回のような事がいつ起こってもおかしくないと覚悟しているような節があった。ルヤには、そんな覚悟は全く出来ていなかった、否、覚悟したくなくて、ずっと逃げ続けてきたのだが、少なくともジェドルには、全ての可能性を予測し、どんな状況にあっても自分を見失うことなく対応しようという気概があったように感じられた。そのジェドルが不安定になるほどの内面的打撃。やはり、どんなに覚悟していても、いざ仲間を失うという事態に陥ってみれば、とても落ち着いてはいられないということだろうか。

「あの兄さんがもう少し安定するまでは、村の者にも詳しいことは黙っておくよ。危険が迫っているかもしれないなんて知ったら、無理強いしてでも思い出させようとするような浅はかな連中が出てこないとも限らんからな」

ルヤは医者 of 冷静な配慮に深く感謝した。長く旅をしているとわかってくるが、自分の身内の為となると途端に感情的になり見境がなくなつて、驚くほど余所者に冷たくなる人間が世間の多くを占める中で、この医者は理性的且つ大局的に物事を見極めようとする、信頼出来る人物であるようだった。

「お心遣い、ありがとうございます……私も、この村の安全の為に、彼の記憶が少しでも早く戻るよう心を配ります」

真剣な瞳を医者に真っ直ぐに向けて笑うルヤに、医者も頷き、互いにそれ以上何も言わず、二人はその場で別れた。

ドアの前で立ち止まり、深呼吸して、普段の、皆で居た時と同じ、何でもないという表情を被せた顔を上げたルヤは、水の中の動きのようなきこちない手付きでドアをノックし、ゆっくりとノブを回し

た。

息を呑むほどに静まり返った室内に足を踏み入れると、すぐにベッドに仰向けに寝ているジェドルが視界に入る。目を閉じたその顔は、いつもの彼とは別人ではないかと思えるほど、生気が無く、触れると音もなく消えてしまいうるに見えた。

「ジェドル……？」

眠っているのかもしれないと、聞こえないほど小さく呼び掛けると、その、宙に溶けてしまいうるような声に反応するように、ジェドルは薄く目を開けて首を動かし、ルヤを見上げた。

「ルヤか……」

その疲れきった表情には、僅かな安心の色が浮かんでいた。

「大丈夫か……ルヤ」

言われて、昨晚自分が彼の事情や気持ちなどお構いなしに強く問い質したこと、抑えきれない感情をぶつけるばかりだったことを思い出す。心身に傷を負い、自分自身のことで精一杯のはずのジェドルにこの期に及んで気遣われている自分に、どうしようもない情けなさを感じたルヤは思わず俯き首を振った。

「ごめんね、私、昨夜はどうかしてた……駄目だね、いつまで経っても半人前で……でも、もう大丈夫だから」

さつき隠した表情が表に出てこないように、笑顔をつくる。

その顔を見詰めながら、ジェドルは哀愁を帯びた苦笑を口元に浮かべた。

「無理、してるな」

「え……」

「平気なわけねえだろ……お前が」

言いながら半身を起こそうとするジェドルに、ルヤは慌てて駆け寄り肩を支えた。

「ビスラと、サーナが死んだ……あいつらが、死んだんだ……」

「ジェドル……」

「あのお人好しのビスラも、口うるせえサーナも、もう、いねえん

だぞ」

呆然とした目をして、半笑いで呟くジェドルに、ルヤは耳を塞ぎたい衝動そのままの強い力で、必死にしがみつく。

「ジェドル……！」

「変な氣遣ってねえで泣けばいいだろ……無理して平氣な振りされたって、かえって鬱陶しいだけなんだよ」

見たこともないやつれた表情で窓の外に視線を逸らそうとするジェドルの両肩を、ルヤは強く掴んで、強引に向き直らせた。

「無理なんかしてないよ！ ジェドルに比べたら、私全然無理なんかしてない……！」

驚いた様子で目を見張るジェドルに構わず、続ける。

「あなたこそ無理しないで……！ そうやって、いつも憎まれ口叩く振りして私のこと氣遣うのはやめてよ……私だって、もう出会った頃の子供じゃないんだよ？ あなただけがそんなに頑張らなくていいの、全部抱えようとしなくていいの！」

言葉を失ったジェドルは、多くの感情が同居するような複雑な眼差しでルヤを見返していた。その、言いようのない、自分の主張をどう受け取ったのか計りかねる視線に、何となく居心地の悪さを感じながら、それでもジェドルから目を離さず、ルヤは更に言葉を継いだ。最も伝えなければならぬ、今の自分を形づくる思いを。

「それに私、ビスラとサーナの死体をこの目で見て、ちゃんと自分の手で弔うまでは、二人が死んだって認めない、そう決めたの」

「……ルヤ……」

「ジェドル、その時の記憶がはっきりしないって言ったよね？ だったら二人が死んだっていうのも、もしかしたらただの思い違いで、ビスラもサーナもまだ生きてるかもしれない、今頃この村に向かっているかもしれないでしょ？ だから、私は泣かないよ、泣いたら、二人がもういないって、認めることになるもの」

最後、声の上擦っていることに氣付きながら、どうすることも出来なかった。

我に返ったように、強く掴みすぎていたジェドルの肩から、何となく彼の目を見られないまま手を離し、高揚を抑えるように深く息を吐く。

この考えを口に出すということは、ジェドルの記憶を否定することも意味する。不安定になっている今の彼の心を、更に動揺させ、傷付けてしまうのではないか。そう危惧する自分がいないわけではなかったが、この気持ちこそが、悲しみに崩れ落ちることなく、自分をここに立たせてくれている。この考えを話す以外に、今の心情を説明する手段がルヤには見付けられなかった。

「二人とも、あんなに強かったんだもん。私がどんなに真似しようとしても、サーナみたいに遠くの的にナイフ当てられなかった。寝る間も惜しんで鍛錬しても、一度だってビスラには剣で勝てなかった……そんな、強くて、かっこいい二人が、簡単に死ぬわけないよ」強く言い切る口調とは裏腹に、ルヤもこの想いに絶対の自信があるわけではなかった。

それでも、後ろ向きな感情の流れに必死に逆らうように、強く、強く、願う。

目を閉じて、安定しない気持ちを一つの型に流し込もうとしてみると、すぐ鼻先から小さく吹き出すような声が響いた。

驚いて瞼を開くと、ジェドルがいつもの不敵な調子で薄く笑みを零している。

「それは、ビスラ達が強いんじゃないかって、お前が鈍臭いだけじゃないのか？」

帰ってきてから初めて見る、以前と変わらぬ彼の皮肉な態度に何だか少し安心して、ルヤにも、微かに笑顔が滲む。

「なによ、ジェドルだってビスラに一回も勝てたことないくせに」

「ああ？ 勝てそうだったことは何十回もあるんだよ、あと引き分けも五回ある！」

「勝てなきゃ同じだよ、言い訳っぽい」

無言で睨み合ってから、一瞬の間を置いて、互いに、歯を見せて

笑う。

それはルヤにとって、恐らくジェドルにとっても、久し振りに心から笑った瞬間だった。

「そうだな、二人とも、まだ生きてるかもしれないよな……」

言ってから、不意に遠い目をして、思いに耽るように黙り込むジェドルを見ていて、ルヤは先程医者から聞いた話を思い出した。見たところ、ジェドルの全身には一応白い布が巻かれているようだが、医者が言うには大掛かりな治療の必要はないほどに傷は塞がっているという。そして、その死に至ってもおかしくないはずの傷を治したのは――

「ねえ、ジェドル、身体、どこか痛いところある？」

「ん？ ……ああ、そういえば相当ひでえ怪我してたよな、俺」

やはり、もうほとんど痛みはないのかもしれない。言われて初めて怪我のことを思い出したという風に、ジェドルはきよとした反応をする。

相当不安定になっていると聞き、どれほどのものかと心配していたが、思ったより安定した様子の今のジェドルならば、さっきの話をしても大丈夫かもしれない。暫く考えた末、ルヤは思い切って切り出すことにした。

「ジェドル、落ち着いて聞いてくれる？ さっきあなたの手当てをした先生に聞いたんだけど、あなたの身体、もうほとんど治ってるんだって」

「治って……？」

身体に巻かれた白い布を眺めてから、不思議そうな視線を向けてくるジェドルに、ルヤは先程の医者との会話の中から、彼を刺激しそうな内容はなるべく省いて、重要と思える要点だけを抜き出して話して聞かせた。

「……つまり俺は、その現操術師に助けられたかもしれないっていうのか……」

現操術という単語に不快な顔をするかと思っていたが、ジェドル

は特に何の感情も示さず、純粹に与えられた情報を分析しようとしているようだった。

「はつきりとはわからないけど、そうかもしれないって先生は言ってた……こっちの大陸では現操術はシトア教の僧侶しか使えないから……ジェドル、そんな人と会った覚えはない？」

もし、そういった人物がジェドルを救ったのなら、ビスラとサーナも同じように助けられているかもしれない。死に至るほどの傷を綺麗に治してしまえるほどの使い手なら、例え二人が息を無くしていたとしても、蘇らせることが出来たのではないか。ルヤは祈るような気持ちでジェドルの答えを待った。

「僧侶……そうだ……俺たち以外の、誰かがいた……そいつは、確か………」

必死に記憶の糸を手繰り寄せて、奥から何かを引き出そうとするかのようにぶつぶつと呟いていたジェドルは、急に、前触れなく額を手で押さえて呻き始めた。

「ジェドル？ ジェドル、どうしたの？」

「う……ぐっ……ああ！ あ……頭が……あ……たまが……！」

いくら呼んでも、揺さぶっても、ジェドルは何かに怯えるように一点を凝視したまま頭を抱え、ルヤの声にも反応しない。尋常ではないその苦しみ方に、ルヤは泣きそうな声で、何度も、何度もただ彼の名前を呼ぶことしかできなかった。暫くそんな状態が続いた後、漸く落ち着いてきたかと思うと、崩れるようにベッドに横になり、そのまま寝息をたてはじめたジェドルの横顔を、ルヤは胸が潰れそうな気持ちでいつまでも眺めていた。

記憶を失うほどの大きな衝撃を心身に受けながら、独り、何日も歩いて、ここまで還ってきたジェドル。

無理に聞き出そうとしてはいけない、医者 of 真剣な表情が、痛みを伴って鮮明に浮かんた。

ジェドルは安定していたわけではない。ルヤの前では気を張り詰めて、心配させないようにと無理をしていただけなのだ。例えそれ

が無意識にだったとしても、ジェドルはそういう人間なのだとずつと前から知っていたはずなのに。だからこそ心から信頼し、尊敬してきた人物を、軽率な発言で苦しめた。自分の、早く真実を知りたいという身勝手な思惑を優先して、彼が内面に負った傷を軽視した為に。いつまでも甘えた考えから抜け出せないでいる自分。今度こそ激しい自己嫌悪から逃げ切れずに、肩まで浸かることになった。

五

五

死んだように眠り続けるジェドルの横で、ベッドに伏せたまま石のように動かなかったルヤは、瞼の上に光が当たるのを感じて顔を上げた。

壁に、窓の形の日溜まりが出来ている。

いつの間にか日が昇って、もう随分時が経っていたようだ。

——あの子、どうしてるだろう——

どうしようもない自責の念と、これから先の不安に絡め取られて身動きがとれなかったルヤの思考に、目に染みるほど眩しい朝日と共に割り込んできたのは、あの少年の微動だにしない、何も映そうとしない瞳だった。

昨晚、随分早いうちに寝かせたことを考えると、もう目が覚めている頃合いだろう。あの部屋で大人しくしているのだろうか。起きたら主人と女将にお礼を言いに行くようにと聞かせておいたが、きちんと挨拶したのだろうか。昨日の少年の挙動、発言を思い返して心配になってきたルヤは、ジェドルに「ちよっと、行ってくるね」と小さく声を掛け、足音を忍ばせて部屋を出た。

本当は、まだジェドルの傍を離れたくない思いが強かったが、行き掛かり上とはいえ自分はある少年の身を引き受けたということになるのだろうか、また、そういった義務感からだけではなく、あの覚束ない、誰のことも見ていないようで、誰かを、何かを探しているような目をする少年を、何となく放っておけなかった。それに、ただジェドルの傍に片時も離れずにいたところで自分は何の役にも立たないだろう。そればかりか、いつ再び余計な一言で彼を傷付けてしまうかもしれない。身体もほぼ完治しているという話だし、あとはジェドルの心の問題だ。それなら、少しでも早く失った記憶を

取り戻せるよう、情報を集めるなり、仕事をして宿賃を稼ぐなりして動き回っていたほうが、何倍も彼の役に立てるというものだ。

少年という気に掛ける存在がいなければ、こんな結論に至る思考を働かせる余地もなく、ただジェドルの傍に張り付いてウジウジ悩んでいたであろう自分を想像して、もっとしつかりしろと、ルヤは自分の頬をはたくのだった。

ノックしても返事はなく、そつと扉を開けて中を見渡したが少年の部屋は藻抜けの殻だった。昨日の調子で勝手に宿の中をうろついて他の宿泊客達に迷惑を掛けているのではないかと、まるで母親のような心境であちこちを探し回っていると、やがて辿り着いたロビーのカウンターで煙草を吹かしている主人のエルバと目が合った。

今朝方ジェドルの部屋の前で医者が出てくるのを待っている間、心配して様子を見に来てくれた夫妻に満足に挨拶すらしていなかったことを思い出し、こちらに気が付くとすぐに煙草を揉み消して妙な顔付きで迎えてくれた主人に、ルヤは改めて昨晚の騒動について謝罪し、仲間が世話になったことに心から感謝の意を伝えた。そして、腰から下げた布袋を取り出すと、宿代の支払いについて切り出した。今まで通りルヤが泊まる部屋の宿泊料に加えて、ジェドルが運び込まれた部屋の代金、併せていくらかと尋ねると、主人はゆつくりと首を振った。

「いや、あの部屋は彼が元気になるまで気にせず使ってくれ、この村の依頼を受けてくれたばかりにあんな怪我を負っちゃったんだ。このくらいのことはさせてもらおうよ」

昨日からこんなやりとりばかりだと、ルヤは心の中で溜息を吐いた。自分達は余程、周囲の助けがなければ生きていけないような頼り無いパーティーに見えるのだろうか。

「お気持ちは嬉しいのですが……依頼を引き受けたのはこちらの判断です。あなた方には何の責任も無いですし、しかも、昨日は私が勝手に連れてきた身元不明の子供の部屋まで御用意して頂きました。

これ以上お世話になってしまつては、私達の尊厳に関わります」

きつぱりと強い口調で言い切るルヤに、主人は筋肉質の幅の広い肩をすくめて苦笑した。

「じゃあ聞くけどあんた、二部屋分も払い続けられるほど余裕あるのかい？ ジェドルさん、だっけ？ 完全に良くなるまでにはあと何日も静養が必要だろう。放浪者の稼ぎでは払いきれないってのが正直なところなんじゃないのか？」

そのどこか皮肉を含んだ挑発的な言いぐさに、ルヤの表情が陰しいものになる。

「相応の代価が支払えなければ出て行くまで、それが道理ではありませんか？ そんな憐れみを受けるほど、私達は墜ちていません」

「ふーん、あのボロボロの兄さんを外に寝かせるわけかい、あれじゃあ働けるようになるのも当分先だろう、あんた、怪我人抱えて一人で、満足にやってけるってのかい？」

「……………」

悔しそうに黙り込むルヤに、主人は表情を和らげて息をついた。

「意地の悪い言い方をしたがね、困った時はお互い様だ。今は自分のプライドより大切なものがあるだろう？ そんなつまらない理屈で自分を追い込んでないで、こういう時は相手の厚意に素直に甘えとくもんだ、な？」

不敵に口の端を上げてそう切り返した主人は、面食って思わず返す言葉を失っているルヤに構わず、朝日が差し込む宿の入り口に視線を移しながら何気ない調子で話題を転換した。

「そういえば今朝方、雨が止むのを見計らったように見慣れない子供がそこから出てくのを見たよ」

さっきの主人の物言いにまだ何か言い返したそうな顔をしていたルヤだったが、子供という単語が耳に入った途端、顔色を変えた。

「え……？ 子供って、もしかして黒い髪で、白い肌をした十二、三歳くらいなの？」

「ああ、そうだ、見たこともない真っ黒なローブを着て、病人みた

いに白い顔してた。その時は俺もあんだのお仲間さんの容態がどうだとかそっちばかりに気を取られてて、声を掛けそびれたんだが、もしかしてあれが昨日あんだが連れてきたっていう身元の知れない子供なのかい？」

「恐らく、そうだと思います……でも、そんなに朝早くからいなかったなんて」

「何だ、まだ帰ってきてないのか？」

日が昇る前だったからもう随分経っているぞと、主人は訝しげに再び開け放たれた扉の外に目を向ける。確かに、おかしい。一切の記憶が無いと言っていた彼が、そんな早朝に一体何の用事があった出掛けたというのか。そして何故、今になっても戻ってこないのだろう。もしかしたら昨晚のうちに何かを思い出して、その記憶を頼りに帰るべき場所に帰ったのかもしれない。それならばいい、だが嫌でも、未だ帰らないビスラとサーナのことが頭を過ぎる。自分は本当にここに居るのかと、哀しい目をして尋ねてきた少年。頷くと微かに安堵の色を浮かべた、年相応の弱々しい表情をする少年の顔が思い出されて、ルヤは気が付くと宿の外、押し寄せる光の中に飛び出していった。と、宿代の話がまだ決着していなかったことに気付いて、振り返り、

「今回は有り難くお言葉に甘えることにします！でも、この借りは必ずお返ししに戻ってきますから」

主人の不敵な笑いを真似てみる。

「わかったわかった、じゃあ、あの部屋代はあんだに先行投資したってことにしとくよ」

その、全く期待していないといった口振りに、ルヤはいつか必ずこの主人がひっくり返って驚くような土産を持って戻ることを胸に誓いながら手を振ると、昨日とは打って変わった焼け付くような日差しの中、湿った砂を蹴って走り出した。

雨が止んだ村の通りには、行商人がひしめく賑やかな風情が戻っ

ていた。

あれだけ雨が降ったにもかかわらず、もう既に少年と歩いた時の泥濘はなく、渴き始めた地面に粗末な敷き布を広げ、道行く人に陽気に声を掛ける葉売りや、並べた武具を黙々と手入れする者、隣り合った同業者と情報交換している織物商人達、その隙間を縫うように商品を物色して歩く村人や旅人達のざわめきは、辺境とはいえ、ここが行商人達にとって広い荒野の中の数少ない稼ぎ場であることを物語っていた。

この人込みの中に少年の保護者がいて、彼はその元に戻っているかもしれないと、あの年齢の子供がいそうな商人や旅人の周囲に特に注意して目を配ってみるが、それらしき姿はなかなか見当たらない。

こうやって、いなくなった彼を捜すことになってみて、名前を聞いていなかったことに気付いた。これでは、呼ぶこともできない。記憶が無いと言っていたから、もしかしたら自分の名前も覚えていなかったのかもしれないが、偉そうに保護者面して、名前一つ聞こうとしない自分を彼はどう思っただろう。呆れたかもしれない、不信感を持ったかもしれない。でも、それより、寂しかったかもしれない。

また独りでどこかに行ってしまったのだろうか。あの、世界を遠巻きに眺めるような目をしたまま、その世界に、自分が存在していることを感じられないまま。

その後も店開きしている商人達に少年の特徴を伝えて、見掛けなかったか、そういった子供を連れだした商人や旅人を知らないかと尋ねて回ったり、泉を湛えた中央広場で少年のような子供のいる家はないかと村人達に聞き込んだりもしてみたが、誰からも思わしい情報を得られることなく、また少年本人の姿を見付けることもできないまま、時だけが過ぎていった。

これだけ探していないということは、まさか村を出て行ってしまったのだろうか、だとすれば、水も食糧も持たずにということにな

る。そんな無謀な、と否定しようとして、しかし、あの少年ならやりかねないと思えてしまうことに頭を抱え、いつの間にか辿り着いていた東門に手を突いてルヤは溜息を漏らした。

昨日は、あの岩場の岩に紛れるように、土砂降りの中棒立ちになっていたのだ。

まるで夢物語に出てくる妖精か、精霊、そういった類の、人間ではない何かのような、触れると消えてしまいそうな子供だった。

そんな現実感のない記憶を巡りながら、太陽に手をかざして、もう一度岩場の辺りに目をやる。

「え……」

何か、横たわっている黒いものが視界に入った。

——まさか……

瞬きして、食い入るように凝視すると、それは、確かに人のように見える。

頭から血の気が引いていくのを感じた。

考えるよりも先に、身体が勝手に前のめりになって走り出す。

息を切らせて目測より距離のある岩場に駆け寄ったルヤが見付けたのは、岩陰に身体を丸めるようにして横たわる、昨日ここで立ち尽くしていた少年だった。

暫く、その生氣のない横顔を前に、口に当てた手を強張らせ動くことができないでいたルヤだったが、少年の肩が僅かに上下しているのを確認すると、緊張で思い通りにならない手足を無理矢理機能させるようにして近付き、傍らに膝を突く。

細い肩を掴んで、壊れてしまわないようにそっと揺さぶった。

「ねえ、どうしたの？ 何があったの、ねえ！」

名前を呼べないことが、もどかしかった。

出会った時と変わらない、他人行儀な呼び掛け。

妖精でも、精霊でもない、人である彼の名前を、呼びたいと思った。

数回揺り動かすうち、少年は迷惑そうに眉間に皺を寄せた後、漸

く薄く目を開いた。

血相を変えたルヤの顔を認めると、半眼のまま不思議そうに見上げる。

「どうして？　こんなところに倒れて、一体何があったの？」

「どうやら、怪我もなさそうだ。少年が目を開けたことで、取り敢えずそこまで注意を払う余裕を取り戻したルヤはホッと胸を撫で下ろした。

「あなたこそ、何かあったの……顔色、悪い」

体を起こそうともせず、眠たそうな声で、少年は当然の疑問の如く尋ねてくる。

「あなたを探してたんだよ！　朝早く宿を出て行って、帰ってこないっていうから！」

「僕を……」

「一体何があったの？　こんなところに倒れて」

「何もない……眠っていた」

欠伸を噛み殺して一言そう答える少年に、放心状態になりながら何とか絞り出した声は音程がおかしかった。

「眠って……？」

「まだ、眠い……」

そのまま、再び目を閉じようとする少年を、慌てて揺り起こす。

「あなた、ただここに眠りに来たの？　寝る為に、わざわざ宿を出てここまで来たの？」

面倒くさそうに、少年は微かに頷いた。

ルヤが言葉を失っている意味など、まるで分かっていない様子で。

「どうして？　あなたが泊まる部屋、ちゃんとあるでしょう？　あなたの眠る場所はあるの？」

「あそこは、囲まれてて、天井が、あって……落ち着かない……外の方が、よく眠れる……」

天井があるから眠れない、それは、どういうことなのだろう。やはり行商人かなにかの子供で、部屋で眠るのには慣れていないとい

うことだろうか、もしくは、忘れてしまっただけで別の嫌な思い出でもあるのだろうか。とにかく、何か、彼の記憶に由来する、彼にしか分からない感覚があるのかもしれない。だが、それを考慮に入れたとしても、やはりこんな風に年端も行かない少年が無防備に野宿をするのは危険過ぎると、ルヤには思えてならなかった。

「でも、こんなところで寝るのはやっぱり危ないよ……今夜からはちゃんと宿で寝よう」

「別に、危なくない……多分、今までも、ずっとこうしていた」

何でもないことのようにそう言って寝返りを打とうとする少年に對し、ルヤは、胸の奥から何か熱い痛みが噴き出してくるのを感じ、止めることが出来なかった。

「危ないよ！　今までは大丈夫だったかもしれないけど、これからもずっと無事でいられるかなんてわからない、こんなところに寝て……死んじゃったかと思ったんだから！　外には何がいるかわからない、すぐく、すぐく、危険なんだよ？　どんなに強い人だって、死んじゃうかも……死んじゃうかもしれないんだから……！」

頬を伝う滴に、遅れて気が付く。

まだ言い足りないのに、喉が震えてそれ以上言葉が出てこなかった。

重ねていた。これまで幾度となく命の危機に直面しながら、それでも何とか乗り切って無事に生きてきた、そして今、いくら待っても戻ってこない仲間達の姿が目の前にいる少年とひどく重なって見えて、その危険を顧みない態度が、己の命を軽視するような発言が、どうしても許せなかった。

「あなたの待ってる人、死んだの……？」

少年は目を見張って、ルヤを見ていた。

彼の声には、無表情の奥に、時々違う感情が混ざっている。

ルヤには、何となくそれが分かるようになってきた。

「死んで、ないよ……絶対死んでない」

「そう……」

「泣かないって決めたの……この目で見るまで、二人が死んだなんて絶対認めないって……なのに……どうして……」

勝手に目から落ちていく涙を忌々しげに服の袖で拭い、強く歯を悔い縛る。

この痛みに耐えて、どうにかしてやり過ごせば、きっとまた、二人の無事を信じられる。前向きな自分に戻れる。そう胸の中で必死に唱え続けていたルヤの耳に、別の世界から発せられたような抑揚のない声が響いた。

「どうして、泣くと、それを認めたことになるの……」
向けられた、迷いのない問い掛け。

「不安で、怖かったら、泣いたらいけないの」
口をぽかんと開けて、少年の顔を見詰めた。
いつもと変わらない、何の感情も宿さない顔。

その顔が、疑問を投げ掛けてくる。
大切だと思い込んでいたこだわりと、それを意地になって守ろうとする、疲れ切った心に。

あ、と短く声をあげて、俯き、唇を噛んだ。

——そうだ……
絶望を受け入れるためだけに、涙をとっておかなくてもいいのかもしれない。

二人の死を認めなくても、不安で、怖くて、寂しくたって、いいのかもしれない。

それならば。

もしそうならば。

泣いたって、構わないのかもしれない。

そう、気付いた途端、留め金を外したようにしゃくり上げる鳴咽が止まらなくなった。

何も言わない少年の前で、漸く出口を見付けて溢れ出した感情の渦に身を任せる。溜めてきた痛みをすべて涙に変え、この荒れ果てた大地に捨ててしまいたいと願いながら。

漸く、引きつるような嗚咽が落ち着き始めた頃、既に日は頭上まで昇り、照り付ける日差しが肌を焦がすほどだった。目の前の少年は、どこを見るでもなく、ただ岩に寄り掛かるようにして膝を抱え座っていた。先程、泣きじゃくる激情の隙間に垣間見た時からまるで変わっていないその姿勢に、ルヤは、彼らしい、と、何故か不思議な安堵感を覚えた。彼の態度には、慰めや気遣いといった、相手に歩み寄ろうとする感情の動きは一切見られないのだが、自分の立ち位置からただ有りの儘を見て、否定も肯定も、戸惑うことすらせず、するりと受け止めてくれる、そんな、優しくはないけれど、決して冷たくもない、透きとおった夕闇の空のような空気を纏っていると、ルヤには感じられた。

ルヤが泣き止むと、村から少し距離があるこの岩場には、乾いた風の音しか聞こえなくなった。そのまま、互いに言葉を発することなく、足下で風に運ばれる砂の行方を目で追っていたが、視線をそのままに、先にぼつりぼつりと語り出したのはルヤの方だった。

「昨日、話した、待っていた仲間のひとりが……帰ってきたんだ」
聞いているのかいないのか、反応のない少年に、まだ自分の中でも飲み込み切れていない衝撃の数々を、ルヤはひとつひとつ整理するように淡々と話した。仲間のうちの一人が酷く衰弱した状態で帰ってきたこと、深い傷を負った形跡があるのに、短期間で綺麗に塞がっていたらしいこと、そして、他の二人が、死んだかもしれないということ。

話し終え、再び訪れた静寂に身を浸そうとしていたルヤに、

「あなたは……幸せだ」

低く舞う砂を見詰めたまま、少年は風に掻き消されそうな声で言う。

「え……?」

反復しながら、微かに眉を寄せるルヤを漸く視界に入れて、少年は詩を詠うような調子で音を紡いだ。

「その苦しみも、悲しみも、証……怖れるのは、あなたの中に、失いたくない幸せがあるから……僕は、この世界の何が死んでも、きつと、そんな風に泣くことは出来ない……例えば、滅びるのがこの身体……僕自身、だったとしても……」

月無しの夜空のような、漆黒の髪が揺れる。

「……僕の中には、何も、無いんだ」
寄る辺ない、空虚な瞳。

けれど、その空虚の奥に、小さな寂しさの欠片が漂っている。

それを知っていたから、ルヤはゆつくりと首を振って、微笑んだ。
「あるよ……あなたの中にも。だって、本当に何もなかったら、それが、幸せなことだってわかるはずないもの、何もないのが、寂しいことだって、わかるはずないもの」

力強くそう言い切るルヤに、少年は珍しく瞬きをする。

「……僕にも……？」

ルヤは立ち上がり、砂の上に座ったままの少年に手を差し伸べた。

「あるよ、あなたはただ、忘れてるだけ」

ぼんやりとした様子で、ゆつくりとその手を取った少年を、力一杯引っ張り上げる。

「あなたの中には、きっと素敵な思い出がいっぱい隠れてるよ……私、そう思う」

「……もし、そうだったら……いいんだけど」

向けられた笑顔に、少年は複雑な表情を返した。

とても信じられない、とても言いたげに。

いつか全てを思い出して、この空を、大地を、人を、生きているものすべての命を、はっきりと感じ取れるようになったら、この少年も、痛みと恐れと、幸せを取り戻して、笑ってくれるようになるのだろうか。

ふと、そんな未来を想像して、そうであるようにと強く願った。

「ねえ、あなた、名前は？」

聞こうと心に決めていた名前を漸く尋ねると、少年は自分にも名

があるであろうことに初めて気付いたような、少し驚いた顔で暫く無言で思索を巡らせた末、

「……覚えていない」

予想通りの答えを返してきた。

「そう、じゃあ、思い出すか、ご両親が見付かるまでの間、名前が必要だよね……」

楽しげに腕を組んで何やらぶつぶつと呟き始めたルヤの横で、少年は小首を傾げた。

「必要、かな……呼んでくれるような人、僕には、別にいないのに」そんな少年の声を遮るように、ルヤは思いついたように手を叩いて、彼に向き直った。

「ラタン……なんてどう？ 私の国の古い言葉で『切なる願い』って意味があるの」

「……………」

「気に入らない？」

「別に、好きに呼べばいい」

ふいと、背を向けて村の方に歩き出そうとする少年は、何だか少し、照れているようにも見えて、ルヤは嬉しそうに後を追った。

「ラタン」

呼び掛けると、数歩進めて、少年は、戸惑ったように振り向く。

「名前、必要だよ。少なくともここに、あなたを呼ぶ人間がいるんだから」

この時の、目を丸くしたような少年の反応は、それまでの、何も見ていない、全てを心が素通りしているような、無色透明なものは明らかに違っていた。

後から思うと、この時からだったのかもしれない。

彼が、実体のない何かから、この世界に生きる人間の一人に変わりは始めたのは。

彼自身が、そう言ったように。

六

六

ジェドルが村に戻り、少年に名前を送った日から、三日が過ぎようとしていた。

ビスラとサーナは未だ戻らず、一部屋分の宿泊費を支払う資金すら底を突いてきたこともあり、ルヤは頼み込んで宿で賄いの仕事をさせてもらうことにした。ジェドルはあの発作後、特に変わった様子もなく落ち着いているが、記憶についてはあれからルヤも深く聞き出そうとするような会話は避けている為、彼の中で今、あの日のことがどういう状態で受け止められているのか、推し量る程度にしかわからなかった。せめて、三人を襲ったのが退治を依頼された獣なのか、それとも別の得体の知れない何かだったのか、それだけでもわかれば、村を防衛する手も打てるのだが、彼の様子を外から見ている印象としては、思い出したような気配も、その兆候も感じられなかった。

名付けた日の翌日には、ラタンのことをジェドルにも紹介した。初めジェドルはラタンを見て、放心したような妙な顔をしていた。どうかしたのかと尋ねると、彼は首を傾げた後、多分この子供の外見が珍しかったのと、こんな幼い子供が記憶喪失だということに驚いたんだと思う、と、よくわからない、曖昧な答えを返してきた。だが、それ以後は特に変わった様子もなく、三人は宿の中で顔を合わせる立ち話をするような間柄になった。尤も、ジェドルは傷が塞がっているとはいえ、激しく動いたりすればいつまた開いてもおかしくない段階であり、油断はできないと後から聞かされた為、部屋からほとんど出られない生活だった。

昼食の後片付けが終わり、女将から数時間の休憩と昼食のついでに焼いたというハニーパイを貰って、ルヤはラタンの部屋に向かっ

た。あの日から、ラタンは寝苦しいとぼやきながらもルヤの言い付け通り部屋で眠るようになっていた。

今の時間だと恐らく昼寝をしているだろうが、この機を逃せばラタンの保護者探しは更に延期されてしまう。本当はジェドルが帰ってきた翌日にでも探しに行こうと思っていたのだが、思った以上に厳しかった賄いの仕事を朝から晩まで叩き込まれていて、この三日間はまとまった時間がとれなかった。漸く空いた夕食の準備が始まるまでの貴重な時間を一瞬でも無駄にするまいと、ルヤはノックしても返事のないラタンの部屋に乗り込み、案の定ベッドの上で眠り込んでいる彼を叩き起こした。

「ラタン、起きて！ 余り時間がないの！ あなたを連れてこの村に來た人、きつと今頃心配してるよ」

突然安眠を妨害されて不機嫌そうなラタンに、ハニーパイを与え、強引に手を引いて、ジェドルに外出の旨を伝えると、宿を出た。

ラタンのペースに付き合っていたら、休憩時間などすぐに終わってしまう。まだ半分寝ているラタンに活を入れながら、村にある家という家、道行く人という人に、彼を見掛けたことはないか、この村に彼を連れてきた人間について何か少しでも知らないかと、村中を尋ねて歩いた。

コロイにはせいぜい三十数軒しか家がなかったが、話好きの村人達に捕まって一軒一軒に時間が掛かってしまい、半分も回れないうちに休憩時間もあと僅かという頃合いが近付いてきてしまった。これまで聞き込んだ限りでは、ラタンの保護者どころか、彼本人に見覚えがあるという者にさえ出会うことが出来ず、手掛かりは無いままだった。

「悔しいなあ、もう少し時間があれば見付けられるかもしれないのに……あつ、ねえ今の人、違うかな？」

村で一番賑わっている通りを行き交う人々の中にそれらしき年齢の人物を見掛ける度、振り返っては追い掛けようとするルヤを見兼ねて、ラタンが服の裾を引っ張る。

「もう、帰らないと……」

「……でも、今の人、ラタンのお父さんかもしれない……今を逃したら、二度と会えなくなるかもしれないんだよ？」

真剣な眼差しで、必死に、正面から訴えかけてくるルヤを、ラタンは呆氣にとられたように眺めて、溜息を吐いた。

「今のが親なら、どうして、何も言わずに通る過ぎるの……」

「あ……そうか、そうだね……でも待って、たまたまこっちに気付かなかったってことも考えられるよ」

いてもたってもいられないといった様子で人込みに紛れて見えなくなってしまう人間を再び探しに走ろうとするルヤを、ラタンは今度は強く手を引いて止めた。

「……あなた、少し、休んだ方がいい」

「何言ってるの？ 商人や放浪者は一つの村にそんなに長居しないんだから、早く見付けないと出て行っちゃうよ？ 会えなくなっちゃうんだよ？」

「置いていくような人間なら、別に会えなくても構わない。それに、僕を連れてきた、人……多分ここには、いない」

「覚えてないのに、どうしてそんなこと言えるの？ もしいないなら、ラタンあなた、どうやってこの村に来たって言うの？ この村は四方を荒野に囲まれてて、あなたの足じゃ少なくとも五日は歩かないと人の住めるところまで行けないんだよ？ お父さんとお母さんを見付けなきゃ、あなた、これからどうやって生きていくの？」

捲し立てるうちに何故か語調が荒くなり、まるで八つ当たりのような調子になっていることに、泣きたくもないのに視界が鈍い熱に滲んでいることに気付き、ルヤは高ぶる感情を抑え込むように「ごめん」と口元に手を当てた。

「どうしたんだろう、ごめんね、私……こんな風に言うつもりじゃなかった……ただ、会えなくてもいいなんて言ったら絶対に駄目……思い出した時、後悔するよ……きつとラタンにとって、誰よりも大切な人なんだから……」

ラタンはその言葉に耳を傾けながら、握った手に目を落とした。

「このままでは、あなた……壊れてしまう」

意表を突いたその言葉に、咄嗟に反応できずにいるルヤに、ラタンは顔を見上げて、もう一度繰り返す。

「あなたの待つてる人、まだ帰らない……そんなに我慢して、元気にしてると……あなた、壊れてしまうよ」

漸くラタンの言わんとしていることを悟り、それによって初めて、ルヤは思っていた以上に自分の心が強張っていることを自覚することになった。確かに、自分はビスラとサーナが帰ってこないという事実から目を逸らそうと、無理に気分を上向けようとしている節があった。日が経てば経つほど、希望は、その何倍もの大きさの絶望に追い詰められていく。朝起きる度、二人がいないこと、現実的に考えれば考えるほど、彼らが生きている可能性が低いことを強く実感させられて、胸が押し潰されそうになった。賄いの仕事に打ち込んでいる間も、厳しいと感じることはあっても、辛いと思わなかったのは、二人のことを考えている方が余程辛いということに気付いていたからかもしれない。空いた時間にこうして一心不乱に何かに取り組もうとするのも、ビスラとサーナのことを思い出す隙を作らない為でもあったのだ。

その、自分自身でもはっきりと意識していなかった思考と行動を、他人に興味を示そうとしないこの少年が見抜いていたことに、そしてどうやら彼なりに心配してくれているらしいことに驚いたのと同じに、その気持ちに胸に染みた。こんなにも辛く寂しい日々の中にいても、自分は独りではないのだと、そう、思うことができた。

「ありがとう、ラタン……確かに、私は二人のこと考えないようにしてる……別のことで頭をいっぱいにしようとしてる……このまま逃げてたら、あなたの言う通り、いつか壊れてしまうのかもしれない……でもね、きつと、じつとして、そのことばかり考えていたとしても、私は、壊れてしまいそうな気がするの、自分でもどうしようもないんだ……」

ルヤは、今の気持ちを包み隠さず、この、自分より随分年下の少年に伝えて聞かせた。きっとこの少年には、都合の良い綺麗事や誤魔化しは通用しないだろうと思えたし、ルヤ自身もまた、何事にも真っ直ぐに臨む姿勢を崩すことを知らないラタンに、嘘はつきたくなかった。

その上で、ルヤの言葉を聞いて僅かに表情を曇らせているラタンに、

「でもね、ラタン、あなたが心配してくれてる、それだけで、今私は少し楽になったよ……壊れなくてすみそうだよ……ありがとう」

そう、笑い掛けて見せる。

この時、ほんの微かに、ルヤに応えるように、ラタンが、微笑んだように見えた。

ルヤが目を丸くすると、すぐに引っ込めたが、それは確かに、初めて見る少年の笑顔だった。

「明日も、探そうね……ラタンの、お父さんと、お母さん」

さっさとして行ってしまうおうとするラタンの横に追いついて、ルヤはしっかりと手を繋いだ。

宿へ戻る道すがら、反応の薄いラタンにあれこれと他愛もない話題を振りながら暫く歩いていた頃だった。不意に、背後の喧噪がこれまでの和気藹々とした賑わいから、不穏なざわめきのようなものになったのを感じて振り返ると、村人や、商人達、多くの人々がまるで何かに怯え、逃げ惑っているかのように、通りから散り散りになって駆けていくのが目に入った。

「何かあったんですか？」

丁度横を走り抜けようとしていた者の一人に声を掛けると、顔を引きたらせた中年の女が何度も後ろを振り向きながら、

「でっかい、化け物みたいなスナヒョウが東門のすぐ側をうろついてるって！ 村に入って来そうだってさ！」

そう、裏返った早口で言うが早いのか、もんどりうって家屋の並び

に消えていった。

スナヒヨウ——大きく跳ね上がった鼓動を聞きながら、ルヤは再び、今まで歩いてきた通りに視線を向けた。

耳の奥で脈打つ音が、徐々に速度を増していく。

それは、村で退治を依頼されたのと同じスナヒヨウだろうか。そして、ジエドルを、ビスラと、サーナを襲ったのも、そのスナヒヨウなのだろうか。現時点でははっきりとしたことは分らない、だが、今日の前で繰り広げられている状況を見ると、他のどの推測よりも現実味を帯びているように感じられた。

ラタンが不思議そうに自分を見上げていることに気を配る余裕さもなく、ルヤは一言「宿に帰っていて」と彼に告げると、考えるよりも先に東門を指指して恐怖と混乱渦巻く雑踏の中を突き抜けるように走り出していた。

息を切らせて門に辿り着くと、客引きの呼び声が響き渡っていた。先程までの賑やかさが嘘のように、誰もが逃げ去った後の不気味な静けさが低く唸る風の声を際立たせていた。

擦れ違ふ多くの放浪者らしき屈強な男達から、あれはあんたには無理だ、行くのはやめておくと何度も引き留められたが、ルヤの耳には入らなかった。途中、満足な武器を持っていないことを思い出し、店仕舞いしようとしていた武器商人から後払いでと強引に拝借してきた細身の剣を鞘から抜き放つ。

ずしりと手に馴染まない重みがあった。

実戦では、必ず扱い慣れた剣を使え。

遠い日のビスラの言葉が過ぎったのは、一瞬だった。

例え、扱い慣れていない武器であったとしても、その為は何倍も不利になったとしても、刺し違えてでも相手の息の根を止められる獲物さえあれば、それで十分だ。その覚悟を確認するように青銅の柄を固く握り締める。

息を殺し、周囲を窺っていると、不意に右手から地響きのような

低い唸り声。はっとして振り向くと、目を血走らせた巨大な金色が足音を殺してすぐ傍まで迫っていた。狩猟本能を剥き出しにし、流れるようにしなやかな動きで飛び掛かってくる、体長が大人の男の背丈以上はあろうかというスナヒョウの爪を紙一重で後ろに飛んでかわす。着地し、食い入るような視線を相手から離さないまま、体勢を崩すことなく剣を構え直すルヤと、素早く身を翻して低い姿勢を取り威嚇の唸りを上げる黒い斑点模様の猛獣とは、対峙し、睨み合う格好となった。

大きい。これまで何度か目にしてきたスナヒョウと呼ばれていたものと、本当に同じ種なのかと疑うほどに、眼前にいる生物は見たこともないほどに巨大で、凶暴性までその体格に呼応しているかのようだった。

ジェドルが瀕死の重傷を負い、記憶を失ったのも、ビスラと、サーナが未だ帰らないのも、元凶はこの野獣なのだろうか。この爪が、牙が、唸り声が、やっと手に入れた掛け替えのないたくさんのものをバラバラに引き裂いたのだろうか。

「ビスラとサーナは、どこ……？」

恐怖より、怒りと、憎しみの方が勝っていることを幸運に思った。「どこにやったの？」

音が鳴るほど歯を食い縛って、ルヤは今まさに飛び掛かってこようとする相手の額一点を狙い、体ごと、渾身の力で剣を突き出した。硬いものに激しくぶつかる手応え。

捉えた、と、心の中で確信した。

だが――

敵の額を突き破ったと信じて疑わなかった切っ先は僅かに反れて、スナヒョウの耳を削ぎ落としていた。剣の特性の微妙な差異が、命運を分ける壁になる。真剣なビスラの顔が瞬きの間に浮かび、逆上した敵が勢い良く振り下ろしてきた前足への反応が一瞬遅れる。しまった、と舌打ちして身体をひねろうとした瞬間、その鋭く巨大な爪がルヤの左腕を深く切り裂いていた。

相手の目を睨みながら、一步、二歩と距離を取る。剣を構えようとするが、利き腕をやられ、痛みで上手く力が入らない。そうこうしているうちに、耳を削がれて怒り狂い、血の臭いに興奮して更に凜猛さを増した金色の猛獣が、息つく間も与えず距離を詰めてくる。こちら相手に攻撃の隙を与えまいと緩急を付けた動きで何とか牽制しているが、このままでは再度の接触は避けられないだろう。そうなれば、明らかに動きが鈍っている今の状態では敵の攻撃を一度は避けられたとしても、連続して至近距離から繰り出されるであろう次の一撃には無防備になってしまう。

手の届く距離から、身体を低くし、相手の喉笛に食らいつく機会を狙っている敵の額を凝視しながら、これが最後のチャンスだと、頭の奥で誰かが囁くのが聞こえた。

相手が砂を蹴るのと同時に、踏み出し、迎え撃つ。

力任せに額を狙ったはずの剣はしかし、気迫だけが先走ったものだった。

大きく的を外して胸の白い体毛の上を滑っていく剣と擦れ違うようにして飛び付いてきた猛獣の想像以上の体重に為す術もなく押し倒され、手から離れた剣が地面に転がる。

鋭い牙が鼻先まで迫って、死を、覚悟した。

目を固く閉じ、唇を噛んで、その瞬間を待つ。

だが、すぐに訪れるはずだった死が訪れないことに、自分の上に申し掛かっていた重みがいつの間にか消えていることに気付き、無傷の右腕を支えに半身を起こして視線を地面に沿わせた。すると、今まさに足をばたつかせて起きあがろうとする右耳のないスナヒョウと自分との間に、白い布を服の裾からはみ出させて立った男が、背を向けたまま何かを怒鳴っていた。

「何やってんだ、このバカッ！」

それは、まだ、部屋から出ることを禁止されているはずのジエドルだった。どうやら、ルヤを組み伏せていたスナヒョウに体当たりを食らわせ引き剥がしたようで、肩の辺りを軽くはたたきながら野獣

と睨み合い、口だけを動かしている。

「お前一人でこんなのとやれる訳ないだろうが！　今すぐ村の奥に走れ！　俺も後から行く」

舌打ちをしながらそう叫ぶジェドルの格好を見て、ルヤはぞっとした。彼は手ぶらだった。短剣一つ持っていない。

「ジェドル！　あなた、武器……！」

強張った声を上げながら、三日前傷だらけで戻った時、彼が愛用の剣を持ち帰って来なかったことを思い出す。何故かと尋ねた自分に、旅先でなくしてしまったようだと話していた。よく見れば、防具の類も何一つ身に付けておらず、薄手の布の服一枚であることに気付く。取るものも取り敢えず、周囲の制止を振り切ってここまで来たのであろうことが窺えた。

「いいから早く行け！　俺なら素手でも何とかなる、お前がいると足手まといなんだよ！」

嘘だ。何年も共に旅するルヤにはそれが嘘だとすぐにわかった。彼は剣術こそ人並み以上にできるが、格闘は不得手なのだ。ビスラに習得しておいた方がいいと勧められて基礎だけは身に付けたようだが、それ以上の訓練からは逃げ回ってばかりだった。しかもあの怪我が完治していない身体で、ここ数日は鍛錬もしていない。本調子の時でさえ彼一人では難しそうな相手に、素手で立ち向かうなど無謀に過ぎることは明らかだった。

「嫌だ！　ジェドルが死んじゃう！　死んじゃうよ！」

今、自分が逃げ延びたとしても、残されたジェドルがただで済むはずがない。彼が一人でこの化け物と格闘する様を想像して、戦いの最中にはなかった震えが全身に湧き上がった。

「後から行くって言ってんだろうが！　お前が行かないと俺も逃げられねえんだよ！　どうでもいいからさっさと行け！」

「嫌だ！」

ジェドルは本気で逃げるつもりなどない、恐らく、逃げられないだろうことを覚悟している。それなのに、そんな風に自分を安心さ

せる為に、いつもの調子で憎まれ口を叩くのだ。

と、その瞬間、こちらに気を取られているジェドルの隙について、死角から襲いかかろうとするスナヒヨウの姿が視界に飛び込み、「後ろ！」と、悲鳴混じりの声をあげる。

その声に反応し、咄嗟に横に飛び退こうとするジェドルの動きはやはり普段とは比べものにならないほど鈍いものだった。避けきれずに飛び付かれて肩を牙に捕らえられたジェドルは短く呻き、痛みを耐えながら必死に地面に足を食らいつかせて敵の頭を掴み引き剥がそうとする。しかし、その、自分の身長以上はあろうかという体躯を支えきれず、ふらつき始める足下は、力尽きて倒れるのが時間の問題であることを物語っていた。

彼の思いと行動を無駄にしない為にも、この場は退くべきなのかもしれない、それが自分の目指すべき、一人前の、判断力のある大人の選択なのかもしれない。それを頭では理解しながら、ルヤは、もうひとつの選択肢に手を伸ばす自分を迷わず解き放った。

冷え切った唇を噛みしめて、駆け出す。

地面に落ちた剣を拾い、ただ、ジェドルの命が消えることだけを怖れて。

彼の死と引き替えに生き延びることができたとしても、その先にいる自分を想像できない。彼らのいない明日が想像できない。ジェドルのいる、みんなのいる未来に向かいたかった。例え辿り着けず、命尽きることもなくても。

「何やってんだ！ 早く逃げろ！」

肩にかじり付かれたまま、険しい顔で怒声をあげるジェドルに、今度は揺るぎない瞳で叫び返す。

「私は逃げない、あなたが先に逃げて！」

腕の激痛に構わず顔面を掛けて剣を突き出すと、案の定スナヒヨウは一旦ジェドルから離れ、すぐに再び飛び掛かろうと低い姿勢を取る。こちらに一切の余裕を与えようとは思わない。

「ここで二人とも無駄死にする気か！」

「無駄死にしたくなかったらあなたが逃げてジェドル……私には、できない」

「馬鹿言ってるじゃねえ！俺が、何の為にここまで戻ってきたと思ってるんだよ」

「我が儘言っで、ごめん……でも、これが私の答えなの」

目をぎらつかせて、どちらに飛び掛かるべきか迷っているかのような仕草のスナヒョウに一步近付き、血の伝う剣を構えながら、ルヤの胸にもう葛藤はなかった。後は冷静な判断力を持ったジェドルが、諦めてこの場を離れるのを待てばいい。

「……お前を一人にしたくねえからだろうが」

食い縛った歯から絞り出すような、悲痛な呻き。

「お前が死んだら、意味ねえだろうが……！」

ジェドルが動こうとしない。どんなときも感情に流されることなく、理に適った最善の策しかとろうとしないはずの彼が。

猛獣は、体の小さな、容易に噛み殺せそうな方を標的に決めたようだった。

「今のうちに逃げて！お願い！」

声を張り上げながら、これが、自分の発する最後の言葉になるかもしれないと思った。腕から滴る血で汚れた剣の柄を、身体中に残った力を全て集めて握り締め、踏み出す刹那を見計らう獣の目を睨み返す。その目が、狂気さえ宿しているように見えた金色に輝く体が、この時、何の前触れも無く眩い光の中に消えたのを、確かに視覚しながら、思考が捉えたのは少し遅れて鳴り響いた轟音が耳を劈いた後だった。

後ろからジェドルに強く手を引かれ、顔を上げる間もなく爆風から庇うように抱きかかえられる。そのまま、肩越しに見える暴れ狂うような強烈な光の渦を、徐々に弱まり静かに消えていくまで、息をするのも忘れて凝視していた。だが、それでも、入ってくる映像が一体何なのか、何が起きているのか、わからなかった。

埃か、煙か、舞い上がる粉塵が漸く晴れて、ジェドルの腕から解

放されても立ち尽くしていたルヤは、少し離れた地面の上に黒い塊のようなものを見付けてゆっくりと近付いた。見ると、足下に転がったそれは、たった今、その巨体と凶暴性で自分たちを追い詰め、命を脅かしていた、右耳の無いスナヒョウの、見る影もなく炭化した姿だった。

少し遅れて隣に歩いてきたジェドルも、その焼け焦げた肉塊を見下ろして、瞬き一つせず動かない。

一体何がどうなれば、この状況が生まれるのか。

自分が刺し違える覚悟で臨んだ猛獣は、背後からなだれ込んできた閃光と爆音に呑み込まれ、殺気もろとも灰となって、今、ここに散らばっている。あの光が、不死身の化け物にすら見えたスナヒョウをこんな姿に変えたのだろうか。だとすれば、それはどこから、どんな理由で。漸くそこまで思考が追い付いて、光が押し寄せてきたように思える方角に目をやったルヤは、煙った景色の中で見え隠れする黒い人影に視線を奪われた。

周囲の景色から浮かび上がるような漆黒の、けれど小さな人影。

その頼りない姿には、確かに見覚えがあった。

「……ラタン？」

棒立ちでこちらを眺める、無表情を体現しているような彼を見詰めて、名前を呼ぶ。気味が悪いほどの静けさに満ちた、この村の入り口から四方を見渡してみても、他には誰も見当たらなかった。

喉の奥が乾いてしまうほどの時を要して、開いた口から漸く次の言葉を発する。

「今の、あなたが……？」

おかしいくらい一本調子な声で尋ねると、暫くぼんやりこちらを見返していた少年は、相変わらず感情が読みとれない表情で自分の両手を眺めてから、顔を上げ、頷いたようにも首を振ったようにも見える、曖昧な反応を浮かべるのだった。

七

七

差し込んだ夕日が石造りの床に日溜まりを作るジェドルの部屋で、向かい合った三人は慎重に、一言一言噛みしめるように言葉のやりとりを交わしてしていた。まるで、ほんの少し手元が狂えば複雑に絡み付いてしまいそうな細い糸屑を、震える手で一本一本引いてほどこうとするように。

本当は、あの後、あの場で、すぐにでもラタンに事の経緯や事情を問い質したかった。しかし、直前まで繰り返していた死闘からくる疲れと、傷の痛み、命懸けで挑んでも互角に渡り合うことすら叶わなかったあの巨大なスナヒョウを、一瞬で炭に変えた張本人がこの幼い少年であるらしいこと、その衝撃に混乱していたルヤは、ラタンに対して冷静に語り掛けることができず、帰っていると言ったのにまだ宿に帰っていなかったのか、あなたのような子供がこんなところに近付いたら危険だなどといった、とりとめのない、的外れな質問を繰り返すことしかできなかった。そうすることで、何とか目の前で起きた信じ難い出来事を、受け入れやすい現実を重ね合わせようとしていたのかもしれない。そして、そうこうしているうちに、一人また一人と通りに出てきた村人や滞在者達が例の焼け焦げたスナヒョウの死体を発見して騒ぎだし、気が付くと村中の人間に取り囲まれているという收拾のつかない事態に発展してしまっていた。まだ自分達でさえ整理しきれていない事の成り行きを勝手に推測した上での賞賛や羨望、畏怖、皮肉、批判を浴びせてくる村人達を前に途方に暮れていた三人を、人垣を掻き分けてやってきた村医が強引に人の輪から連れ出してくれてその場は切り抜けたが、その後も、村の診療所で傷の手当てを受けたり、訪ねてきた村長に事情を説明したり、宿に帰れば血相を変えた主人と女将を迎えられ、例

によって宿代を払う要らないの問答になったりと、その日のうちとはとても落ち着いて話し合うどころではなく、翌日の夕方になって漸くこうして三人だけでいられる時間を確保することができたのだった。

あの、スナヒヨウの一件以後も、ラタンの様子にこれといった変化はなく、何を話し掛けてもぼんやりしたまま一言二言返すだけで、淡々としたものだった。こうして三人で顔を付き合わせていても、深刻な表情を浮かべているのはルヤとジェドルばかりで、背もたれのない椅子に腰掛けたラタンは人形のように動かず、視線を宙に留めている。

そんな、出会った頃と何も変わらないように見える彼の姿を、ルヤの心はもう既に、一昨日までのただ感情表現が苦手な、全てを失った無力な子供としては捉えられなくなっていた。

あのスナヒヨウをこともなげに殺したのが彼であろうことは、当時の状況が物語っている。こちらの問い掛けに対する彼の反応が曖昧な所為もあり未だに信じ難いが、本当にそうなのだとしたら、その力は一体何を意味するのか。

表面からはあまり感じ取れない、けれど彼自身も切望しているであろうその疑問の答えは、手元へ転がり込んだ不思議な手掛かりによって、近づくことなくまた別の謎へと姿を変えた。

「やっぱりあの時、現操術を使ったのはラタン……なんだよね？」

あの光が現操術であることだけはまず間違いないだろうと考え、ルヤはそう切り出した。それ以外に、あのような超自然現象を起こす手だてを、ルヤは知らない。その現操術と呼ばれる力もまた、千二百年前にシトア教宗主アリオリシトアが編み出し提唱するまではこの世に存在しなかった画期的な能力だ。現在までのところ、それを最初で最後に、超常的な力の類は他に一つとして存在しない。ルヤの知る限り、それが一般的に広く浸透した常識だった。

だがそうすると、ラタンはシトア教徒であるばかりでなく、目に焼き付いたあの閃光の威力を見る限り相当の使い手、つまり、かな

り高位の僧侶だということになる。果たして、この年齢でそこまでの使い手になれる人間がいるのだろうか。しかもそのような高位の僧が、記憶を失っているとはいえこんな辺境を一人で彷徨っていたりするものなのか。更に言えば、どうして彼はシトア教の僧衣ではなく、見慣れない黒いローブに身を包んでいるのか、と、辻褄が合わない点がいくつも出てきてしまう。そして、そんな矛盾の極め付けは、質問する度、予想の範疇を超えた世間知らずぶりを発揮するラタンの浮世離れた返答だった。

「げん、そうじゅつ……というの……？ あれは」

「え……現操術、わからないの？ あなたが使ったんだよ？ ラタン」

専門であると思われる人間が、現操術という呼称そのものを忘れてしまうなどということがあるのだろうか。単語を聞くことすら避けてきた自分たちでさえ、現操術が何であるかくらいは説明できるというのに。ラタンの記憶喪失がそれだけ重度であることを意味しているのかもしれないが、その、一瞬の迷いもない、まるで知らないという反応が、ルヤにはひどく異様なものに感じられた。

「特殊な、ことなの……それは……」

「……私も詳しいわけじゃないけど、少なくとも自然に使えたりしないってことは確かだよ。勿論、私も、ジェドルも使えない。習得法は漏洩しないようにシトア教団が徹底的に管理してるし、僧院に修行僧として所属しても、術を伝授して貰えるのは色んな厳しい訓練を乗り越えて地位が上がってからだって聞いたことある……あなたくらいの歳じゃ、僧院に入りたてとか、見習いとか、そのくらいが普通じゃないのかな？」

「しとあ、きよ……？」

「やだ、嘘でしょ？ シトア教くらいは……」

まるで初めての響きが良く聞き取れなかったかのように反復するラタンに、ルヤは薄ら寒いものを感じた。この大陸にとってシトア教とは、ただの宗教以上の意味合いを持っている。シトア教の教義

理念も、教団そのものも、この大陸の様々な事象に多くの側面から関わり、良くも悪くも深く浸透し、影響を与えている。恐らく、この東西ヘンディア大陸に生きる人間の中で、シトア教と聞いて何の感情も湧き起らない者はいないのではないかというくらい、シトア教という概念は人々の思想を構成する重要な要素となっているのだ。

それを、知らないというラタン。

ただ忘れているだけなのだとしても、現操術師の彼がそのワードに全く反応しない、その様子を見て受けた衝撃は、例えるなら、食べたり寝たりといった、生きていく上で当たり前の行動まで忘れてしまった人間を前にしているような感覚だった。

「その、しとあ、きょう、というのが……僕の、帰るところなの……」

黙ったまま硬直しているルヤに、シトア教の意味自体には大して興味も無さそうに、ラタンが質問を省いて発する。

止まっていた思考が、その問い掛けに漸く動き始めて、ルヤは少し考えてから、曖昧に頷いた。

「そうだね……現操術が使えるんだから、少なくとも過去にどこかの僧院に在籍してたってことだろうし、そこに行ってみればあなたの素性も分かるかもしれない……ここから一番近くにある僧院は、確か……」

「……待てよ。まだシトア教僧と決まった訳じゃねえだろ」

自分の考えを確認するように頷いて辿り始めたルヤの記憶の糸を、今まで一言も発しなかったジェドルの低い声が断ち切った。

顔を上げると、深い思索から浮かび上がったばかりといった様子の、眉間に皺を寄せたジェドルの顔が目に入る。

「え、どうして？ まあ確かに、こんなに若い僧侶の話はあんまり聞いたことないけど……」

「そうじゃねえよ、こいつくらいの歳で高位の僧になるガキは稀にだがいることはいる。若いつてことに関しちゃ、別に疑問はねえん

だ」

「……そうなの？」

「ああ、厳しい修行についてこれさえすれば僧院に在籍するのに年齢制限はねえからな、ガキのうちからのし上がってくような才能のある奴もいるよ……だがな……それとは別に、こいつ、シトア教僧って決め付けるには引っ掛かるところが多すぎなんだよ」

まるで僧院に居たことがあるような彼の口振りに複雑な表情をしているルヤに気付く様子もなく、ジェドルは、自分の方へ真っ直ぐ視線を向けたラタンを見据えるようにして続ける。

「ラタン……お前、もしかすると魔人じゃないのか？」

「ま、じん……？」

「もしくはお前をここへ連れてきた誰かか……」

魔人——その言葉を聞いて、ルヤは漸く、ジェドルがさっきからラタンに対して妙に挑戦的な態度をとる理由を悟った。

「ジェドル、魔人って、まさか……」

「ああ、現操術習得法を盗む形で教団から抜けた僧侶のことだ」

シトア教では、ある一定以上の階位を得た僧侶の脱退が厳しく制限されていて、無断で教団の管理下から外れ、目の届かない場所に行ったというだけで容赦なく命を狙われるといわれている。その禁忌を犯してまで脱走し、世を乱してきた存在——それが魔人だった。彼らの所業により生み出された悲劇の数々を見れば、罪人と言っても過言ではない。西大陸に現操術が渡ったのも、軍事力として利用されることを承知の上で、金と名誉欲しさに習得法を売った魔人の仕業だというのは有名な話だ。

「ラタンが……魔人だっていうの？」

特に動揺するでもなくジェドルの話に聞き入っているラタンを、信じられない思いで顧みる。

ルヤが魔人と聞いてイメージするのは、金に汚い、性根の腐った救いようのない人間の姿で、この、発言も行動もまだまだ幼い、世間のことを何も知らない顔をした子供とは到底結び付かなかった。

「今んところは推測でしかねえが、正統な僧侶なら堂々と僧衣着てるはずだろ。それに、こいつは僧侶の証である鳴鍵めいけんも持ってねえ」

鳴鍵と聞いてもルヤには暫く何のことだかわからなかったが、そう言われれば確かに、僧侶がそんな名前の、装飾を施された杖を所持していたことをうっすらと思い出す。大陸中を旅していても、現操術を忌む三人と共に在った為か、僧院には余程のことがなければ近付かなかったし、旅先で僧侶に出会う機会も多くなかった。そして、そんな三人の中でも特に現操術やシトア教の話になると機嫌が悪くなっていたジェドル。そのジェドルが、こんなにもシトア教についての詳細な知識を持ち、しかもそれを平然と語っている。今までに見たことのなかった彼のその姿に、ルヤは言いようのない、まるで、ジェドルがジェドルでなくなっていくような、恐怖にも似た不安を覚えた。

そんなルヤの心情など想像もしていないといった様子で、ジェドルは少し考え込むように間を置いてから、躊躇いがちに言葉を継いだ。

「それに……俺が一番気になってるのは、あのスナヒョウの死体だ」「死体？ あ、真っ黒焦げの……？」

「ああ……現操術ってのは人間にしかほとんど効かねえんだよ、獣とか草木には、人間に向けた時の半分も威力を発揮しねえ」

「ええ？ そうなの？」

思わず声の調子が外れる。

それは、常識なのだろうか。そんな特徴、ルヤは今まで聞いたことがなかった。だが、確かに言われてみれば現操術が使われるシーンは戦争にせよ治癒にせよ、対人のみであることに気付く。戦争に使用される現操術を間近で見てきたジェドルだからこそ得られた知識、ということだろうか。

「どんな高位の現操術師でも、獣をあれだけ黒焦げにするってのは相当な大仕事になるはずなんだ。ところがラタン、お前は何の造作もなくそれをやってのけた……」

見透かすようなジェドルの鋭い視線を受けても、ラタンの表情は宙を見るときと同じ、ぼんやりとしたものだった。

「どうということ……？」

次々に未知の情報を繰り出す、いつもとどこかが違っているジェドルを、ルヤは戸惑いながら仰ぎ見る。

「さあ、単純にそれだけ桁違いの能力を持った術師なのか、それとも別の何かがあるのか……全ての答えはこいつの中にあるってことだろ」

この、出会ったばかりの人間を見る時の値踏みするような目は、ジェドルの悪い癖だった。

「なあ、ラタン、お前本当に何も覚えてねえのか……？ 俺達に何か隠してないよな……？」

ラタンは無言のまま、ジェドルを瞬きもせず見返している。

その顔に、やはり読み取れる感情はなかったのだが、ルヤには見えた気がした。ジェドルにこんな言い様をされても、不快も、憤りも、悔しさも映さない瞳の奥で、ラタンは、何も感じるこの出来ない自分を静かに悲しんでいる。

「やめて、ジェドル……ラタンは本当に何もかも忘れてるんだよ……もっとじっくり話してみて、ジェドルにもきつとわかるから」

「……そうだとしたらルヤ、少なくともこいつはただのガキじゃねえ、どう転んでも訳ありだよ……あんま情を移すな」

自分を氣遣ってくれているのが伝わってくる、強がりながらも少し辛そうな声。ジェドルの言っていることは、厳しいけれど、正しいのだろう。確かに、ラタンはどんな過去を持っているのかかわからない、言われた通りに警戒して距離を置いていけば、傷付く心配もないのかもしれない。だが、ルヤの心の中でラタンはもう、無表情で得体の知れないただの子供ではなくなっていた。張り詰めていた心を不器用に解きほぐしてくれた、泣き疲れるまで黙って傍にいてくれた、壊れてしまうと心配してくれた、透き通るような笑顔を見せてくれた、それらひとつひとつの思い出が、ラタンを代わりのい

ない、唯一の存在としてルヤの心に刻み付けていた。

「……私には、ジェドルみたいに割り切ることはできない……だって、ラタンは私達を助けてくれた……その為に使った力が例えどんなものだって、私達の命を救おうと動いてくれたことに変わりはないんだよ？ ……そういうラタンの気持ちを無視して、まるで無かったことみたいにして疑えっていうの？」

言い返そうとしないジェドルに感情をぶつけながら、きっと彼が言いたいのはそういうことではないのだろうと、分かっていた。ルヤが傷付かないように、敢えて嫌われ役を演じているのだ。それを知ってか知らずか、夕闇に染まった暗い部屋に溶け込んでしまいそうなラタンがぼそりと口を挟んだ。

「この人の、言う通りだ……信じない方がいい、僕を……」
「ラタン？」

「僕は……信じられないから、自分のことを……」

これまで何度か目にした、この場所にいながら、本当はどこか遠くにいるようなラタンは、言い終え、ぎこちなくこちらを見上げた。そう、この瞳をルヤは時々、実際以上に近く感じるのだ。自分と同じように、目に見えない何かを、安心できる何処かを探しているような、寂しげな色をした瞳。この瞳だけは信じようと、ルヤは思った。彼の持っている他の何もかもが自分を裏切るとしても、今、確かに自分と重なって見えているこの瞳だけは、嘘ではないと。

「あなたが信じなくても、私は信じるよ……」

自分の心と約束するような気持ちで、ルヤは静かにラタンに告げた。

「ルヤ……」

呆れたように、だが、どこか優しげな声で呟いたのは、ジェドル。ラタンは相変わらず無表情で、今の言葉をどう受け取ったのかさえわからない。もしかしたら、彼も同じように、自分がどう感じているのかわからないでいるのかもしれないと、何となく、そう思えた。「疑うどころか、私はラタンがジェドル達を助けてくれた現操術師

かもしれないって、ちょっと思ってるんだよ」

「は？」

素っ頓狂な声を上げるジェドルを、窘めるようにルヤは続けた。
「だって、そう思わない？ 大怪我を治癒できる力さえあれば、何も正式な僧侶じゃなかったっていいわけでしょ？ ジェドルが見たっていう現操術師って、もしかしたらラタンなんじゃないかな？」

眉を寄せて、改めて自分を眺め回すジェドルを、ラタンの方も見上げ、互いに見詰め合ったまま、奇妙な沈黙が流れる。

「ラタンを紹介した時、ジェドル変な顔してたでしょ？ 二人は初対面じゃないんじゃないかって、何となく感じてたんだけど……何か、思い出せない？」

もしそうなら、忘れているだけで、ラタンはビスラとサーナの行方を知っているのかもしれない。そう期待して二人の答えを待ったが、ラタンの方は、すぐに、何も覚えていないというようにルヤに向かって首を振る。

「……忘れる前の僕が、そんな風に誰かを……何かを、守っていたならいいのだけれど……」

遠くに、その様を思い描くようなラタンの目と同じ高さまで腰を屈めて、ルヤは笑った。

「楽しみだね、あなたが全てを取り戻したら、どんな素敵な男の子になるのか」

あまりルヤが正面から見詰めるものだから、ラタンは珍しく戸惑ったように瞳を逸らし、その視線をある一点で止めて、見て、と促すようにもう一度ルヤに目をやる。

見ると、目を離していたほんの少しの間に、ジェドルが腰掛けたベッドの上で背中を丸め、きつく頭を押さえて低く呻いていた。

「ジェドル！ どうしたの？ ジェドル！」

「くそ……！ まただ……頭が……」

「ごめん！ ジェドル、もういいよ！ 無理に思い出さなくていいから！」

帰還した翌日の、同じような状況での彼の異常な苦しみ様が頭を過ぎり、ルヤは青ざめて、怪我をしていない右腕でジェドルの肩を抱いた。

「いつまでも、そんなこと言ってるわけにいかねえだろ……！ けど、なんでだ……あの先……あの先を思い出そうとすると……なんで、こんなに頭が割れそうなんだよ……！」

そのまま暫く苦しんだ後、まるで前回の成り行きをそのまま再現したように、ジェドルは平静を取り戻すことなく徐々に沈み込むように眠りに落ちていった。

思えばあの日から、部屋を覗くと、真昼や夕方など普段は起きているはず時間に深く眠り込んでいるジェドルを何度か目にしてきたが、もしかしたら、あれは今ののように当時の状況を思い出そうとして、恐怖と激痛に苛まれた直後だったのかもしれない。そんな話を彼は一切しなかったが、以前の威勢の良さがここ数日は明らかに影を潜めていたのも、その所為なのかもしれない。想像して、ルヤの胸にも重苦しい痛みが走った。

ジェドルが思い出せない記憶とは、一体どんなものなのか。思い出そうとするのを阻むものは何なのか。それを知ることができた時、どんな景色が目の前に広がるのだろうか。知りたいと思うのと同時に、知るのが怖かった。ジェドルがあそこまで怖れる真実が幸せを運んでくれるとは、ルヤにはどうしても思えなかったのだ。

その真実と、全てと、向き合うことを先延ばしにするように、ルヤはラタンに、彼の怪我が良くなって、もう少し落ち着くまで様子を見ようと話し合いをそこで切り上げた。ジェドルからラタンの記憶が戻るまでは下手に動かない方が良く、そう結論付けて、たとえ不安であっても今まで通り手探りの毎日を過ごす方を選んだ。今、信じたいと思えるラタンが傍にいて、ジェドルが彼らしい言葉を投げ掛けてくれる、そんな、強く握り締めたら手の中で消えてしまいうな、けれど確かに自分を安心させてくれる現実に、必死に縋り付こうとするように。

八

八

話し合いの日から三日、ジェドルが村に戻ってから七日が経とうとしていた。

相変わらずビスラとサーナからの連絡は無く、ジェドルとラタンの記憶も、戻る兆しは見られなかった。

怪我が治るまでは安静にと医者から念を押され、部屋から出ない日々を送っていたことも手伝って塞ぎがちになったルやは、その日、ジェドルに気晴らしにと散歩に誘われ宿を出た。

しかし、村の中を歩いていると、スナヒョウの一件以来すっかり有名になった二人は事ある毎に村人達から声を掛けられ、自分たちでさえ把握できていない事柄についてあれこれ詮索を受ける羽目となった。漸く何度目かの尋問会から解放され、辟易した様子で息をついているジェドルに、今度は擦れ違った見知らぬ男が、離れたところから振り返り声を掛けてきた。

「……おい、あんた」

元は白かったのだろう、砂埃にまみれて茶色く薄汚れたマントを頭から被った、今村に着いたばかりであろうことが見て取れる顔色の悪い痩せた若い男は、「はい？」と面倒臭そうに返事をするジェドルを食い入るように見詰め、やがて、

「いや……人違いか」

一言そう呟くと、探るような目つきを残したまま、ぽかんと佇んでいる二人に背を向けてさっさと立ち去って行った。

「何だあいつ？ 馬鹿にしてんのか！」

元々気が立っていたこともあり、男の後ろ姿にいつまでも悪態を付いているジェドルを苦笑混じりに宥めながら「行こう」と促していたルやは、すぐにまた別の村人達の集団がこちらに近付いてこよ

うとしているのを見て、思い付いたように振り返った。

「そうだ、ねえ、あの橋に行ってみない？」

「橋……？」

「そう、この村に来る時渡ったでしょ、谷に架かつてる吊り橋」

黄風の大地と呼ばれるこの荒野には、中央を南北に分断するように横たわる巨大な亀裂が存在する。人の往来がほとんど無い地域の特質上、橋は数少ない人の住む集落の周辺にしか架かっておらず、深い谷が荒野を真ん中で切り離しているような格好だ。

ルヤ達もここより南西の地から、向こう岸が遠く霞む谷に渡された、少々頼り無げな、あちこち傷んだ古い吊り橋を渡ってこの村まで辿り着いた。

村からは歩いてもそれほどの距離はなく、南門から出たところから見える景色の中に大地を横切る谷が確認できる。ルヤの提案に、危険だ面倒だと初めは難色を示していたジェドルも、このまま村で好奇の目に晒されるよりはましだと思ったのか、渋々頷き、二人は連れだって、少し傾きだした日の光を照り返す荒野に足を踏み出したのだった。

道中、二人の口数は少なく、ただ黙々と、風に舞い上がる砂の音を聞きながら、目的地を目指した。ここ数日、ビスラとサーナがどうなったのか、どうして未だに帰ってこないのかとそればかりを考えていたルヤの胸には、話したいこと、吐き出したいことが膿のよう溜まっていたのだが、それをジェドルに話したところで、返ってくる答えが自分の望むものでないことは分かっている。それを敢えて聞きたいとも、ジェドルに言わせたいとも思わなかった。だが、だからといってそれ以外の、今の気持ちとは裏腹の明るい話題などを口にする気にもなれず、消えることのない胸の疼きを抱えながら、ただ、砂を踏みしめるだけの作業を続けた。そうして、ほとんど無言のまま谷が目と鼻の先まで迫った頃、ルヤは前を歩くジェドルの服の裾からはみ出した白い布に目を留めた。ルヤの傷は随分痛みも引いて、後少ししたら服の下に巻いた包帯も取れるだろうと医者か

ら言われているのだが、鋭い牙を深々と突き立てられたジェドルの肩の傷は、まだ完治までに暫く時を要しそうだという。

ラタンの助けがなければ、今頃自分もジェドルも、ここにはいなかったかもしれない。

今でも鮮明に浮かぶ、スナヒョウの血に飢えた形相。

肌に染み付いた、強烈な殺気。

「やっぱり……ジェドル達を襲ったのは、あの、スナヒョウだったのかな……」

日除けの白いマントを頭から被ったルヤは、少し息を切らせているジェドルの背中に、ぽつりと、漏らした。

違うのかもしれない、だが、もしそうであったなら、傷一つ負っていないスナヒョウが村を襲いにやってきたことは、一体何を意味しているのか。

前に行くジェドルから返答はなく、答えを待つつもりで言ったわけでもなかったルヤが再び足下の屑岩を避けて歩くのに集中しようとしたとき、彼らしくない、歯切れの悪い声が風の音に紛れて耳に入った。

「……あの獣とやりあった時、同じような寒気を感じた気がした……あの時と」

「寒気？」

「ああ……全身が泡立つような気色悪い感覚……だがそれは、あの獣からってより、もっと別の……あの時、ビスラと、サーナが倒れて……それで、それから……俺は……」

額を押さえて立ち止まるジェドルに、ルヤは彼の気を逸らすように前方を指差して、嬉しそうな声を上げた。

「あ、ほら！ もう谷だよ！ 余裕のあるときにもう一度じっくり見てみたかったんだ！ 来るときは食糧も尽きかけて景色を楽しむどころじゃなかったもんね」

ジェドルの異変に気付かなかったように笑い、駆け出す。

「あんま走んなよ……傷が開くぞ」

背中を追い掛けてくるいつものジェドルの声に、胸を撫で下ろす。
何か、大切なものを手放さずに済んだ。
そんな安堵感だった。

風が唸りを上げて吸い込まていく、光の届かない谷底を見下ろして、ここは、こんなに不気味な景色だっただろうか、ルヤは寂しさの混ざり合った恐怖を覚えた。皆でいたときは、周囲にあるものが全て違った色をしてそこに存在しているように思えた。自然というものがこんなにも圧倒的で、恐ろしいものだ、以前の色合いでは気付かなかった。そんなことにも気付かずに、考えもせずに、来る日も来る日も仲間の後にくっついて、その中に飛び込んでいた自分が如何に無謀なことをしていたのかと思ひ知らされる。この世界の中で、自分はなんてちっぽけな存在だろう、なんて、そんな当たり前のことを考えることさえ仲間達に押しつけて、温かな色に染まった世界を用意してくれる彼らに憧れて、子供のようにつかみんなのようになりたいと夢見ていた。強くなりたいただけ願っていた。どこまでも、ただ、守られているだけだった。この時、この場所に立ってルヤは初めて、まるで濁流が決壊したように、急激に、痛烈に、それを実感した。

「ねえ……もし、このままジェドルの記憶が戻らなくても、怪我が治ったら一度行ってみようか……その、ビスラとサーナを、最後に見たっていう場所に」

「……あそこに、か」

短く答えて冴えない表情をするジェドルを、そつと振り返る。

「うん、何か分かるかもしれないし……ビスラもサーナも、ここに来られない事情があるのかもしれない……擦れ違いになったら嫌だなんて思ってたけど……このまま待ってるだけじゃ、何も変わらない気がするの」

今、無性に、ビスラとサーナに会いたかった。会って、抱き締め、今まで自分を大切に守ってくれていたこと、自分の代わりに、

強大なものと戦ってくれていたことに、心から感謝しているこの気持ち传达了かった。

「まあ、どっちにしろ、いつまでもあの宿の穀潰しでいるわけにもいかなえしな……」

口の端を上げて笑うジェドルに、ルヤは決意を込めて、しっかりと頷いた。

「……あ、そういえば……ねえほら見て、あの橋の穴、ここ渡るときジェドルあそこに足突っ込んだじゃって大騒ぎだったよね」

縄と木片で造られた粗末な吊り橋の中央あたり、腐り落ちた箇所を見て数日前の出来事を思い起こしたルヤは、可笑しそうに穴を指差しながら、からかうような視線をジェドルに投げ掛けた。

「あ？　んなことあったか？」

「何よ、とぼけちゃって！　高い所が苦手でなかなか渡れないでいたビスラを馬鹿にして、わざと揺らしながら歩いてたら見事にはまったんじゃない！　結局、あんなに怖がってたビスラに引っ張り上げてもらっちゃってさ、ほんとに情けなかったよね、あの時のジェドル」

身動きが取れずに顔面蒼白になっていた当時の彼の様子を思い出して、込み上げてくる笑いを何とか噛み潰しながら、ここまで言われればジェドルのことだ、ムキになって言い返してくるに違いないとルヤは思わず身構えた。

――だが

「あ、ああ、そうか……そんなこともあったっけな……」

返された反応は、予想とは全く異なるものだった。

まるで、本当は覚えていないのに取り繕っているような、曖昧な笑顔。

「ジェドル？」

呼び掛けても、ジェドルはぼんやりと谷底を見下ろしたまま返事をしない。

その、自分に向けられた疑問を拒んでいるようにも見える横顔に、

ルヤは続く言葉を失った。

一瞬だけ訪れた楽しいな空気は再び不穏な沈黙に吞み込まれ、それ切り、ただ、崖下に棲む深い闇に視線を落として動かなくなった二人に、風と、地を這う砂埃だけが時の経過を感じさせた。

「リリファ……」

「え……？」

もう、隣にいなかったのではないかと思えるほど静かだったジエドルが、突然思い出したように呟いた呪文のような一言に訝しんでルヤが目を上げると、景色の中に溶けてしまいそうな、虚ろな立ち姿をした彼が、視界に入った。

「ここ何日か、よく夢に見るんだ……リリファっていう子供、お前どこかで、会ったの覚えてないか？」

「リリファ？ ……どんな子？」

「十二、三歳の、長い髪で、威勢のいい感じの……どっかで、見たことある気がするんだ……よく思い出せねえが、確か、重要な思い出だった気がする……」

「私も覚えてないけど……妹さんはそんな名前じゃなかったっけ？」

「いもうと……？」

「……あ、ごめんね……妹さんのこと、あんまり思い出したくなかった？」

「そうか、妹が……あいつが、リリファだったか……？ いや、違う……あいつの名前、名前は……」

遠い目をして、妹の名前を思い出そうとするかのようにぶつぶつと独り言を呟き始めたジエドルを見て、ルヤは口元に当てた自分の手が震えていることに気付いた。

ジエドルが戦争で失った両親と妹との思い出を何よりも大切にしていることは、ルヤだけでなく、仲間の誰もが良く知っていることだった。形見のお守りを肌身離さず身に付けているという話も、彼自身の口からつい最近聞いたばかりだ。

その妹の名を、思い出せないと言うジエドル。

「ジェドル、ねえ、大丈夫？ ジェドル」

足場が砕かれていくような恐怖が、喉から声を溢れさせる。

思わずその広い両肩を掴んだ手の指先が、ひどく冷たかった。

帰ってきたときから、どこか、いつもと違っていた。初めはショックで記憶が混乱しているだけだと思っていた。

——だけど、これは

強い風が、ジェドルと混ざり合って、攫っていつてしまうような錯覚。ジェドルが、ジェドルでなくなっていく。少しずつ、確実に、ルヤの前から、薄らいでいく。

「ジェドル……ねえ、出会ったとき、あなたが私に言ってくれた言葉、覚えてる？」

ジェドルは漸く独り言をやめて、ルヤを見た。その瞳に、あの頃、自分を救ってくれた光が宿っていないのを見ない振りをして、引きつった声で、必死に続ける。

「あなたが言ってくれたあの言葉で、私、あなた達についてこうって決めたんだよ……あの場所で、死んだのと同じように生きていくんじゃないくて、あなた達と一緒に、最初から生きようって……新しく生まれようって……あなたの言葉……今でも、私の中に、大切にしまっている……」

ジェドルは、困ったような表情を浮かべていた。

少し、首を傾げて、忘れたものを思い出そうと、している。

有り余るほどの存在感を放っていた、あの、不敵なジェドルとは掛け離れた、儚い空気のようなその体を、揺さぶり、叫んでいた。

「ジェドル！ あなたまで、いなくなってしまわないで！」

虚ろな瞳のままこちらを見返すジェドルの背中を強く抱き締める。消えてしまわないように、風の中に流されていつてしまわないように。

「私を、独りにしないで……お願い……！」

頬を熱い滴が流れていた。

一本の細い糸が、切れそうになっているのに、それをどうするこ

ともできない。

嗚咽を嚙み殺し、しがみついたまま離れようとしないうるやの頭に、大きな手が乗せられる。

見上げると、ジェドルが、少し辛そうに笑って、ルヤを見詰めていた。

「独りにしねえよ」

その、元のジェドルの匂いに安心して落ちる涙を親指で乱暴に拭かれる。

「お前を、独りにしねえたために、俺は戻ってきたんだから……」

今度は、さっきの虚ろなものとは違う、何かと戦っているような、強い意志を宿した瞳を遠くに向けるジェドルを見上げ、ルヤは尋ねたかった。一体あなたは何かと戦っているのかと。独りにしないと約束してくれるのに、どうしてそんなに、今にも、いなくなってしまうようなのかと。

その答えを聞いたら、全部終わってしまいそうな気がして、尋ねることができなかった。

九

九

幼い少女が、声をあげて笑いながら走っていた。

必死に後を追うのに、追いつけない。

栗色の長い髪をした、そばかすの少女。

――何してるの、早く早く！

そうだ、彼女は、リリファ。

――待ってよ、リリファ！

頼りになって、何でも話せて。

ワガママなところもあるけど、その真っ直ぐな明るさに、いつも助けられて。

大切な子だったはずなのに、どうして忘れてしまったんだろう。

俺は。

やっと手を捕まえると、少女は、満面の笑みで振り返り――

――そんなことをしても、ダメなのに

声を弾ませて、腕の中をすり抜けて、また、遠くまで離れていく。

――わたしは、そこにはいないよ？

あんまり楽しそうに言うものだから、え？ と聞き返しながら、

自然と顔が綻ぶ。

そんな、俺の微かな笑みを認めた途端、リリファは表情を失うと、不意にけたたましく笑い出し、その歪んだ瞳はたちまち憎悪の眼差しに変わる。

――リリファ……？

呆然と呼び掛けて、手を伸ばす。

肩に触れる寸前で、彼女は、足下に崩れ落ちた。

膝について、抱き起こすと。

失望と、悔恨と、侮蔑に満ちたリリファの顔は、目を見開いたま

ま、動かなかった。

あげようとした叫びが喉に詰まって、激しくむせ返る。
冷たい汗が、額から、目の中に落ちていくのを感じた。
胸の奥にナイフを突き立てられたような、耐え難い痛み。

「また……何なんだよ、この夢は……」

向かいの壁で弱々しく揺れているランプの火を睨みながら、苛立ったように吐き捨てる。

こここのところ毎晩、同じ夢を見る。どうしても思い出せない、だが、確かに知っているはずの、リリファという少女の夢。夢の最後はいつも、彼女の事切れた顔で終わる。

それは、気が狂いそうなほどの悪夢であるのと同時に、どこかでリリファという少女を懐かしみ、執着する感情も伴うという、捉えようのないものだった。

「くそっ……！」

昨日のルヤの涙が頭を過ぎる。最近の自分は明らかにおかしい。この村に帰ってきたときから続いている、頭の中に自分の入り込めない領域が存在しているような感覚。そして更に不可解なことに、その領域は日を追う毎に広がり、自分の意識を置いておける場所を徐々に狭めている。特にここ数日はその兆候が著しく、記憶が酷く曖昧になり、最近あったことまでルヤに言われても思い出せない始末だ。それなのに、そんな自分を見る彼女の不安そうな顔や、涙とிட்ட覚えていたくないものばかりが頭の中に焼き付いて、おかしくなりそうだった。

ルヤを独りにしたくない、寂しい思いをさせたくない。

大人振っても、いつまでも甘えの抜けない、妹のような、旅仲間。その思いだけは、しっかりとこの胸に居座って、見えない領域も近付いてこようと思わない。

いつか他の全てが呑み込まれたとしても、それだけが残るだろうという奇妙な確信があった。

ふと気付く、自分は以前からこんなにルヤに過保護だったのだろうか。もっと、独り立ちできるようにと、突き離していたのではなかったか。いつから、どうして、自分はこんな風に、過敏なまでに彼女を気に掛け、甘やかすようになったのか。

そんな、どろどろと滞った思考を遮ったのは、暗い室内に響いた鋭いノックの音だった。

こんな真夜中に、一体誰が。不審に思いながら、鈍った神経を叩き起こすように頭を振って立ち上がり、足下の細い隙間から光が漏れるドアに向かう。扉を開くと、微かに見覚えのある、痩せた目つきが悪い男が通路の明かりを背にして立っていた。

「よう、こんなところまでよく舞い戻って来られたもんだな、ジェドルさんよ」

「……なんだ、お前は……」

「それはこっちの台詞だ……お前、一体何を考えてる？ 近くに奴がいることと何か関係があるのか？」

この男は何を言っているのか。

何故、自分の名前を知っているのか。

まるでよく知った仲のような口振りに、気が触れているのかとも疑ったが、そういった雰囲気でもなさそうだった。そんな自分の様子に気付いたのか、向こうも不審げな目を向けてくる。

「取り敢えず邪魔するぜ……」

無遠慮にずかずかと部屋の奥へ進んでいく後ろ姿を凝視しながら、その人物が、昨日、ルヤと村を散歩しているとき、不躰に声を掛けてきたマント姿の男だったことを漸く思い出す。

男はベッド脇に置かれた背もたれの無い木の椅子にふんぞり返って足を組み、面倒臭そうに息をついた。

「さ、ここなら誰にも聞かれる心配はないぜ？ きっちり説明してもらおうか……急に姿消したと思ったら、こんなところで油売ってる理由を……俺が一体どれだけ探し回ったと思ってる？」

「何の話だ？ 大体、お前は何者だ」

「はあ？ ユジフだよユジフ！ お前こそそんな格好して、これは一体何の茶番だ？」

昨日初めて、しかも擦れ違い様に短く声を掛けられただけの面識しかないはずの男は、まるで数年来の知人のような態度でそう名乗った。

その、さも当然のことを言っているかのような口振りは余りにも自然で、嘘や演技には思えない。忘れているだけで、昔どこかで会ったことがあるのかもしれないと、これまでの旅の記憶から男の姿を思い起こそうとして、愕然とする。これまで自分が長い間旅をしてきたという認識は確かにある、だが、それは漠然としたものでしかなく、今までどんな地域を巡り、どんな景色を見てきたか、多くの地で出会ったはずの人々の顔も、名前も、何一つとして、明確に思い出すことが出来なかった。

自分は一体どうしてしまったのか。このまま、自己としての証を何もかもを失って、いつか、自分が、自分でなくなっていくような、掴みようなない恐怖が湧き上がる。

と、ユジフと名乗った目の前の男から、不意に何かを投げつけられる。

「お前のだ、地面に放り投げてあった……」

飛んできた物体に思わず身構えたが、丁度手の中に落ちてきたそれは、人間の腕ほどの長さの、細くて質素な用途のわからない木片のようなものだった。

「まだ見習いに毛が生えた程度とはいえ、厳しい修練を乗り越えてやっと手に入れたものだろうが……粗末に扱うな」

その言葉に、もう一度目を凝らして木片をよく眺めると、先端にシトア教の紋章と、小さな鐘のような装飾が施されている。それは、鳴鍵めいけんだった。シトア教僧であることの証となる――

「お前、まさか、俺達を助けたっていう現操術師か？」

「何……？」

「だったら教えてくれ……あの後、どうなったか――ビスラとサー

ナは……生きてるのか？ 俺らを襲ったのは何だったんだ？ 頼む……何も思い出せねえんだ」

それまで、どこか不真面目だった男の表情が、徐々に険しいものに変わっていく。

「……何か考えがあってやってるんだと思ってたが、お前、まさか……本気である男になりきってるのか……？」

「あの、男？」

「今お前が演じてる、そのジェドルって男にだよ！ いいか？ 良く聞け、お前の名前はローク……ローク・ノイス……俺と共に聖地の石を取りにいく旅の途中だった、シトア教僧伝戒士でんかいしだよ……」

予想を遥かに上回る男の発言の突飛さに、思わず笑いが込み上げてくる。

「は……？ な……に言ってる？ そんな名前の奴は知らない……俺はジェドルだ、人違いだろ」

「ここまで言ってるまだわからねえのか、目を覚ませ！ このままじゃお前、本当にジェドルって奴に乗っ取られて、戻れなくなるぞ！」

自分がジェドルでないなら、誰がジェドルだというのだ、他のどこにジェドルがいるというのだ。男の頭ごなしな言いぐさに苛立ちを覚え、怒鳴り返す。

「わけのわかんねえこと言ってるじゃねえよ！ そんな奴は知らねえって言ってるだろうが！ 乗っ取るも乗っ取らねえも、俺はジェドルなんだよ！」

「ローク！ お前、リリファの二の舞になるつもりか！」

鼓動が一つ、跳ね上がった。

「リリ、ファ……？」

聞き覚えのある名前。

夢に見る、確かに知っている、なのに、思い出せない少女。

「お前の、死んだ幼馴染みの名前だ」

「あ……」

小さく、頭の中が弾けた。

たったひとつできたその綻びが、次々に伝わり広がって、分厚い幕の後ろに隠されていたものを、ゆっくりと露わにしていく。

「……チツ……奴が動き出したようだ、俺の存在に気付いたか……」

「……俺は……」

「あいつ、何故こんなところにいる？ お前はあいつを追ってきたんじゃないのか？ ……まあいい、詳しい話は後だ、俺はあいつの身辺をマークする。あの時とはだいぶ様子が違うようだが、恐らく間違いない……あの三人を襲ったのと同じ奴だ」

男、ユジフが何を言っているのか、もはや頭に入れることすら叶わなかった。

「いいか、明日までに頭冷やして、院への言い訳考えとけ」

遠くで、扉を閉めて誰かが出て行く足音。

薄闇に包まれた両の手の平を凝視する。

剣を握り慣れたマメだらけの手が、教典をめくる細く白い指に変わっていく。

「――俺は」

この村に帰ってきたときから、おかしかった。

襲われた当時のことを思い出せず。

これまでの旅の記憶も不明瞭で。

リリファの、夢を見る。

「リリファ……」

自分は、ジェドルだったのに。

ルヤと、ビスラと、サーナと、ずっと旅をしたジェドルだったはずなのに。

ルヤを、独りにしたくないと、躍起になって望んだジェドル。置いていかれた自分のようなルヤ。

同じ目に遭わせたくなかった。

リリファが戻ればいいと、自分が願ったように。

ジェドルが、戻ればいいと。

彼女の涙が、瞼の裏に浮かんだ。

自分が流したものと同じ種類の、涙。

「ごめん、ルヤさん……」

気付かなければよかった。

「――僕は、ロックだった……」

話さなければならぬ。

やっと思い出した、どうしても入り込めなかった領域の中にあつたものを。

十

十

よく晴れた、頬に心地良い風が吹き渡る朝だった。

目を覚ましたルヤは怪我をしていた方の腕を数度回してみてもうほとんど痛みがないのを確認してから、厨房に降りた。休んでいろと氣遣ってくれる女将を押し切って、朝食の配膳を手伝う。スナヒヨウを退治したことで村長から後払い分の報酬を受け取り、多少余裕が出来たというのに、結局、怪我が治るまで宿泊費はいらないという主人達の言葉に甘えて図々しく三部屋を無料で借りてしまっている身としては、いつまでも部屋で寝てばかりもいられなかった。それに、動いていた方が気が紛れて、昨日のように変に沈み込み込んだりせずに済む。特にこんな天気の良い、晴れ晴れとした気持ちで目覚められた朝は、部屋に閉じこもっているよりも、誰かの為に、何かの為に働いていたかった。ジェドルの部屋に朝食を運ぶ仕事も引き受けたルヤは、早速取り掛かるうとして、ふと、その前に、引張って来なければ食堂に顔を出そうともしないラタンを呼びに行こうと思ひ立つ。見た目通り他人との接触が苦手なようで、ルヤ以外とはほとんど口も利かないラタンだが、少しずつでも慣れていかなければ、これから世の中を渡っていくのに苦労するに違いない。そんな風に、すっかり彼の行く末を危ぶむ姉か母親役になっている自分に苦笑しながら、ラタンの部屋をノックした。返事がなかったの
で寝ているのかと思い、そっと中を覗いてみると、ベッドから出て行ったような形跡はあるものの、本人は見当たらない。あれから外で寝るなどということもすっかりなくなったはずなのだが、今日は一体どこへ行ったのだろう。まあ、ときには一人でぶらつきたくないこともあるだろうと、それ以上無理に探し出そうとはせず、ルヤは厨房に戻って女将に断ると、ジェドルの分の朝食を皿に盛りつけ

始めた。今日の献立はこの地方で主食となっている芋を練り込んだパンと、村の水源であるコロイの泉で捕れた淡水魚のスープだった。この宿で出される料理は、この地域の一般的な家庭料理と比べるとかなり豪勢と言える。泉に生息する淡水魚の数はそれほど多くなく、産地といえど村人もなかなか手を出せない高価な食材だ。それを朝食で出すのだから、さすがは都で名の知れた豪商の夫妻が道楽で構えた宿というものだ。そして、そこに居候させてもらっている自分達というのは、なんと贅沢者なのだろうと、ルヤは改めて実感の溜息を吐いて、盛りつけ終えた料理をトレイに乗せると、厨房を出た。他の客室からは少し離れた、一階の奥にある部屋へと向かいながら、どんな顔をしてジェドルに会ったものかと思案する。昨日、出掛け先で彼に対して取ってしまった高ぶった態度が、一夜明けてみるととんでもなく恥ずかしいことだったように感じられて、目覚めてから暫くは自己嫌悪の余りじっとしていられず、部屋の中を意味もなく往復したものだ。昨日は何故かジェドルが、まるですぐにでも目の前からいなくなってしまうような錯覚に囚われていた。今考えると、どうしてあんなに恐怖したのか、不安だったのかと不思議に思う。ジェドルは確かに数日前にはここに帰ってきていて、自分を見てくれ、声を掛けてくれていたというのに。あの散歩の帰りだつて、いつも通りのジェドルだった。現に今も自分は彼に食事を運んでいるのだ。様子がいつもと違うのは、ただ、記憶にはつきりしない部分があるから不安定になっているだけで、時間を掛ければ元に戻るものだと、村医もそう言っていた。焦ることも、怖れることも何もないのだ。昨日の自分はどうかしていた。ジェドルとはこの先もずっと一緒に旅して、いつか、昨日の不安を笑い飛ばせるような日々がやってくる。

そう、いつかジェドルに、小さい子供のように独りにしないでと泣き叫んだことを、からかわれるに違いない。

そんなことを考えているうちに、辿り着いてしまったジェドルの部屋の前で立ち止まる。

ひねくれたジェドルのことだ、会えば早速からかいに掛かってくる可能性もある。となると、変に相手の顔色など窺わずに、敵の鼻を挫くようなつもりで、何事もなかったような笑顔で突入するのが得策だろうと、ルヤはひとり頷いた。

小さく息を吸って、ノックをした直後にノブを回す。

「おはようジェドル！ 起きてる？ 朝ご飯持ってきたあげたよー！」

今日はジェドルの好きな魚のスープだよ……そう続けようとした声が、目の前の光景に掻き消される。想像もしていなかった違和感を伴う光景に。

「あ……」

狼狽えた様子で振り返ったのは、寝台の上に腰掛けた、見知らぬ、人の好きそうなローブ姿の青年。

「つと、噂をすれば、か……」

もう一人、青年と向かい合って何かを話していた、顔色の悪い、どこか他人を小馬鹿にしたような態度の男も目を上げ、口元だけで皮肉っぽく笑う。

小さな窓際に飾られているのは、昨日散歩の帰りに摘んだ、雨の後にだけ咲く珍しい砂漠の花。花なんて飾らなくていいと嫌がるジェドルに構わず、昨日ルヤが小さな器に挿して置いたそれは、ここが確かにジェドルの部屋であることを示していた。

「あ……あれ……？」

そんなはずはないと思いつつ、反射的に通路に出て部屋を間違えていないか確認しに行こうとするルヤを、黒髪の青年が、躊躇いがちに小さく呼び止める。

「間違っていないですよ……ここは、ジェドル、さんの部屋です」

全く見覚えのない、少し年下だろうか、まだ僅かに幼さの残る顔立ちをした青年は、痛みを堪えるように声を低め、青の混じった黒い瞳で、呆然とするルヤを見詰めていた。

「……お話を、聞いていただけますか」

「ジェドルはどこですか」

何か、事情がありそうだと、頭では理解できた。

それでも、日々、どうにか自分のものにしようとしている冷静さは胸に留まってはくれず、落ち着こうと努めて卓の上に置いたはずの料理が乱暴な音を立てて震える。

「ジェドル、どこに行っただんですか？」

それだけは、何よりも先に確認しておきたかった。

俯いて答えようとしないう青年に、ここにいないだけで、ジェドルがどこかにいることを。

消えていないことを。

「死んだよ、ジェドルって男は」

口を噤んで項垂れる青年の隣で、偉そうに足を組んでいたもう一人の男が代わりに応じた。

まるで朝食のメニューでも伝えるような、軽い口調で。

「ユジフ先輩！」

青年からの責めるような視線を意に介した風もなく、ユジフと呼ばれた横柄な男は、さっさと話を終わらせたいといった態度で事務的に続けた。

「あんたのお仲間三人、みんな同じ日に死んだよ、残念ながらね」

「な……に……？」

勝手に口から漏れた声は、掠れて、音程も定まらない。

「もう十日も前だな、俺とこいつで墓掘ったんだ、確かだよ」

「うそ……嘘、言わないで」

「こんなこと嘘付いて、俺達に何の得があるんだ？」

「だって……ジェドルは……ジェドルは、帰ってきたものの、昨日まで、この部屋にいたんだもの！ 死んでるわけないでしょう？ 帰って来たんだから！」

堰を切ったように捲し立てるルヤを、もう一人、黙っていた青年が右手を挙げて制する。

「あなたの傍にずっといたのは、僕だったんです……」

目を伏せ、最後は、消え入るような声になっていく。

「何？ 何言ってるの？ ジェドルだよ、ジェドルがいたの、あなたじゃない！ あなたなんか知らない！ 大体あなた達何なの？

勝手に他人の部屋に入り込んで、みんな死んだなんて馬鹿げたこと頭ごなしに……失礼だよ……！ 出てって、出てってよ！」

顔を上げようとしないう青年と、呆れたように冷めた視線を投げ掛けてくるユジフという男が出て行く気配のないことに苛立ちを抑えられず、彼らの返答を待たずにジェドルを探しに部屋を出て行く。そして、再び、呼び止められる。刺すような眼差しで振り返ると、その先に、対象としていた青年の姿はなかった。

代わりに視界に入ったのは――

「ジェドル……？」

求めていた旅仲間、ジェドルの、でもどこか彼らしくない、辛そうな表情だった。

「ジェドル？ どうして？ 今までどこに行ってたの？ ……ねえ、聞いて、この人達あなたが死んだって……」

細い糸を手繰るように、必死に腕を掴む。やはり消えていなかった、死んでいるはずなどなかった。そう、心から安堵できたのは、残酷な程に一瞬だった。

見上げた先のジェドルの顔が、髪が、体が、徐々に薄らいでいく。今度は目の錯覚ではないのが分かる。握っていた手が、ごつごつとした感触を失い、しなやかで、柔らかな、昔、旅に出る以前、自分の前に差し出されたいくつもの手と同じ、不自由ない暮らしをする人間の手に変わっていく。

「ここに帰ってきたジェドルは、僕、ローク・ノイスだったんです……ルヤさん」

ジェドルは、完全に青年になった。

「い……や……」

頭の中が泡立って、喉の奥が針を刺したように痛む。

どうして、目の前にいるのがジェドルではなく、この青年なのか、

いくら考えようとしても思考が逆流する。

耳に響く、青年の重苦しい声だけが、ルヤの視界を現実に残めていた。

「あのとき、ジェドルさんの願い……僕は、どうしても叶えなかった……叶えるつもりだった……」

「ジェドルの……願い」

「ええ、彼は命の限り願っていました、あなたを独りにしたくないと……」

還ってきてから、ジェドルが何度も口にしてた言葉の連なり。

力強く、そして、儚いものに感じられた、あの約束。

「……だけど、僕の力じゃ足りなくて……叶えられなくて……いつの間にか、僕は自分の能力を使い、ジェドルさんの姿となってあなたに会いに行っていました……全て、僕の私情が起こしたことです」
途切れがちに、それでも真っ直ぐにルヤから目を逸らすことなく、
青年、ロークは語った。

「昨日あんたと一緒にいるこいつを見掛けたときは俺もたまげたよ。
現操術を応用すりゃ出来ないことはないとはいえ、あんな変身技、
消耗が激しすぎて普通は誰もやらねえ」

ユジフと呼ばれた男が、一人、場の空気にそぐわない平然とした
態度で興味深そうに述べる。

浮かんでは消えていく、いくつもの問いの中から、ルヤは自分の
望む可能性に繋がるひとつを拾って、目の前の見知らぬ二人にぶつ
けた。

「姿だけじゃない、中身も、ジェドルだった……私がジェドルを間
違うはずない……よく知らないあなたなんかが、演じられるわけな
い……」

昨日までいたのは、どう考えてもジェドルだった。確かに様子がおかしいとは感じていたが、別人と疑おうなどとは思ってもみなかったのだ。それを、どうして、面識もほとんどないこの僧侶が再現できたというのか。納得できない。ほんの少しでも、この状況を否

定できる材料がある限り、ルヤはそれにかじり付こうとする自分を止めようとはしなかった。その意志が通じたのか、ユジフは肩を竦め、隣で唇を噛んだまま動かないロークを見やりながら説明を続けた。

「それができるんだよ、演じるんじゃない、同調するって形ならな。あんた、核かくの概念は知ってるな？ この世界で生きるもの全てが持つとされる、個であるための芯こゝろみたいなもんだ。今回は、こいつがたまたま覚醒者で、ジェドルかくこんって奴の核痕と異常に深く同調しちゃったことから起きた現象だ。ま、自分以外の核や、得体の知れない核痕と同調し過ぎると自己が崩壊する危険性があるからまともな奴ならやらないが」

「核、痕……」

「聞いたことくらいあるだろ、死んだものが生前持っていた核、その痕跡、いわゆる、残留思念ってやつだ、それらを認識し、接触を可能とする能力を持っているのがこいつのような覚醒者ってわけ」瞬きをする。

ゆっくりと、時を稼ぐように。

ジェドルの核痕。

それは、どういう意味だろう。

すぐに導かれるはずのその答えを、頭の中で唱えなくなかった。

一緒に、ビスラとサーナを探しに行こうと約束した。

村を出て行く前と同じように、憎まれ口ばかり叩いていた。

表面は子供のようなのに、考え方は大人で、いざというときは体を張って自分を守ってくれる、変わらないジェドルだった。

消えるわけないと。

ビスラもサーナも、生きている。

またみんな、旅を続けられる。

あのときのルヤは、心配してバカみただったって、笑い合える。そう、信じていればよかった。

自分を独りにしない、優しい、彼らだったから。

いつも、必ず帰ってきてくれたから。

だからきつと、今回だって――

「――もう、帰ってこないの？ みんな……」

いなくなるわけない。

信じていた。

信じていなければ、立っていられなかった。

「やだ……」

世界の色彩が、手の中からこぼれ落ちていく。

彼らのいなくなった世界が、足下から広がっていく。

どこまで目を凝らしてみても。

明るい朝も、輝く空も。

暗い闇も、静寂さえ。

何もない、世界。

背後で、誰かが自分を呼ぶ声がした。

ああ、今、自分は走っているのだと気付く。

どこへ行くのだろう。

こんなに、急いで。

悲しみも、苦しみも、壊れて、遠い地面に取り残されたまま、追いついてこないのに。

意識と繋がっていない、前に出る足の赴くままに、行かせてあげようと思った。

どこへ行っても、彼らに会えないのなら。

大きすぎて捉えきれないこの痛みからも、逃れることはできないのだから。

十一

十一

頬に吹き上げる風に、ふと我に返ると、谷を見下ろしていた。

底を隔てる闇が、まだ世界に色があったことを思い出させてくれる。

中間地点に穴が空いた、強風に揺れる頼り無い吊り橋。

鮮明に蘇るのは、あの旅の光景。

へっぴり腰で恐る恐る橋を渡る、真っ青な顔をしたビスラと、情けないと文句を言いながらも彼を支えるサーナ。大人げのかけらもなく、わざと揺らすように駆け渡り、指さして笑いながらビスラを振り返っているうちに、あの腐り落ちた足場の穴に思い切り足を突っ込んだジェドル。あんなに切羽詰まった、余裕の無いジェドルの顔を見たのは初めてだったかもしれない。思い返して、零れた笑いが、風に攫われていく。

あれが、最初で最後だったというのだろうか。

彼らの新しい表情を見ることが、もう――

日差しが、日除けを被っていない髪に直接当たり、こめかみが焼けるように熱かった。

眩しさに、目が涙の膜を張る。

明日になっても、明後日になっても、何年、何十年待っても、もう、彼らと過ごす日がやってくることはないのだろうか。ただ、こんな突き放すような眩しい朝と、誰もいない静かな夜更けが、数え切れないほど繰り返されるだけなのだろうか。

それは、途方もない痛み。

膜が目の中に収まりきらず、頬を伝って、地面に落ちる。その一粒を、容赦のない太陽が、瞬く間に空に溶かしていった。力が抜けて、膝をつき、手元の砂を掴む。強く、強く。さらさらと手応えの

ない感触を残して、指の隙間から広大な世界の一部に還っていく、何万の粒たち。それを見ていると、涙が、後から後から溢れてきた。自分は何を感じ、何をすればいいだろう。皆がいなくなった世界に、意味が見付けられない。嗚咽が喉を塞ぎ、内側に降る雨の断片が、乾いた砂の上に落ちては消える。この痛みの向こうに、一体何があるというのだろう。何もないところから、彼らに掬いあげられて、また、何もないところに放り出されて。改めて考えると、自分の生の中には、彼らという存在以外何もなかったことに気付く。奇跡的に自分の前に現れ、世界の意味をくれた彼ら。

奇跡は、もう起こらない。

唸る風が、そう耳打ちして去っていく。

涙で汚れた顔を上げ、地面の終わる場所を見る。

最初から、あの先が、自分のいるべきところだったのかもしれない。

ただ、夢を見てただけで。

自分は生きられると、安息と、幸福を、手に入れられると。

こんな風に、何もない自分だけが取り残される未来が、用意されているとも知らずに。

崩れ落ちそうな崖の縁で立ち止まり、咆吼をあげる暗闇を見詰めた。

何故、自分も彼らと一緒に終われなかったのだろう。

それならば、きつと悔いなんてなかった。

皆と共に死ねるなら、それだけでも幸せだったと言えたのに。

どうして、独りで。

彼らと共に生に幕を引くという些細な我が儘も、許されなかったのだろう。

自嘲気味に笑って、空に踏み出そうとした、時――

ぐいと、手を引かれ、後ろに引き戻される。

尻餅を付きそうになりながら、何とか踏み止まり、もう、別れを告げたつもりだった世界を振り返る。そこに、色のない景色に、ル

ヤの手を握って立っていたのは、黒髪に、白い肌、漆黒のローブを纏った少年だった。

「ラタン」

熱い風が吹き抜けて、向かい合った二人の髪が舞い上がる。

「ラタン……どうして、こんなところに……」

彼を前にして、今更、居た堪れない思いに駆られる。

闇の中、手探りで、失くした自分を探しているラタン。

それでも、自分を不器用に励ましてくれたラタン。

彼の目に、今の自分は、どう映っているのだろう。

口ばかり偉そうな、情けない姉だろうか。

弱く、滑稽な、蔑むべき大人だろうか。

自分に向けられているであろう、あの真っ直ぐな瞳に、視線を向けることさえ出来ない。

と、不意に、抑えきれずに漏れ出したような、喉を鳴らす笑いが、風に紛れて耳に届く。

顔を上げながら、空耳だろうと、思った――

「困るなあ」

嘲笑を含む、声。

まるで別人のような薄笑いを浮かべ、顔を歪ませている、彼。

その様を暫く眺めてから、さっきの笑い声が空耳ではなかったのだと認識する。

そこに、無表情で、無垢な目をした、ルヤのよく知るラタンはいなかった。

「あんたにこんな簡単に死なれたら、計画が台無しだよ」

得体の知れない、不穏な圧迫感を放つ少年。

周囲の空気が、様変わりしていく。

「ラタン……？」

「何の為に我慢してあの術師を生かしてやったのかわかんなくなる……あんたには、もう少し役に立ってもらわなくちゃ……」

瞬きするのも忘れて、次々と入れ代わる表情を目で追う。

「死ぬのは、それからでも遅くないだろう？」

これは、一体誰なのだろう。

繋いだ手を引き寄せ、顔を覗き込んでくる傲慢に満ちたその目付きからは、数日前、壊れてしまうと自分を心配してくれたラタンを連想することが出来ない。

「どういう、こと……」

頭を掠めたのは、彼が、記憶を取り戻したのではないかという想像だった。

そうでなければ、同じ顔をした別人だとしか考えられない。それくらい、これまでルヤと接してきたラタンとは、言葉使いも、佇まいも、姿以外の全てが、違い過ぎていた。

「ラタンあなた、記憶が……」

ルヤの手を離して、ラタンは再び、腹の底から可笑しそうにクツクと笑い出す。

「ラタンか、良い名前を付けてもらったね！ 捨てたもんじゃないな、あの抜け殻も」

「ラタン、あなたどうしちゃったの？」

一体何を取り戻したら、こんなにも子供らしからぬ毒々しさを醸し出せるというのか。

「どうもしてないよ、これが本来のオレ、全部思い出したオレなんだよ。がっかりした？ あんた好みの聞き分けの良い子供じゃなくて」

何がそんなに可笑しいのか、狂ったように声を張り上げて笑う、ラタン。

「ああ、そういえば知りたがってたね、あんたの仲間がどうなったのか」

「え……？」

意外な発言に目を見開く。当時三人の側にいた術師というのは、さっきのロークとユジフという二人だけではなかったのか。

「素晴らしく有意義だったよ、あいつらの死は」

的外れの考えが、遮断される。

「脆すぎてつまんなかったけど……あいつら、他の役立たずとは違ったよ……あんたみたいな絶好の研究対象、残してくれてたんだからね」

周囲から、音と光が消えていく。

視線が、色褪せた少年の姿だけを捕らえたまま、離さなかった。

「あな……だが」

頭の芯を反響した自分の声が、そのまま甲高い耳鳴りとなって残る。

「へえ、やっぱりだ」

興味深そうに口元に手をやり、身を乗り出してラタンは淀んだ瞳を光らせる。

「あなたがやったの……みんなを殺したの……ラタン」

視界が揺れ、震える。

続いていくはずだった、皆のいた世界を。

自分の、行く末を。

こんなに、歪ませたのは――

「ラタン」

「そう……そのまま、そこに踏み止まってよ……狂いそうで、狂わない、ギリギリのところで耐えてる今のあんたが発してるその振れ、それが、オレの望む触媒だ」

「答えて、ラタン！」

「あんたの仲間の女、あれはダメだった、すぐおかしくなっちゃってさ、ああなると、もう使い物にならない」

「……！」

「あの女の恋人か何か？ 庇ってんだか何だか、正面飛び出してきて真っ先に死んだ男。発狂するとき、不思議なことに、それまで発してたはずの周囲に影響与える波がプツリ出なくなるんだよ……全部放棄して、楽になった状態だからかな？」

狂えるのって幸せなのかもね、と、同意を求めるように、鼻を鳴

らす彼を、人ではないものを見る目で凝視する。

話の中で無機質に描写された男と女が、ビスラとサーナのことであろうことは容易に推察できた。

強い信頼の絆で結ばれていたビスラとサーナ。二人ともそういった感情を表面に出すことはなかったが、互いに好意を抱いていたであらうことを、ルヤは薄々感じ取っていた。理不尽なビスラの死は、サーナの目にどう映ったのだろう。どれほどの、衝撃と、痛みだったのだろう。容赦なく奪われた、仄かで、ささやかな光を放つ未来。目の前の少年を見据える。

入り混じりすぎて、相殺された、感情。

何を思っ、奪ったのだろう。

「どうして……」

ジェドルを。

ビスラを。

サーナを。

「どうして殺したの……」

決して欠けてはならなかった、互いに息づく世界の一部分を。

「新しい技法を完成させる為には、例え無駄に思えたって何度も何度も実験を繰り返す必要があるだろ？ 退屈だったけど、その甲斐あって、今、あんたに辿り着いたんだ」

問い掛けに込められたものの大きさになど、気付く気配もない、樂しげな返答。

「それに、どんな意味があるの」

今まで出したことのない、凍るような声色だと、自分で思った。それは、ジェドルたちの生と引き替えにする価値のあるものなのか。

逆光で影になって、ラタンの表情が読めない。

向かい合って立っているだけで、地面に沈め込まれそうな威圧感。あの無表情で、真っ直ぐだったラタン。

信じようと決めた、瞳は。

ただれたような、狂気に濁った黒い玉にすげ替えられている。

「あんたは、この大陸に染み付いた現操術ってのが何だか知ってる？」

高鳴る耳鳴りを放置したまま、表情を動かさずに、沈黙していると、やがて少年は、まるで簡単な手品の下らない種明かしでもするように、つまらなそうな顔で吐き捨てる。

「――世界を飾るもの――人間の愚かしさの象徴だよ」

言い終えると口の端を上げ、ギョロリと見開いた眼球でルヤを射抜く少年は、生温い空気に溶けるような不気味な声を繋げていく。

「チャチなまやかしさ、だが上手く使えば、造作なく、もっと膨大な量の人間を、一度に内側から腐らせて殺せるんだ……きつと面白いよ、生きる価値の無い塵どもが一斉に狂って死ぬ様は」

打って変わって、恍惚とした微笑み。

「あんたは、その起爆剤になれる資質を持ってる」

宝石か何かに触れようとするように伸びてきた手を、叩き落とす。

「ふざけないでよ……」

昨日まで、心から信じたいと願っていた瞳の奥を、憎悪を込めて睨み付ける。

滑稽な程に甘かった自分に対する、吐き気を押さえつけながら。

「そんなに、軽くない……ジェドルも、ビスラム、サーナもみんな、あんたみたいなわけの分からない奴に、そんな、わけの分からない理由で消されていい命じゃないの……！　いつだって、何かを探してた、掴もうとして、その為にたくさんのももの乗り越えて、取るに足らない毎日だって、積み重ねていたの、形を、作ろうとしていたの！」

耳元で、鼓動が跳ね続いていた。

頭の端で、途切れがちな甲高い音が鳴り響いている。

まるで、壊れた楽器のように。

「あなたに、それを終わらせる権利なんて無かった、奪う権利なんて無かったの……」

「いいよ、いい感じだ……もう少し振り切れたら、軋んで、ぐちゃぐちゃに潰れちゃいそうだけど」

「潰れないよ……あなたが、この世に生きている限りは、私は意地でも、狂ったりしない、手放したりしない」

この、殺意を。

「そりゃ、ありがたい」

「死になさい、ラタン……奪われる苦しみを、同じように味わわせてあげるから」

腰に下げたナイフを抜き放ち、虫けらでも眺めるように薄く笑う、人ではなくなったラタンの隙だらけの小さな体目掛けて、ルヤは躊躇いなく地面を踏み切った。

十二

十二

ナイフを手には少年の懷に飛び込んでいくルヤに加勢しようと、岩陰から踏み出しそうになったロークは、咄嗟に腕を掴まれ我に返った。

見上げると、信頼する先輩術師が渋い顔で首を振っている。

と、同時に、空気を裂くような爆音が、足下の砂を震わせた。

「やめとけ、あの小僧、化けもんだ、俺達じゃどうにもならない」

「ユジフ先輩……だけど、僕は」

振り返ると、ルヤは、少年の放った鋭い閃きをすんでのところかわかし、間合いを取って再び臨戦態勢に入ろうとしている。だが、ロークには分かった、少年が今の光をわざと逸らしたことを。それに、先日目にした、ジェドルたちを葬った時の彼の力はあるものではない。ではなかった。どうやら、ルヤを殺すつもりはないらしいことが窺える。

「だけど、あれを放っておくわけにはいかないでしょう！」

「俺達が出て行っても無駄死にするだけだ。奴もあの女を本気で殺る気はないようだし、様子を見よう」

「様子を見てどうするんですか」

「さあな。取り敢えずこの場は切り抜けて、後でこの件を院か国に報告するってことくらいが、俺達に出来る最大限の働きだろう」

「そんな悠長なことを言ったら、奴は野放しですよ」

それに、いつあの狂気に満ち溢れた少年が気を変えて彼女を殺そうとするかも分からない。例えばそうならなかったとしても、彼女は、ルヤは、彼にいいように利用されることになるのだ。それは、彼女にとって、死以上の苦痛ではないのか。

「仕方ないだろ、他に手立てはない」

「僕が、奴を封じてみます」

迷いなく言い切ったロークを横目で睨み付けたユジフは、その真剣な眼差しに、短い溜息を吐く。

「奴と、核同調かくどうちようするつもりか」

「全てを忘れているとき、奴は無害でした……あの状態に戻すことができれば」

「あんなのと核同調して、ただで済むと思ってんのか」

「……先輩に迷惑は掛けません、やらせてください」

「今度こそ、リリファと同じ末路を辿ることになるぞ……あんな見ず知らずの女の為に」

「……僕は、ただ、あの頃の自分を助けたいだけです」

ロークは微かに笑って、何も言わずに鋭い視線を向けてくるユジフから、死闘が繰り広げられる巨大な崖の縁へと視界を移した。

ただ核同調すると一口に言っても、無条件に誰とでも同調できるわけではない。まず相手の体に触れていなければ術自体の発動が叶わないし、相手がこちらを信用していなかったり、強い警戒意識を抱いていたりすると同調はほぼ不可能である。

今回、対象はこちらを完全に敵視する存在。この場合、相手の注意を一瞬逸らして無防備な意識状態に導き、その機を逃さずに同調するしかない。

顎に手を当てて、どういった手でいこうかと思案するロークの横で、忌々しそうな舌打ちが響いた。見ると、眉間に深い皺を寄せたユジフが立ち上がって手の砂を払っている。

「策も無しに無謀なこと言い出してんじゃねえよ」

「ユジフ先輩？」

「いいか、ヤバイと思ったらすぐに同調をやめると約束しろ」

目元に気怠そうな気配を醸したまま、戒めるように厳しい声で言うユジフを、ロークは静かに見返した。

何事にも無関心で、他人との関わりを嫌うユジフ。だが最後の最後には嫌な顔をしながらも、見放さずに面倒を見てくれる。数年前、

何も聞こえない闇の底から呼び戻してくれたのも、彼だった。

ロークが固い決意の瞳で頷くと、ユジフも軽く頷き、爆音と閃光が止むことなく続いている谷を指差す。

「俺が奴の注意を引いてやる、お前は上手い具合見計らって気付かれないよう後ろから回り込め」

そう言うやいなや、ユジフは低く身を屈めて素早く隣の岩陰へと走り去っていった。

「え？ 上手い具合って、先輩……！」

大雑把な指示に啞然として、慌てて低い声で呼び掛けるが、その後ろ姿は更にもう一つ向こうの岩の陰へと消えていく。

ユジフが一体どんな方法で少年の気を逸らすのか予想もつかないまま、仕方なく、例えばどんな状況になっても出来る限り対応できるように、周囲の地形を把握しておこうとロークは視線を巡らせた。

今隠れている大岩はロークの背丈ほどの大きさで、今ルヤとラタンが戦闘を繰り広げている位置からは数十歩の距離がある。二人の会話の内容も、ラタンの狂ったような大声が時々聞き取れた程度で、ルヤの声はほとんど聞こえなかった。その岩から、谷に向かって左右両側に同じような大きさの岩が転がっている。左手の岩の方が右手の岩より近く、ユジフが素早く移動していったのも左手の岩陰だ。そして、その左の岩の更に向こうにも、もう一つ巨大な岩があり、そこにユジフが消えていくところまでは確認した。それ以外に隠れられそうな障害物はなく、どの岩も谷の縁にいる二人からはかなりの距離がある。正攻法で飛び出したとしても、少年の側に近付くことすらままならずにあの桁違いの力の餌食となるのが落ちだろう。ユジフは、一体どんな方法をとるのか。もし彼の身に何かあれば、それは無理を言った自分の責任であることは間違いない。ロークは今更騒ぎ出した胸を、落ち着けようと努めた。今は余計なことは考えず、彼が貸してくれる力を無駄にしない為にも少年を封じることだけに集中しよう。深く呼吸して思考を冷ましながら、急に静かになった崖縁に意識を戻すと、ルヤが、地面にうつ伏せになって倒れ

ている光景が飛び込んできた。

思わず身を乗り出して目を凝らす、この場所からでは生死までは判断できない。

まさか――

嫌な想像が頭を掠める。

ジエドルとしてルヤの傍にいたとき見聞きした様々な出来事を、ロークは全て覚えていた。

決して強くなかった彼女。仲間を失うことを何よりも恐れ、それでも、強くなろうと、必死に戦っていた。

こんな終わりを迎えて欲しくなどない、辛くとも、いつか、新しい幸せを手にして欲しい。

無責任な考えだと分かっていた。自分だって、あの頃は、そんなもの欲しくはなかった。あの痛みに耐えてまで、あるかどうか分からない別の幸せなど。

だが、それでも――

倒れたルヤに近付こうとするラタンの後ろ姿を、食い入るような視線で追う。

と、突然、少年が振り返り、その瞬間飛び込んできた巨大な炎の矢をかざした手で弾くように消し去った。

「やっぱ、そう簡単にはいかねえか……」

左手にある二つの巨岩の間から、銀の鳴鍵を肩に乗せたユジフが、少年にのろのろとした足取りで近付いていく。

目を疑った。

あれでは、殺されにいくようなものではないか。

「せっかくあるとき見逃してやったのに、何をこのこ出てくるんだ、あんたは」

「ガキに舐められっぱなしってのは想像以上に胸糞悪かったもんでね……ま、俺が本気出せばお前なんか一捻りだってこと、ここで証明してやるよ」

鳴鍵に手をかざし、不敵に目を細めるユジフを見て、ラタンは馬

鹿笑いを始める。

「面白いよ、あんた。オレはあんたみたいな勘違いの屑を全部消したいんだ、その為に、こんな面倒臭いことやってるんだよ」

言い終える頃には笑みを消し、形相を侮蔑のそれに変えたラタンは、天に向けた手の平の中に青白い光の渦をつくり出す。

「面倒臭すぎて、丁度、退屈してたところだ」

「調子に乗りすぎなんだよ、ガキが」

隙をついたようにユジフが放った深紅の熱波は、一瞬遅れて少年の手から膨れあがる何倍もの大きさの青い光と轟音に呆気なく呑み込まれていく。

目を刺すような閃光と、小刻みな震動、巻き起こる突風に体ごともって行かれそうになって、ロークは地面に伏せ、脈動が過ぎ去るのを待った。

「そこにもいるんだろう？ 頭の悪い仲間は消してやったよ。あんたも隠れてないで出てきたらどうだ」

頭上から舞い落ちてくる細かな砂の粒があるべき場所に落ち着かないうちに、ラタンの笑いを含んだ声がロークの隠れている岩に向けられた。

薄く瞼を開くと、砂埃の狭間に見えるユジフの立っていた地面は深く抉られ、彼の姿は形さえ残っていない。

「ユジフせんぱ……」

頭の奥が音を立てて弾け、立ち上がろうとした、瞬間――

「ユジフ先輩！」

右手から、どこかで聞いたような叫び声が響く。

その声の主を振り返って、目を剥いた。

自分だった。

自分、ロークが、叫びながら、ラタンのいそうな方向に当たりを付けて、砂埃の中を闇雲に駆け去っていく。

その様を瞬きもせずに見送ると、再び、轟音と、光の巻き起こす風が、押し寄せてきた。

今度は地面に伏せずに、砂嵐を体に受けて踏ん張りながら、全てを悟ったロークは迷いなく院で習った通りに気配を消し、岩陰から飛び出した。無言のまま、ラタンの声が聞こえた位置を頭の中で測りながら、向かい風に逆らって歩く。

この砂煙に隠れば、奴に姿を見られずに近付くことが出来る。余韻が収まるまでに、彼の背後を取ることが出来れば。だが、対象の位置を正確に把握できないのはこちらも同じ、運良く背後に出られればいいが、もし正面からかち合ってしまった場合、自分に勝ち目はないだろう。

薄らぎだした砂埃の向こうに、黒いローブ姿の背の低い影が見え隠れを始める。

少年は、油断のない顔付きで、こちらを窺っていた。

――まずい……

桁違いなのは力だけではないということか、感覚の鋭さも人並みを外れている。

シトア教僧院内でも噂一つ聞いたことのない、この幼い外見に見合わない力を持つ術師は一体何者なのか。

そんな疑問が頭を掠めたのは、本当に一瞬のことだった。

このままでは、存在をすぐに悟られる。見付かれれば、命は無い。どうする。

一度、岩陰に戻るべきかと思考を巡らせ掛けたとき、

「ラタン、どこを見ているの」

前方から聞こえた柔らかな声に顔を上げる。

反応したのは、ロークだけではなかった。

目を見開いて背後を振り返ったラタンに、ナイフをかざしたルヤが、低い姿勢で迫っていた。しかし、ロークの目に留まったのは、ラタンの足下に倒れたままのルヤ。

今一度ナイフを持ったルヤを見ると、こちらに視線を投げ掛けている。

ロークはこの機を逃さずに精一杯足音を殺して駆け寄り、掴んだ。

乱暴に腕を握り取られ振り向いたラタンの眼圧を受けながら、それでも、怯まなかった。

怯んでいる暇など、無かった。

「なんだと……」

「おつむの方はガキのまままで助かったぜ」

ナイフを持ってにやりと笑うルヤの姿は、ユジフに戻っていく。

ロークは彼に目を配り頷くと、握り締めた少年の左腕から、自分の核の一部を滑り込ませた。

奥へ、奥へ。

少年の、思考、感情、記憶との同調を試みる。

深層への扉が、閉ざされてしまう前に。

間に合うことを祈って。

突如、目の前に広がったのは、穏やかな、村の風景。

深く、静寂に包まれた森の中。

降り注ぐ陽の光に煌めく、緑の木々。

大地を染めゆく、白い雪。

巡る季節。

笑顔。

優しい声。

温もり。

「レギ、こっちへおいで」

差し伸べられた手。

血で塗り尽くされる。

見慣れた顔。

叩き潰される。

内側の空洞が音を立てて軋む。

崩れ落ちる。

止められない。

飛び散る肉。

頬に降りかかる、温かな血。

血溜まりの中で蹲る人、人、人。

叫びに埋め込まれる。

膨れあがる、白い意識。

涙。

血。

容赦なく押し寄せる心象。

暴れ回る。

この記憶が、彼を――

溺れ掛けながらなんとか保たれているロークとしての意識の片鱗を起こす。

この記憶を、封じれば――

全てをかき乱す、この世界を、手の中に包み、蓋をする。

――レギ

彼の本当の名を鍵にして、ゆっくりと回す。

終えて、戻ろうとしたロークを、これまでとは別の箇所から噴き出してきた、全く異質の意識が取り囲んだ。

静かな闇。

目覚めると白い壁。

天井。

――なんだ、ここは……

表情のない人間の目。

痛み。

苦痛に声を上げる。

再び、静かな闇の中。

白い部屋。

体中に走る痛み。

声を張り上げる。

訪れる、静かな闇。

繰り返される、ぶつ切りの映像。

白い天井。

覗き込む白い装束の人間。

痛み。

音のない闇。

白い壁。

天井。

総毛立つ痛み。

頭の中が泡立っていく。

数十回、数百回、終わらない、闇と部屋。

ロークとしての意識が、悲鳴を上げているのが、遠くで聞こえる。
終わらない。

終わらない、終わらない、終わらない。

細かく、千切れていく。

自分が、誰だったか、何だったか。

無限に裂かれた、どれが、自分だったか。

薄れていく。

——ローク！

声。

懐かしい声。

ロークという存在を、思い出す。

——こっち、ローク

小さな少女の手が、優しく、導いてくれる。

闇と、白い部屋が、見えなくなるところまで。

その場所に居たのが、自分ではなかったことを思い出せるところまで。

——あっちに行けば、戻れるよ

遠くに見える光を指差して、少女は、身を翻し離れていく。

——君は、一緒に行かないの？

この子と一緒にいられば、安心できるのに。

こんなにも、心が望んでいるのに。

少女は笑って首を振り、消えた。

——どうして、きてくれないの……？

「——リリファ……」

眩いて、瞬きすると、視界に入りきらない青。

それが、空だということに、目の中に収まりきらない涙が一粒出ていって、気付いた。

十三

十三

吐き気を催すような気味の悪い夢から目覚めると、もうそれがどんな夢だったのか忘れていた。頭を振りながら肘を突き上半身を起こそうとして、砂の匂いとその感触に飛び起きる。手の中にナイフがなくなっていることに気付き地面に目を這わせるルヤの頭上から、怠そうな男の声が降ってきた。

「これか」

顔を上げると、痩せたローブの男、宿でユジフと名乗っていた態度の悪いシトア教僧が、離れた砂地に落ちているナイフを刃の部分で慎重に掴みながら、拾い上げていた。

周囲に流れる空気がガラリと変貌していることに漸く気づき、呆然とする。

確か、自分はラタンとここで、命のやりとりをしていたのではなかったか。

「あんた、あの小僧に気絶させられてたんだよ……まったく、とてもないガキだぜ、あんだだけの力を完全に制御してやがるんだからな」

ナイフを持って近付いてきたユジフに、息をするのも忘れて詰め寄る。

「ラタンはどこ」

あれだけ辺りに満ちていた、体に絡みついてくるような重く、暗く、死臭さえ漂っていた空気が、跡形もなく消えている。自分が気を失っている間に、彼らがラタンを始末したということだろうか。もしそうならば、仲間の敵を自分の手で取れなかったことはルヤにとって悔やむべきことだった。

「奴なら、あそこだ」

ユジフの視線を素早く辿ると、少し遠い位置にある崩れかけた岩の前、丁度こちらを振り返ろうとしているロークの向こう側で、彼と向かい合う形で棒立ちになっている黒いローブの少年が、ルヤの方を真っ直ぐに見詰めていた。

ロークに促されるようにしてゆっくりと歩き出し、こちらに近付いてくる少年の姿は、ルヤの良く知るものだった。

そこにいるはずなのに、本当は遠くにいるような、透けてしまいそうな佇まい。

悲しみも、喜びも、怒りも、何一つ映さない、白い顔。
声をなくしているルヤを、ユジフがちらりと見やる。

「ロークとの核同調後、ぶっ倒れて、目覚めてからはあの通りだ……」

「どういうこと……何をしたの、ラタンに」

「さあな、色々と複雑らしいが、俺には覚醒者の才が無いからな、ロークの感覚的な話はいまいち実感として伝わってこねえ。今も小僧とロークのちんぷんかんぷんな話し合いから逃げてきたとこだ」

「また、全部、忘れたってこと……?」

無感情な声が、勝手に口から漏れた。

ビスラを殺したことも。

サーナを殺したことも。

ジェドルを殺したことも。

自分を裏切ったことも。

忘れて、こうして平然と目の前にやってくるのなら。

なんて、幸せなんだろう、この存在は。

「彼の場合、ただ忘れているという単純な状態ではないようです」
虚ろな目をしたラタンを連れて、すぐ傍まで歩いてきたロークが、ルヤの誰にともなく呟いた問いに応じる。

「彼の内的世界は、過去に受けた何らかの耐え難い苦痛によって深い損傷を負っています……世界をいくつにも分け、その衝撃を分散させることで崩壊を免れている……さっきの、凶暴性を前面に押し

出した彼も、そして、ここにいてる全てを忘れ去った彼も、恐らく、その分けられた世界の一つに過ぎないのではないかと、僕は感じました……」

「内的世界を分ける……そんなことが可能なのか……？」

「僕も、こんな例に出会ったのは初めてで、はつきりとしたことはわかりませんが……意図的に分けたと言うよりは、彼の深層意識が崩壊を怖れる余り、苦し紛れに引き裂いた……どちらかというと、そんな印象ですね」

二人の専門的な会話は続いていく。

彼の世界が分かれるきっかけとなった出来事とは何か。分かれた世界のどれが本来の彼なのか、どれもそうではないのか、また元の一つに戻ることはあり得るのか。そもそも、彼はこういった経歴の人物なのか、何故、ここににいるのか、保護すべき者は近くにいるのか。移り変わっていく疑問に対するロークの回答はどれもこれも抽象的、断片的なもので、ラタンという人物像の漠然とした輪郭しか伝わってこない。それでも、きっと昨日までの自分なら、理解できるまでしつこくロークに質問を重ねたのだろう。ラタンが、温かな場所に戻る方法を必死に模索したのだろう。だが、今のルヤにとってそれら細かな御託を理解することに、大した意味は感じられなかった。全てを忘れた今のラタンと、さっきの狂った子供、そのどちらが本来の人格であろうと、なかろうと、たとえ彼が目を覆うような悲惨な過去を背負い、重大な秘密を抱えていようと、もう興味などなかった。問題なのは、自分がラタンと名付けた、この、たった一つの体を持った得体の知れない子供が、自分の生きる意味でもあった大切な人間の命を奪ったのか、そうでないのか、それだけなのだから。

「ラタン……もうすっかり、私のよく知ってるあなたに戻ったんだね」

ロークの一步後ろで大人しく話に耳を傾けている、さっきとは別人のようなラタンをぼんやりと眺めているうちに、続いていた二人

の僧の会話を遮るような形で、そんな一本調子の声が口から零れていた。

自分がどんな表情をしているのか、想像もつかない。微笑んでいるのか、醜く顔を歪めているのか。

呼び掛けられると、ラタンは、ほとんど微動だにしないまま、音もなく視線を上げて、あの、何も映そうとしない漆黒の瞳にルヤを映した。

太陽の輝く音が聞こえてきそうな静寂は、先程まで爆音と閃光入り乱れていた崖縁を、別の場所に変えていた。そこに佇む少年が、さっきの、何か、別の生き物のような禍々しさを垂れ流す、人型をした何かと同一の存在だということが、信じられない程に。

「……あなたが、待っていた人……殺したんだね、僕が」

それは、紛れもなくこの十日間共にあった、あの、無表情のラタン。

「覚えているの？」

感情を含まない自動的な声が、間髪入れずに問い掛ける。

ラタンは、ルヤから瞳を逸らさないまま、首を横に振った。

「……昨日、寝台に入ったところまでは覚えている。気が付いたら、ここで寝ていた」

言葉が、出なかった。

頭が、白い靄で満たされ、はち切れそうになる。

「やはり、信じる価値など無い人間だった……僕は……」

そう発する少年に、苛立ちに似た違和感を覚えた。

どうして、こんな時でさえ彼は、声に感情を込めないのだろう。

悲しそうな顔一つしないのだろう。

すまなそうな顔一つしないのだろう。

感じ取れるのは、ほんの微かな、寂しさの色だけ。

「……僕の中にあるのは、ただ、人を殺し……人を不幸にした過去と記憶……それだけ、だった」

そう呟いて遠い目をするラタンを、見開いた眼球が視界に閉じ込

めたまま、動こうとしなかった。この少年にとって、自分の仲間を命を奪ったことは、やはり、実感の湧かない、遠い世界の出来事なのだろうか。聞かされて、納得しただけの、覚えのない、自分ではない、別の誰かがやったことなのだろうか。

「なにを、他人事みたいに言ってるの……？」

ユジフの手から乱暴にナイフをひったくり、勢い良くラタンとの距離を詰める。後退ろうともせず、ぼんやりと佇んだままの少年の胸ぐらを掴み、信じて、信じて、信じ続けた先に生まれた怒りを、やりようのない悲しみを、どこまでも続く絶望を、全て叩き付けるように激しく揺さぶった。

「あなたが殺したんだよ！ 私の大切な、大切な、ずっと一緒に、これからも一緒にいるはずだった、ジェドルを、ビスラを、サーナを！ 分かる？ 殺したんだよ、あなたが、この手で！ ただ、忘れてるだけで、大した意味もなくこの世界からみんなを消したんだよ！ そのあなたが、なんで、そんな平気な顔で生きてるの？ どうして、何も知りませんでしたみたいなの顔してられるの？ ずるいよ……！ みんなを返して、返してよ！」

このとき、初めて、ラタンが痛みに耐えるように目を細めた。

だが、それが何だというのだ。

痛むのなんか、当たり前だ。

傷付くなんて、見当違いだ。

殺された三人はそんな痛みどころじゃなかった。

理由もなく未来を奪われ、生命をもぎ取られた痛み比べたら、なんて、軽い。

「ラタン、私はあなたを許せない」

漆黒の髪を掴み、白い首元に、ナイフを当てる。

それでも、少年は抵抗する素振りすら見せない。

ルヤの憎しみに満ちた眼光を受け取りながら、その向こうにある、別の何かを見ているような、ガラス玉のような、瞳。

「殺したらしい」

「……………」

どこまでも感情を示さない彼にとって、殺されるということも、石ころを道端に投げ捨てるのと変わらない、取るに足らない出来事なのかもしれない。

頭の隅でそんなことを思いながら、この、哀れで、許し難い子供に、最後の言葉を掛ける。

「死ぬ前に、言いたいことはないの？　あるなら、聞いてあげる」
互いの額が触れ合いそうなほど近くで、やはり無感情な目のままじつとこちらを見詰めるラタンを睨みながら、この少年に言い残すほどの何かがあるはずがないと、自分の言動を馬鹿らしく思った。
空っぽなのだ、彼は。

躊躇いなく、刃を滑らせようと力を込める――
「僕を生んだのはあなただ、ルヤ……死ぬときは、こうして、あなたに望まれて終わるのが、きっと僕には、一番相応しい……」

込めたはずの力が、刃を動かさなかった。
どうしてなのかわからず、思わず首を傾げる。
だから、何だというのだ。

自分が名前を付けたことで、言葉を掛けたことで、彼が生まれたからといって、それに、どんな意味があるというのだ。

名前を気に入らないかと覗き込むと、照れたように逸らされた瞳。無理をして明るく振る舞うな、壊れてしまうと、自分を心配した表情。

無機質の中の微かな笑顔。

それが、何だというのだ。

この少年はジェドルを殺した、ビスラを殺した、サーナを殺した。自分が今、この刃を引かない理由になどならない。

「早く」

ラタンが、自分で刃に手を当て、強く押し付けて滑らせる。
白い喉元を伝う、一筋の血。後を追うようにして、二筋――
三筋目が、大きな川になって初めの二筋を呑み込んでいく。

「いやあああっ！」

地面に落ちたナイフが、岩の上で、虚しくくるくると回転していた。

激しく息を切らして、数歩後退りながら、視線は少年の傷を確認する。血は止まっていなかったが、命に関わる深さではないようだった。

それを見て、どこかで安心して自分の気付き、不意に、胃の中の物が逆流しそうになって口元を両手で押さえる。

どうしてか、湧き上がってくる涙を止めようとして、喉の奥から低い呻きが漏れた。

苦しかった。

どんなに泣き叫んでも、もう、誰も救いに来てくれないこの世界が。

胸の中で際限無く膨張していく、この、どす黒いうねりが。

仲間を裏切る自分が。

どうしてか、独りで生きている、この体が。

自分の内側が、みしみしと音を立てて軋んでいく。

ただ、立っていることさえ、伴う痛みでままならない。

ぼやけて役に立たない視界に頼らず、風の鳴き声が聞こえる方向にゆっくりと歩き出す。

何故、自分はそこに向かうのか。

深く考えることも、もう、したくなかった。

その力が、残っていなかった。

ただ、この苦しみが終わる場所を求めて。

何の覚悟も、思い切りもなく、ただ、足下が無くなることを目指して歩く。

後一步というところで腕を掴まれたことに気付いたのは、いつまで歩を進めても目前にある闇に体が飛び込んでいかないうことを認識したからだだった。

「離して」

「本当に、いいんですか……これで」

幼さの残る柔和な顔立ちに、怒っているような、泣きそうになっているようにも見える真剣な表情を浮かべてルヤの腕をしっかりと掴んでいたのは、ロークだった。

「もう、ジェドルともビスラとも、サーナとも会えなくて、私からみんなから、全てを奪った敵を殺すことも出来ないなら、もう、この世界にいる意味なんてない！ みんなと同じところに行くの、行かせて、お願い……！」

「ここから落ちても、同じところへは行けません」

「でたらめ言わないで、そんなこと、あなたに分かるわけない！」

「僕は覚醒者だから、少しでも分かるんです。今ここで死んでも、あなたが仲間に出会うことは出来ない……ただ、その苦しみが続くだけです」

「じゃあ、どうしたらいいの……？ 何を支えにして、立ち上がったらいいの……？ 何もないの……つかまれるものが、何も……立てないの……！」

ロークの腕を振りほどこうとして、力が入らず、涙が落ちた。

この若い術師は、それでも自力で立ち上がれと言うのだろうか。立ち上がる力なんて、もう、入らないのに。

ただ、倒れているだけで、こんなにも、苦しいのに。

「何も支えがないなんて、嘘です……」

彼の声が紡いだ、一言。

思わず、ロークの、包み込むような、光を浴びて藍に澄む瞳を見返した。

「それだけ彼らを大切に思えるのなら……その気持ちを――彼らの思い出を、支えにしてみたら、いいんじゃないでしょうか」

「……おもしろい……で」

「楽しかった思い出、嬉しかった思い出、辛い思い出だっていいです、彼らが死んでしまっても、それは、あなたの中にしっかりと残っているんでしょう？ それにつかまって、立ち上がることは出来

ませんか？」

皆との、思い出を支えに――

そんなこと、思い付きも、しなかった。

楽しい思い出も、嬉しい思い出も、仲間のことを思い出しただけで、悲しくなる気がしていた。けれどそれは、確かにルヤの中でたったひとつ、心から信じられる、優しく、美しく、温かな、決して色褪せないものだった。

「ここで死んでしまったら、その思い出まで失われてしまいます……どうか、手放さないであげてください……」

涙が、崖の岩に幾粒も染み込んでいく。

その様を、膝を突いて嗚咽に咽びながら、いつまでも見ていた。

自分は、生きていくのだろうか。

誰もいなくなった、この世界で。

どんなに待ち続けても、もう、彼らに再び会える日はやって来ないのに。

耐え難いこの痛みは変わることなく、きっと生きていく限りこの身を蝕み続けるのに。

この術師の言葉を信じて、たったひとつ自分に残された、思い出の中にいる彼らを胸に抱き続けることを、選ぼうとしているのだろうか――

「僕も同じでした、今のあなたと……でも、今ではここまで生きてきて良かったと、そう思います……」

気休めにしか聞こえない言葉だった。

こんなに穏やかな表情をする彼に、自分ほど苦しんだ経験があるとは思えない。

ただ、そう言ったときの彼の微笑みは、涙で乱反射した光に飾られて、眩いほどに綺麗だと、喉を引きつらせ、声をあげて泣きながら、それだけ、ルヤは感じていた。

十四

十四

白い輝きを降らす僅かに欠けた月が、小さな窓に切り取られた空に浮かんでいた。

日干し煉瓦で組まれた窓縁に頼杖を付き、その光に目を細めていたルヤは、ふと、眺め始めたときに比べ、ずいぶんと月が位置を変えていることに気付き室内を振り返った。

窓の外に、この微笑む空を見付けた頃に灯しておいた卓上のランプは油を切らして消え、隣室や廊下から仄かに染み込んできた低いざわめきも、いつの間にか静けさに取って代わられていた。

どのくらい、ここで、こうしていたのだろうか。特に何かを考えていたわけでも、感傷に浸っていたわけでもない。ただ、月明かりを、その美しさを眺めていた。そうしている間は、嘘のように気持ちが高揚した。景色の中に身を委ねていると、自分がここにいて、息をしていることを忘れていられる。全ての重りをすり抜け、あの濃紺の空と同化していられる。けれど、その瞬間には必ず終わりがやって来て、心が、重りの沈み込むこの体の中に戻ってくると、やはり自分はある空に浮かぶ月でも、降り注ぐ光でも、空でもなかったことを、思い出すのだった。

淡く照らし出された静かすぎる部屋の中で、思わず漏れた溜息を引きちぎるようにベッドに潜り込み目を閉じた。

あの後、谷から帰ってみると、村は大騒ぎになっていた。谷でラタンが起こした爆発の余波は離れたこの村にまで及んでいて、地響きで古い家屋が崩れるほどだったという。人々はこの世の終わるか、化け物の襲来かと、すっかり怯えきって、ルヤ達が谷の方にいたと知ると、村に入ってくるなど騒ぎ立て、乱闘に発展しかねない混乱ぶりだった。その場はロークとユジフが自分たちの身分を明かし、

あれは自分たちが獣を追い払う為に放った現操術が起こした現象であり、この村に危害が及ぶことは一切ないと言って聞かせた為何とか収まったが、数日前のスナヒヨウの一件もあり、皆様に、どこか納得がいかないという顔をして、四人に向けられる異質なものを見るような視線が完全に消えることはなかった。宿に帰ると、夫妻に真剣な面差しで本当のことを言えと問いつめられ、内密にという条件付きでロークたちが彼らにだけは真実を話した。全てを知らされてからも、主人も女将も、持ち前の明るさでこれまでと何ら変わりない態度で接してくれたが、それはきつと気を遣ってくれているだけのだろうと、ルヤには感じられた。実際、ふとした瞬間、ラタンを見る彼らの目は、明らかに恐怖のそれに変わっていた。それはそうだろう。いつまたこの少年が狂気に囚われ、周囲の人間を無差別に殺戮するという行為に及ばないとも限らないのだから。事実、もし目覚めてしまえば彼は何の躊躇いもなくそれを行うだろう。

そう長くは、ここに留まっていられない。二人の僧侶は、自分たちの目的地向かう前にラタンを王都に連れて行き、彼の身を国に引き渡して判断を任せるつもりらしい。ラタンも、それに同意していると言っていた。話し合いの最後、それでいいかとユジフに尋ねられて、ルヤは、答えられなかった。仲間を奪った憎き敵であるラタン。出来ることならこの手で討ちたい。だが、自分には出来なかった。全くの無抵抗だったラタンに、あの、狂った子供を重ねて殺すことが出来なかった。それなら、彼らに任せて、国に重罰を下してもらう方がいいのかもしれない。話し合いの場に存在しながら、自ら言葉を発することなくぼんやりと座っている、透けてしまいそうなラタンを見ると、怒りと、憎しみと、それを否定しようとする愛着のような感情が一斉に押し寄せて、気がおかしくなりそうだった。

結局、彼らの問い掛けに対する明確な答えが浮かんでくることのないまま、昨夜の会議は解散となったが、あんたがはっきりしなければ、それだけ周囲の人間が危険に晒されるということを忘れるな

と、そう、ユジフに釘を刺された。

自室に戻り、明日の朝までには答えを出さなければと、窓の外を眺めているうちに、いつの間にか、その穏やかな景色に意識を吸い込まれていた。

あのまま、本当に空に吸い込まれて、いなくなってしまうたらよかった。

虚しい空想に苦笑して、疲れきった頭を何とか働かせようと努める。

自分はどうしたいのだろう。

ラタンをこの手で殺すことも、殺せず、手放して、断罪を他人の手に委ねることも、どちらも、張り裂けそうな苦痛だった。

どちらを選んだ先にも、希望も、安息も、見えない。それでも、選ばなければならぬ。

何度目かの堂々巡りを経て、ふと、我に返る。

こんな、世界が終わるような心持ちで迷い悩んでいるのは、人を殺すか、別の何かに殺させるか。

滑稽だった。

自分は、何をしているのだろう。

疾うに皆と旅立っているはずだった、この場所で。

「……ビスラ……サーナ……」

いつの間にか、頬に力が入っている。

何もかもが、狂ってしまった。

彼らがいなくなる前と同じようにそこにあるはずの世界は、以前とは比べものにならないくらいに閑散とし、寂れ、漂う空気には毒が含まれているように息苦しい。

絞り出される涙だけが、自分の中に残った温かなもののようにだった。

「ジェドル……帰ってきてよ……お願いだから……!」

強く、強く、目を閉じて、そう、望んだ。

願わずにはいられなかった。

気が済むまで、空に手を伸ばさなければ、諦めきれなかった。
あと何回、自分はこうして、願わなければならぬのだろう。
あと何回、失望を繰り返せば、自分は願うことをやめるんだろう。
誰かの手が、頭に乗せられる感覚。

錯覚だと分かっている、薄く、瞼を開いてみる。

そこに、ジェドルがいてくれることを、心から切望して。

「いつまでガキみたいに泣きべそかいてんだ、バカ」

呆れたような顔が、自分を見下ろしていた。

息が止まって、声にならない声が、零れた。

ぱくぱくと口だけを動かす自分を見て、眉を寄せる、彼。

ベッドに足を組んで腰掛け、目の前で手の平をひらひらと舞わせている、その姿は――

「……ジェ、ドル……」

「おう」

にっこり笑う、その、笑顔。

何を引き替えにしてもいいと、望んでいた、笑顔。

どうして、ここに、いるのか。

本当に、いるのか。

それとも、これは、夢なのか。

幻なのか。

どんな疑問を投げ掛けるより先に、ルヤは、その懐かしい体に抱きついて、泣き叫んだ。

夢なら覚めてしまう前に。

幻なら、消えてしまう前に。

ジェドルは、しっかりと抱き締め返してくれた。

なかなか泣き止まないルヤの頭を、強く抱きかかえてくれた。

「ルヤ……もう泣くな」

「……よかった、帰ってきた……ジェドルが帰ってきた……私、怖かった……独りぼっちになったと思ってた」

「ルヤ……」

「生きてたんだね……あの二人は、ジェドルの生死をすっかり確認してなかっただけだったんだ」

ジェドルの体に傷が一つもないことも、長旅に疲れた様子がないことも、ルヤには、見えなかった。敢えて、視界の中に入れないようにしていたのかもしれない。

「ルヤ……違うんだ」

「ジェドル……？」

ジェドルは小さく息を吐くと、一瞬迷うように伏せていた目を、静かに、不安そうなルヤに向けた。

「奴らの、言う通りなんだ……」

「……………」

「思い出したんだよ、全部。俺を、最後まで生かそうとしてくれたあの術師の力で、今は、ここにいるんだ」

「……嘘」

「お前に、言いたいことあって」

「嘘！」

やはり、自分は、独りだというのか。

これは、最後の別れだと。

そう、言うのか。

「嫌だ、もう私の前からいなくならないでジェドル！ 私、ジェドルがいないと、ビスラと、サーナと一緒にじゃないとダメなの……！」

「ルヤ、俺達だって、出来るならお前と一緒にいたい、あの術師の中にいるときは必死にそう願ってた……だが、仕方ないんだ……俺達はもう、お前と同じところには戻れない」

「じゃあ、私もそこに行く、みんながいるところに……そこに行けば、またみんなに会えるんでしょう？ ロークが言ってたことは、私を励ます為の嘘だったんだよね？」

「……あいつの言ってることは、本当だ……」

重苦しいジェドルの声が、ルヤの中に僅かに灯っていた最後の希望を摘み取る。

「……何で……嘘でも、会えるって言ってよ……死んだら、みんなのところに行けるって、待ってるから早く来いって……言ってよ……お願い……苦しいの……独りでいるのは、苦しくて、苦しすぎて……おかしくなりそうなの……」

ジェドルを見詰める見開いた瞳から、次々に、滴が溢れては落ちる。

ジェドルは、今までに見たことのない厳めしい顔をして何かを堪えるように強く唇を噛んでいた。そして、それでも、ルヤから視線を逸らすことなく、言葉を返す。

「お前が生きて、俺達のことを、時々、思い出してくれることしか、もう、俺達が全員集まれる方法がないんだ……一緒にいるには、もう、それしかないんだ……ルヤ」

どうして、そんな言い方をするのだ。

それは、もう二度と会えないということではないのか。

手で顔を覆い、ルヤは、泣き声を上げた。

そんな方法ではなく、自分は、新しい彼らを見たいのだ。

未来に突き進む彼らを見たいのだ。

自分の隣を、笑いながら歩いて欲しいのだ。

喉元まで湧き上がった我が儘は、全て、言葉ではない咆吼に変わる。

「ルヤ、お前は生きろ、俺達がなくしたものの、簡単に捨てるな」

「……ジェドル……だけど、だけど私は、みんながいて初めて、生きる意味を見付けたの……それを失った……これから生きていても、もう、私にはなにもないんだよ……」

「いい加減にしろ、ルヤ！」

強い語調で、ジェドルが、涙混じりのルヤの訴えを断ち切った。

「お前がこの旅についてくるって言い出したのは、そうやって俺達に甘えるためか？ 違うだろうが……！ 空っぽのまま自分を終わらせねえためだろうが！ 死ぬ気で生きて、最後に振り返ったときに残る何かを見付けるためだろうが……！ 今のお前は、あの時、

何も掴もうとせず泣いてた、空っぽのガキのまま変わっちゃいねえよ」

「ジェドル……」

それは、出会った頃、自分の送る一生には何もない、空っぽなのだと思暴自棄になっていたルヤに、まだ少年だったジェドルが掛けてくれた言葉。

死ぬ気になって生きて、望むものに手を伸ばせば、どんな一生も空っぽにはならない、何かが、必ず残る、そう、言ってくれた。

もう一度、最初から生きてみよう、思わせてくれた言葉。

「覚えてて、くれたんだね……」

「バーカ、忘れるわけねえだろ、俺様の名言なんだからな」

照れ隠しのようにそう言いながら鼻の頭を掻く、いつも通りのひねくれたジェドル。

まるで、いなくなるなんて、何かの冗談みたいに。

「ねえ、あなたにはあった……？ 振り返って、残るもの」

こんなことを聞くのは残酷だと、分かっていて、ルヤは尋ねた。

彼は、きつと志半ばで命を落とした。

だが、彼が、もし何もないと答えたら、自分にも見付けられないと言いつ張って、後を追う口実を作れるのではないか。そんな、弱く愚かな思惑があることに気付く様子もなく、ジェドルは一拍の間を置いて、ルヤに笑い掛け頷いた。

「……ああ、あったな」

その清々しげな表情が、意外だった。

突然命を奪われた彼の中に、残ったものとは、一体何なのか。

首を傾げている自分に、ジェドルの指が向けられた。

「お前だよ」

「え……」

「……お前に会えた。お前と出会う前は、俺は、目に見えない何かを探してる気持ちが強かった。だが、お前と会って、一緒に旅してるうちに、もう、生きる意味とか、自分がどうしたいとか、そんな

に貪欲には探さなくなってたんだよ……それは、ビスラム、サーナも、多分同じだ」

「ジェドル」

「じゃあな、ルヤ……会いたかったら、思い出せ、俺達はそこにいる……それで、生きて、自分だけの最後に残るもの、探し出せ」

「待ってジェドル！」

薄らいでいくジェドルに触れようとして、手が、空を掴んだ。

最後に、伝えたかった。

「ジェドル、私、あなたのこと……」

言い終わらないうちに、ジェドルは、少しだけ笑って、見えなくなった。

彼の立っていた暗闇を抱き締める。

目を閉じると、たくさんの思い出が溢れた。

その思い出の分だけ、涙が、止まらなかった。

これだけたくさん覚えてれば、いつでも、会えるんだ。

そう、心の中で、何度も、何度も、呟いて。

寂しくないのだと、悲しくないのだと、自分に思い込ませようとした。

そうしなければ、今すぐに、ジェドルとの約束を破って、瓦礫のように変わり果てたこの世界を捨て、彼を追いつけてしまいたいそうだった――

十五

十五

宿の壁面に背中を預けて、明晩には満ちそうな月を見上げながら、若いシトア教僧は深く息を吐いた。

「さよなら、ジェドルさん……」

手にした鳴鍵の、音の鳴らない鐘で、鎮魂の律動を奏でる。

昼間の焼け付くような暑さが嘘のような、ひんやりとした夜風に乗って、辺りに広がっていく、想いの残像。

「いったのか、奴は」

不意にすぐ右手の壁、木の戸で閉め切られていた窓が音を立てて開き、寝癖頭の男が欠伸をしながら顔を出した。眠ったのを確認してから出てきたつもりだったのだが、気付かれていたようだ。やはり、この先輩術師には敵わないと、ロークは肩を竦めて鳴鍵を下ろした。

「ええ、漸く彼の強い心残りも和らぎ、真世界しんせかいに溶けていったようです……もう、これで彼は、彼女の心の中にしかいなくなりました」

「そうか、良かったな」

「……良かった……でしようか、僕は、素直にそうは思えません。消えなくてもいい人間達の世界が消えて、彼女は、独りになってしまったんですから……」

「そんな不条理、この世の中には溢れ返ってる。そんな中で、お前みたいなお人好しの覚醒者が通り掛かったお陰で死んだ人間と最後の別れを成し遂げられたんだ、あの女は相当の幸運の持ち主だと俺は思うね」

「ユジフ先輩……」

「普通はそんな都合良くいかねえよ……死んだ奴とは、それっきりだ」

ユジフのくぐもった低い声が、岩と砂だけの殺風景な庭に響く。

ロークはそっと、ユジフの顔を窺った。

月明かりに照らされた眼下の村を眺めるその目には、珍しく、憂いが含まれているように感じられた。

「先輩にも、最後に言葉を交わしたかった人、いたんですか？」

そう尋ねると、ユジフは面倒臭そうに頭を掻きながら「あー」と肯定とも否定ともつかない一文字を発して、それきり、後には何も続けなかった。滅多に自分のことを話そうとしない、この、若くして誓^{せいりつ}律師の階級を持つ優秀な先輩から、昔話の一つでも聞き出せるかと期待したのだが、どうやら、その問いに答える気はないらしい。ロークは諦めて伸びをした。

「あとは……ラタンを王都に連れて行けば、落着ですネ」

「まあ、あの女の判断次第だけだな」

飄々と言つてのけるユジフを、ロークは複雑な面持ちで振り返つた。

「先輩は……彼女がもし復讐することを選んだら、黙って、遂げさせるつもりですか」

「ああ、そのつもりだが。お前は違うのか？」

「彼女の気持ちは分かります……だけど、罪人は、すべからく王の前で裁かれなければならない……国の掟に、背くことになります……」

それに、ルヤが自ら復讐を望んでいるのならともかく、敢えてこちらから、血で手を汚すような道突き付ける必要はないのではな
いか。ロークには、この誰よりも面倒事を嫌うユジフが、彼女に今
回のような選択を迫る意図が分からなかった。

「掟なんてのは、決めた奴の都合の良いように出来てるのが相場だ
……ただ馬鹿正直に守るだけが正しいとは限らないぜ？」

「どういふこと、ですか……？」

含みを持たせた彼の言い方に、首を傾げる。

「分からないか？ あのカギが何者かは知らないが、持つてる力は

尋常なもんじゃない。しかもだ、どういうわけかその力には、一般的な現操術とは異質な匂いが感じられるときてる。引き渡しても、果たして国がただの罪人として扱うかどうか怪しいもんだな……」

彼が何を言わんとしているのかが今ひとつ読みとれず、まだ分からないという顔をするロークに、ユジフは呆れたように口元を歪めて息を吐く。

「あの小僧は、王様の大切な手駒になるかもしれねえってことだよ」「な……」

頭を殴られたような衝撃だった。

思いも寄らなかった見解を述べるその怠そうな顔を、信じられない思いで見詰める。

「馬鹿な……ジューディ王は、そんな御方ではありません」

現在このアトラ王国を治めるジューディ十二世は、百年に一人の名君とまで謳われる才人として知られている。前王ジューディ十一世が十五年前まで破竹の勢いで繰り広げていた侵略戦争を王位継承後早々に終結させ、他国のみならず、軍事力に雲泥の差があると思われる新大陸の国々とも巧みな交渉術で友好な関係を保つことに成功している。希に見る卓越した指導力と聡明さを兼ね備えた人格者であるとして、民からは賢王と親しまれる存在だ。その好意的な印象は、ロークの中にも深く刻み込まれている。

だが、そんな舌が空回ったようなロークの反論を、ユジフの落着き払った声が切り捨てる。

「ああ、確かに民を想う、優しくて賢い王様なんだろうよ……だが、だからこそだ、何処にも属さない、何のしがらみもない強大な力を持ったあいつをただ黙って処刑させるとは思えねえ。民を愛する賢王様は、目下大切な自国を脅かす新大陸の連中に対抗する手段を血眼になって探しているんだろうからな」

まるで何でもないことのように王に対する皮肉の言葉をさらりと口にするユジフを、ロークは凍り付いたように見据えていた。この何に対しても投げやりな態度の先輩術師は、自分が思っている以上

に冷めた目で世界を眺めているのだと、心の底から実感させられる。この国に暮らす民の多くが、あの穏やかな面差しで微笑む偉大な指導者に心酔する中で、ここまで冷静且つ辛辣に賢王を批評する人間も珍しい。当のローク自身も例に漏れず、国益のためとはいえ、あの賢王が陰で重罪人を利用するような不正を行うなどとは考えたくなかったし、湧き上がった反発心が勝手にその可能性を否定する材料を探している。だが、こうして自分の信頼する人間に真っ正面から説き伏せられて、逃げ切れずに改めて慎重に考え直してみれば、確かにそれが、政治を取り仕切る上では賢明な判断なのかもしれないと気付く。

「……ま、俺としては別にどちらでもいいんだが……恐らく国に渡したら最後、もうあの小僧に簡単に手出しはできなくなるだろう。奴が公正に裁かれないのなら、あの女に奴を殺す権利を与えてやってもいいんじゃないかと思っただけ」

ユジフがそこまで考えていると知り、ただ既成概念に囚われて法を守ることにしか考えていなかった浅はかな自分が情けなくなる。

「まあ、確かにこれは俺の勝手な判断だ。ローク、お前はどうか考える？」

「……すみません……僕には、わかりません……」

自分たちには太刀打ちできない、大きな壁が、目の前に立ち塞がったような気分だった。ラタンという存在の重大さを、今頃になって思い知らされる。それでは、何処へ連れて行っても、彼はその力を持つが故に、常に政治的思惑に利用され続けるのかもしれない。そして不意に蘇る、静かな闇と、白い部屋、表情のない白い服の人間達。あれは、もしかしたら、かつて彼を保有していた何処かの勢力だったのかもしれない。そして、もしそうならば、ラタンが今その勢力の中ではなくこの地に一人でいるということが一体何を意味するのか。急に、寒気がした。殺人狂の彼を生んだのは、何処に行っても存在する、自分の中にさえ見付けることができそうな、身勝手な世界からの眺めではないのか。漠然とそんな思いが胸に絡みつ

き、世界中の塵のような人間達を一斉に殺したいと声をあげて笑っていた、彼の中に眠っているもう一人のラタンの顔が強烈に思い出されて、頭から離れなかった。

十六

十六

辺りを包む宿泊客のざわめき、笑い声、食器が触れあう微かな金属音、食堂の中を歩き回る使用人達の忙しそうな靴音。全てが、戸を隔てた向こう側のように遠くに聞こえる中で、ルヤは朝食の配膳を終えて厨房に戻り、他に手伝える仕事はないかと調理場を見渡していた。

洗い場に汚れた食器が残っているのを見付けて一步踏み出そうとしたとき、目の前に、透明な黄褐色をした液体がつがれた陶器の器が差し出される。

その、水仕事に荒れた色白の手の主を視線で辿ると、ここ数日で少しやつれただろうか、怒ったような、真面目な顔をした女将がルヤを見詰めていた。

「え、女将さん、これ……」

「蜂蜜と果物の汁を混ぜて作った特性ジュースだよ。朝早くから動き通しだろう？ これでも飲んで一息入れな」

「蜂蜜と果物って……女将さんすぐこういうのくれますけど、お客さんにも滅多に出さない高級品ですよね？ ……お願いですから、もうこんなことはやめてください。私、これ以上この宿にご迷惑を掛けたくないんです……」

「やめて欲しいんなら、そんな死人みたいな顔色で走り回ってるんじゃないよ。みんな言ってるよ、あんたのこと具合が悪そうだけど大丈夫なのかって……そんな無理して働かletたって、余計な心配事が増えるだけでそれこそ迷惑だよ」

女将に言われて、思わず自分の頬に手を当てる。冷たく、強張った感触が伝わってきた。自分は今、そんなに酷い顔をしているのだろうか。こうして動き回っている間は、何も考えなくて済む分、一

人でいるときよりは明るく振る舞えていると、何でもない顔をしていられると思っていたのに。

「……ごめんなさい……」

確かに病人のような顔をした使用人がうろついていたら、宿の印象も悪くなる。しょげて、申し訳なさそうに項垂れるルヤに、女将は表情を和らげて首を振った。

「あんなことがあった昨日の今日だろう？ 休んでろって言うのに聞かないで、朝から何も食べずに他人の倍は働いて……私を心配で倒れさせたくなかったら、そんなつまらない気を遣ってないでほら、飲みな」

唇を嚙んで頷き、そつと器の液体を口に含むと、控えめな甘さと柑橘系の果実の程良い酸味が心地良く舌の上に広がっていく。この丁度良い甘さになるまで蜂蜜の加減に気を遣ったであろう、女将そのもののような優しい味に、ルヤは涙が出そうになった。

朝起きたとき、自分は本当に独りになったのだと、強く感じた。ジェドルとの別れは、眠りから覚めると、まるで太陽の眩しさに身を潜めた月のように淡く胸に漂って、夢だったのではないかとさえ感じられた。そして、その代わりに、曖昧さを許さない強い光は全ての輪郭を濃く浮かび上がらせ、もう、自分を気に掛けてくれる人間も、心から大切に思えるものも、誰も何もなくなった、その現実まで、くっきりとルヤの心に影を落して過ぎ去っていく。遙か向こうまで続いていく、空白に塗り潰された明日が、もう、皆の帰りを待つ必要も、旅を続ける理由さえ、ないのだと、教えてくれた。

胸に空いた、暗く、深い穴を覗き込むのを怖れるように、自分がこの世界に一人きりではないことを確かめようとするように、発作的に、宿の手伝いに打ち込んだ。使用人達は皆気の良い面々で、自分に声を掛けてくれた、仕事を与えてくれた。そうしている間は、やはり一人ではないと確認できた。だから、笑えていると思っていた、皆と居た頃の自分と同じ顔ができていると、思っていた。だが、違っていた。そう思い込みただけだったのだと、指摘されて

気付いた。使用人達と冗談を言い合っていても、こんなにも温かな女将の優しさに触れても、皆がいたときのように笑えない。やはり、胸の穴は空いたままだった。自分は世界に、たった独りだった。「ルヤ、聞いているかい？」

宙を見詰めて、時が止まったように動かないでいたルヤを、女将が顔を曇らせて覗き込んでいた。

「あ、ごめんなさい……何ですか？」

「……だからね、暫くここにいたらどうだって言ってるんだよ」

「え？」

「気持ちが悪くまで、何だったら、元気になってからも、ずっとここで働いて暮らしたっていいんだ、一人くらいなら、使用人を増やす余裕はあるんだからね」

言って、女将はおどけて胸を突き出し、拳で叩く真似をした。

だが、ルヤは笑わなかった。予想だになかった申し出に、呆然と女将の笑顔を見返す。

先のことをどうするか、具体的に決めていたわけではなかったが、どちらにしても早いうちにここを出るつもりだった。まさか、こんな都合良く、幸運な話が舞い込むなどは、考えてもみなかったのだ。

「ここに……」

「今回のことは簡単に割り切れることじゃないし、悔しいかもしれないけど……ゆっくり時間を掛けて、また、一から始めたらいいじゃないか……そうすれば、いつか、元のように穏やかな気持ちになれる日が、きっとやってくるよ」

柔らかな微笑みを湛えた女将の言葉を聞いていると、本当に、いつか、そんな安息が訪れるのかもしれないと、そう、思った。母親のように優しく、心強い彼女の懷に飛び込んで、全てを預けて、この宿で、皮肉屋の主人と口喧嘩しながら、面倒見の良い使用人達と力を合わせて働きながら、一日一日を紡いでいけば、いつか、ここが、仲間と旅をしていたときと同じ大切な場所に、掛け替えのない

家に、なっていくのかもしれない。

そんな自分を、思い描いた。

そういう自分も、あるのかもしれない。

そして、その先に、ジェドルの言う、振り返ったとき残る何かだ
って、あるのかもしれない。

思い浮かべるこの宿での穏やかな暮らしは、もう、二度と手に入
らないと諦めていた幸せの世界に余りにも似ていて、他の全てを投
げ打ってでも、今すぐに頷いて、女将の手を握って、その胸で泣き
出してしまいたかった。

そうすることが出来たなら、どんなに楽だろうと、どんなに、救
われるだろうと思った。

だが、その衝動を寸前のところで相殺する、投げ出せずに最後ま
で残った感情に気付いて、ルヤは、その、家族にもなれそうな、大
好きな人の手を握ることが出来なかった。

優しい明日を遮るように過ぎったのは、黒いローブの少年の、白
い顔。

仲間を――出会った出来事ひとつひとつに怒り、悲しみ、喜び、
泣き、笑い、夢を語っていた彼らの生命を、何の痛みもなく踏み躪
った、湧き上がる殺意の対象。そして、無表情で、生きることによ
ら執着しない、空虚の中を彷徨う、けれどその中で、誰かを、何か
を探している、心を失った迷子。その二つの顔を同居させる、一人
の少年の姿が、自分と、幸せな世界との狭間に、立ち塞がっていた。
彼がいる限り、その存在を覚えている限り、もう自分は、心から
穏やかになど、本当に幸せになど、生きられない気がした。そして
きっと、二人の僧に連れて行かれる少年の後ろ姿を黙って見送った
としても、たとえこの手で迷子の子供を殺したとしても、以前のよ
うに、自分の心が完全に満たされる日は、もう、やってこないのだ
ろう。

だが、それでも、考えなければならなかった。

自分の生き方を決める前に、その先の幸せを夢見る前に、世界か

ら色を消し、唯一の色として残ったその存在に取るべき対応を。血まみれになっても、叫び狂いそうでも、目を逸らさずに見詰めて、選り取らなければ、視界を奪われて、何処へも、歩き出せないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7829v/>

世界を飾るもの

2011年10月9日03時20分発行